
get back

zero

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

g e t b a c k

【Nコード】

N 6 3 8 9 M

【作者名】

z e r o

【あらすじ】

組織との決着をつける前夜、そして……
終末に向かう二人の運命は、新たな始まりの運命に向かって動きだす。

これは名探偵コナンのいわゆるコ哀、新志、の話になります。苦手な方や嫌悪感を抱く方はご遠慮ください。

原作コミックス68巻までの情報で書き始めています。

z
e
r
o

意味は無い

いつも見慣れている風景とは、どこか違って見えるようだった。

帰宅途中の学生。買い物帰りであろう主婦。なにやら急いだ様子のスーツを着た中年男性。寒さも気にせず遊んでいる子供。これだけを見ればいつも通りの夕刻なのだが。

少し歩かないか？

特に断る理由もないので、私は無言で頷いた。季節はすでに冬だが、今日は特に冷え込んでいる。

白いダウンジャケットを羽織り、クリーム色のマフラーを首に巻いて彼と共に家をでる。特に喋ることもなく、灰色のビル群を背景にした住宅街をゆったりと歩く。

ひゅうと強い風が頬を叩き身を縮こませる。手袋もしてくればよかった、と思い両手を口の前ですりあわせた。

「寒いな」

「ええ……」

余り時間はたっていないのに空は暗くなり始めていた。周辺の家
に光が灯る。

あの灯りの中にいわゆる『日常の幸せ』といわれるものがあるの
だろうか……。

また強い風が吹き肩をすくめる。

「かなり冷え込んできたな。そろそろ帰るか」

「そうね。このタイミングで風邪でもひいたら大変なもの」

彼は苦笑しながら、確かに、と漏らしながら足を阿笠邸への道に向ける。

「そついえば彼女に連絡したの？」

「蘭か？　してねえけど……。なんで？」

それは、と言いよんでいると。

「明日が終わればいつでもできるさ」

彼は笑顔でこたえた。そうよね、と返しまた沈黙する。暫く歩いていると、ハラリと白いものが空から落ちてくる。

「どおりで寒いわけだ」

私たちは足を止めて空を見上げた。

しんしんと落ちてくる雪から目を離せずにいると右手に温もりを感じ、彼の方を見る。彼も同じように空を見上げている。眼鏡のレンズに雪が落ち水滴になっている。

再び顔を空に向け、右手に少しだけ力をいれるとすぐに反応がくる。

こうして傍にいるのも、今日で終わりだ。

覚悟はしていたはずだ。全てが終われば彼女の所に帰っていくのだと。今更何を怖がっているのだ。自分にできる事は、明日全てを終

わらして彼を元の姿に戻すことだけだ。

今、繋がれている手には別に特別な意味など何も無い。

雪が舞い散る空を見上げながら、もう一度心にカギをかける。

それが悪あがきだとわかっけていても……。

離さぬように

博士の家に帰った時にはすっかり体が冷えてしまっていた。家の中に入ると、博士が部屋を暖かくし、風呂の準備もしてしてくれた。

「灰原、先に風呂入ってこいよ。体、冷えちゃっただろ？」

「そう？　じゃあお先に」

マフラーをとり上着を脱ぐと、足早に部屋を出て行ってしまった。もう少し早く帰ってくるべきだったかなと反省しつつソファに座る。窓から外を見るとすっかり暗くなっていた。

「新一、外は暗くなっておるから蘭君に連絡したほうがいいじゃないのか？」

「やっべ……そうだった」

博士の指摘を聞き、慌ててコナン用の携帯電話を手に持つ。

案の定、

今どこにいるの！

早く帰ってきなさい！

泊まるんだったらもっと早く連絡しなさい！

などとお叱りをつけ、適当に返事をして電話を切り、深い溜め息を吐いた。視線を上げると博士苦笑しながら俺を見ていたので、思わず俺も苦笑した。

さて夕飯の準備でもと腰をあげたが、以前手伝った時に言われた辛辣な言葉を思い出した。

「あなた、手伝うつもりなの？　それとも私の邪魔をしたいのかし

らっ。」

……うん、あいつに任せよう。どうせ今夜はすぐに眠れないだろうし、少しぐらい夕飯が遅くなってもかまわないだろう。

なんとなくもう一度窓から外を見る。階段を登り二階の大きな窓に近づくと、雪はまだ降っていて庭にある木の枝が少し白く見えた。視線を遠くにやると、街灯で照らされた周りの家の屋根も少しずつ白くなっていて、夜にもかかわらず外は明るく感じた。

こうして落ちてくる雪を眺めていると、いつの日かの事を思い出す。

灰原が撃たれたと連絡をうけたときは、自分はいったい何をしていたのだと後悔した。鮮血を流し、赤く染められた雪の中心に倒れている大人の姿の彼女を見たときは、走ってきて速くなっている鼓動がさらに大きく跳ねたのを覚えている。

何故さつき灰原の手をとったのかと問われると、不安になっている自分が無意識にしたとしか答えられなかった。

また彼女を危険な場所に連れて行くこうとしている事に……。今度はそんな事のないように……。

意外な事に抗議も抵抗もされなかった。なんとなく離しづらくなり、そのまま帰宅したのだった。

遠くでドアの開く音がした。俺はひとつ息を吐くとコーヒーをいれる為にキッチンへと足を向けた。

心の片隅に小さく生まれていた感情に、俺はまだ気づいていなか

つ
た。

考察

彼に促されて着替えを取りに部屋をでた。正直、一息いれたかったが、さっきまで自分の手が彼に包まれていたのだと思うと、なんとなく顔を合わせずらかった。

シャワーのノブを捻り、頭からお湯をかぶる。冷えている体が徐々に体温をとりもどす。手早く体を洗い、バスタブに浸かる。

余り時間はたっていないのに逆上せそうだった。お湯に浸かったまま身を乗り出し蛇口を回す。流れてくる冷たい水を掌で掬い顔を洗う。それだけでまた体温が下がったような感覚になったが、お湯につかり直す気にはならず、そのままバスルームを出た。

脱衣場へのドアを開くと、そこはリビングよりも気温が低く、ひんやりとしていた。だが、今の自分には丁度よく、心が落ち着いてくる。

「まったく……」

自分は呑気なものだと、思わず自嘲の笑みがこぼれた。

部屋着を着て、その上から厚手の茶色いパーカーに袖を通し、リビングに向かう。彼は二階にいたようで、階段を降りてきているところだった。

「お先」

「ああ」

彼は足止めずに返事をし、そのままキッチンに入っていく。

ふとソファのほうを見て、先程自分が身に着けていたダウンジャケットとマフラーが目に入る。それを手に取り、地下室に戻しにく。

階段を上がるとコーヒーの香りがしていた。彼が用意したらしい。コーヒーメーカーから湯気がでてている。私は彼の向かい側のソファに腰掛けた。

「夕飯まだなの……」

「ん？ ああ……まあいいだろ。あんまり腹へってねえし。オメーもだろ？」

「というより食欲がないわ」

俺もだよ……、と言葉を残し、彼は立ち上がってキッチンへ向かった。

珍しいと思った。らしくないとも。いつも自信満々で、一人でも困難に立ち向かって突き進んで行くのに。どんなに危険だと警告しても何事もないような顔をして。そして帰ってくるのだ。

しかし、今の彼は不安な面持ちこそ見せないが、やはりいつもとは少し違うようにみえた。

当然よね……。

そんな事を考えていると、両手にコーヒーを持って彼がこちらに歩いてきて、私の前にその一つを置く。

「どつも」

「ま、ここに来た時はいつもお前に淹れてもらってるし、たまには、な」

「探偵事務所ではコーヒーなんて、それもブラックなんか飲めないものね」

「まあな。外食の時とかはそうでもないけど」

「……あなたそれ、大丈夫なの？」

「大丈夫だって。それに今更気にする事でもないだろ？」

「……そうだったわね」

「どうせマセたガキぐらいにしか思ってねーよ。最初こそ不思議な顔されたけど、最近じゃ普通だし」

最後に言った言葉に呆れつつ、溜め息をなんとか我慢する。

正体がバレそうなんだ、と何度か騒いでいたが、そういう所には気を使わないのだろうか？

確かに捜せばコーヒーを好む子供はいるだろうが、不審に思われない為にも避けるべきである。だが、たかが一杯のコーヒーを飲むために苦勞をしているのは、自分に責任があるので何も言えない。それに、指摘したとしても本当に今更だ。と、思いたい……。

一瞬脳裏によぎった考えを振り切り、コーヒーに口をつける。苦味が口内に広がり、不安と一緒に飲み込みこんで、彼に言葉をかける。

「工藤君」

「あん？」

「解毒剤なんだけど、APTX4869のデータが手に入ってもすぐに完成するとはおもわないでね」

「どういう事だ？」

彼は試作品を何度か飲んで、耐性がつきつつある。いや、耐性があ

ることを前提にして薬を作ったほうがいいこと。元々私達は、副作用によって体が幼児化していること。恐らく薬のデータは膨大であること、等を説明する。

「そんなに大変なのか」

「たぶんね。今まで作った事のある試作品は、パイカルの成分と、私がいくらか記憶にあるデータを照らし合わせて作った物よ。もちろん完全な物とは程遠いけど……」。

それでも元の体に戻れた時間は最大で36時間弱。その後、それを改良した物をあなたは飲んだけど、効力は24時間程で、連続投与後は4時間程で効果が切れた。つまり」

「かなり時間をかけて、じっくり作らねーとヤベーってわけか……」

「簡単に言えばそうなるわね」

「そうか……」

「あと、元の体に戻れたとしても、ちょっとした間は検査をしたいから、しばらく外出できないと思っていて」

「……わかった……。なにか副作用がでる可能性は？」

「今の段階では何とも言えないわね。でも、そういう事のないように、慎重に作りたいわけ。」

「わかった」

彼は黙り込んで何か考え込んでいるようだった。

私は少しぬるくなったコーヒーを飲み、渴いた口と喉を潤した。

考察（後書き）

『最大で36時間弱』というのは私の勝手な考えですので、「注意下さい」

言葉

灰原は話し終わると手元にあつた雑誌に手を伸ばした。解毒剤に
関しての灰原の説明を聞き終わり、思考に沈む。

今までAPT-X4869や、その解毒剤については余り深く追及
した事はなかった。問い掛けたところで答えてくれるかは疑問だが、
以前、百錠くれ、と言った事があるが、心底呆れた顔をされたのを
覚えている。今聞いた話しの後では、浅はかで軽率な発言だったの
かもしれないと反省する。今更反省したところでどうしようもない
のだけれど。

解毒剤の耐性については、自分自身よく分かっているつもりだっ
た。しかし、自分の考えより事態は深刻な様子が灰原の話し方から
理解する。

よく考えてみれば、薬のデータが手には入ったとしても必ず解毒
剤が作れるという保証はない。出来たとしても、一年で効果が切れ
るかもしれない。或いは一カ月、一週間かもしれない。しかも自分
には、それに対する耐性ができつつあるのだ。だから長い検査期間
も必要なのか？

今まで楽観的に考えていたのだろうか。解毒剤を作る、というのは
かなり困難な事ではないのか。

俺は『工藤新一』に戻れるのだろうか。

死んでも戻ってくるから

不意に、いつか蘭に言った言葉が思い出される。

嫌な考えが頭の中に浮かぶ。

『死んでも』

不安をとばすように、軽くかぶりを振った。

「工藤君」

前方から声をかけられ、顔をあげる。

「大丈夫。絶対完成させるから」

俺の不安を読み取ったような言葉だった。無表情だがその瞳には力が宿っているようにみえる。

「灰原……」

「完成させるわよ……あなたの為に……」

「へ？」

じつと俺の眼を見てそう言った灰原から視線が外せない。

「あ、あの……」

「なーんてね」

「……は？」

灰原はくすくすと笑いながら持っていた雑誌に視線を落とした。

「……つたく、なんなんだよ」

呆れてそれ以上何も言えずに、何故か熱くなった頬を見られたくなくて顔を逸らす。だが、こうしていつものような言葉やり取りをしていると少し心が軽くなったような気がした。

ああ、そうか……と思い至る。不安な様子の俺を見て、あえてあんな風に言葉をかけてくれたのかもしれない。それが灰原なりの気遣いなのでは？いつもの様に振る舞って。だから今、読む気もしない雑誌を手にとっているのだろう。その証拠にその手は1ページも捲らうとせずに止まっていて、翡翠のその瞳はただ一点を見つめたまま動かない。

素直じゃねーやつ。

内心苦笑しつつ灰原が気遣ってくれたのが素直に嬉しかった。そして先程考えていた疑問の一つが解決する。

俺は解毒剤について楽観的に構えていたわけではないのだと。灰原を信頼していたから、漠然と完全に元の体に戻れるだろうと考えていたのだ。

それこそ楽観的と言われるかもしれないが。

初めて会った時は信頼などとは程遠いものだった。今こうして同じ空間にいることが不思議に思うくらいに。しかし一緒に小学生として過ごすうちに悪い人間ではないとすぐに分かった。

奴らとやりあって、探偵団と色んな場所に行つて、その先で事件に巻き込まれて、そしていつの間にか信頼していたのだ。

今思えば最初に会った時に相当ひどい事を言ってしまった記憶が

ある。

生まれた時から組織の中に身を置き、両親の愛情も受けられず、その優れた頭脳を利用され、たった一人の肉親の姉を殺されて……。

灰原に選択肢などなかったのだ。この世に生を受けた時から組織という枠組みに入れられていたのだから。

『もうあなたに人殺し呼ばわりされたくないもの』

いつか言われた言葉が今になって重く胸にのしかかった。

念の為

私の言った冗談に彼はブツブツ文句を漏らしながら何やらまた考え込んでいる。もう一度声をかけるべきかと考えていたら、彼はすくりに立ち上がり、風呂入ってくる、と残っていたコーヒーを飲み干し部屋を出て行った。

彼が黙り込んでいたのが気になり、からかい半分に声をかけたのだが……。どうやら余り効果はなかったようだ。

からかい半分……。

さっき言った言葉は嘘ではない。彼を元の体に戻すのが私の役目だ。

彼の為に。彼を待っている彼女の為に。自分が作った薬で彼の人生を狂わしてしまったのだから。

私にとっては、それが……。

そういえば先程から博士の姿が見えない。ぐるりと部屋を見回してみたがりビングにはいないようだ。自室にでもいるのだろうかと考えていたら、タイミングよく博士はドアを開けて姿をあらわした。

「哀君、そろそろ夕飯の準備でもするかね？」

「あ、ごめんなさい。工藤君も私もまだあんまりお腹すいてなかったから、少し遅めでもいいかなって……博士の事すっかり忘れてたわ」

「なんじゃ、二人もそうじゃったか」

「どうやら博士もらしい。」

「ところで、なにしてたの」

「なに、ちよつと電話をしとつたんじゃ。それより新一君の姿がみえんが」

「今お風呂に入ってるわ。工藤君があがったら博士も入っちゃって。その間に夕飯の支度するから」

「すまんのう、いつも哀君にまかせつきりで」

「いいのよ。これくらい」

私は二つのコーヒーカップを持ってキッチンへ向かった。

軽めの夕食をすませ、食後のコーヒーを飲み終わる頃に彼は思い出したように声をあげた。

「あ、博士。メカのメンテナンスしといてくれよ」

「それなら昨日やっておいたが……」

「一応だよ、一応」

彼はそう言つと玄関に靴を取りに行き、腕時計、ベルト、蝶ネクタイといつしよに博士に手渡す。心配性じゃのう、と呟きながら博士は部屋を出る。

「昨日みてもらつたんなら大丈夫じゃない？」

「さつきも言つたる。念には念を、つてやつだよ」

「まあ、これからは必要なくなるというわね」

「ああ。でもあの腕時計と、この眼鏡は便利だから……」

「……………」

「あー、お前の分の麻酔銃も頼んでくるよ」

「はいはい」

彼は今までかけていた眼鏡を手に持ち部屋を出て行った。

見えない

うまく誤魔化せただろうか。探偵顔負けの洞察力を持っているので、怪しく思われてないか心配だったが何も言われなかったので大丈夫のようだ。

扉を数回ノックをしてから博士の部屋に入る。

「博士」

作業をしている博士の背中に声をかける。

「ん、なんじゃ。いくらワシでもそんなに早くは……」

「ちげーよ。眼鏡渡すの忘れてたからさ」

「おお、そうか」

「あと灰原の分の麻酔銃もみといてくれよ」

「ああ、わかっておるよ」

「それから……ちょっと頼みてー事があんだけど」

ベッドに入ったときには日付がもう変わろうとしていた。眠気はまったくなかったが睡眠をとらないわけにもいかず、床についたのだ。といっても俺はソファに寝転がっているのだが。だが暗くなつた部屋で横になり瞼を閉じると緩やかに意識は遠のいていった。

眼をあけるとここ何ヶ月かみていない天井が眼に入る。探偵事務所でもなく、博士の家でもなく、自宅の自分の部屋。視線を上の方に向けるとカーテンが揺れている。窓が開いているようだ。カーテンが揺れるたびに日の光が部屋の中に漏れる。

眩しい。

眼が眩み、手を翳^{かざ}そうとするも体が動かない。すると白く透き通った肌を持つ腕が俺の視界に入った。光を俺の眼から遮ってくれる。

だれだ？

そのままその腕は俺の髪をとかしていく。伸びていた腕の方に視線を動かす。誰かいるようだが、なぜか顔がよくみえない。

だれなんだ？

目を凝らしてもやはりその人物の顔はぼんやりとしていて、はつきりしない。

だが恐怖は感じなかった。

その手はひどく心地良くて安心を覚える。

その心地良さに再び瞼を閉じようとした時、不意にその手が離れた。

部屋から出て行くようにしている。

まっすぐくれ。

だが声がでない。体を起こそうとしたが指先すら動かない。声にはならなかったが、その人物は立ち止まりこちらを振り向いた。

が、やはりその顔は靄^{もや}がかかっているようにぼんやりしている。すぐにその人物は背中を向けてドアノブに手をかけ、静かに扉が閉められた。

最後までその人物は誰かわからなかった。

目が覚めると部屋はまだ暗く、時計をみると眠ってからまだ2時間程しかたっていないかった。

変な夢だな。

頭に感触がやけにはつきりと残っている。その感触を思い出しつつもう一度眠りにつくとうとして、ふと横をみる。鼾^{いびき}が聞こえていたの
で博士は眠っているようだ。隣のベッドに視線を移す。

「!?!」

勢いよくその身を起こす。ベッドに灰原の姿がない。

まさか……あいつ！

周りを見回してもその姿は確認できない。焦って立ち上がり、とりあえず地下室に、と駆け出そうとした時、二階のカーテンの一つが少し開いているのに気付く。外の街灯の光が細く差し込んでいて、そこに小さな人影が立っているのが見えた。

ホッと息を吐き、博士を起こさぬように静かに階段を上った。

「眠れねーのか」

急に声をかけたせいかわいらしい表情で素早く俺の方に振り向く。

「……びっくりさせないでよ」

灰原はそれだけ言うと窓の外に視線を移す。

「そりゃオメーだろーが。いなくなったら心配すんだろ」

「心配しなくたって逃げないわよ」

「俺が言いたいのはだなあ……」

「はいはい。わかってるわよ。眠れなかったからちよつと外を見てただけじゃない」

心配していた自分が馬鹿らしくなり、柵に背をもたせて座り込んだ。

何故か俺と視線を合わそうとしない。

「いつから起きてたの」

「え、今さっきだけど……」

「……ふーん……」

「何だよ。どうかしたか」

「別に……」

なにやら煮え切らない言い方をされて気になったが、聞いたところでうまくはぐらかされるだろうと思いついて追及しないでおく。

「あ、あのさ……」

「………何？」

やたら長い間があつてから返事が飛んできた。

「わるかったな」

「え？」

ようやくこちらを振り返る。外からの光で顔は見えないが、たまらず顔を逸らして風呂に入る前から考えていた事を言う。

「最初に会った時にさ、オメーにひでー事言っちゃったたる……俺……だから」

「ああ……いいわよ別に。本当の事だし」

「いや、それは……」

「気にしてないわ。それに……私もだし……」

「え？」

「お姉ちゃんの事で八つ当たりしちゃったもの……あなたに……だからお互い様よ」

「い、いや……俺は別に……それにあの時は俺がもっと早く……」

「いいの。あなたが気にすることじゃないんだから」

穏やかな口調の灰原に何も言えなくなる。

「それに、今更、でしょう？お互いに？」

「ハハ……そうだよ、な」

どう考えても俺の方がひどい事を言った気がするが、灰原自身がつう言ってくれるのでなんとか自分を納得させる。

なんとなく気まずくなってしまったので話しを逸らす。

「お前何かやりてー事とかあんのか」

「なによ、急に」

「全部終わったらさ、どうすんだ？」

「どうする、って……決まってるじゃない……」

「なんだ？」

「犯罪者のとるべき道は一つしかないじゃない」

「……そんなもん俺がなんとでも」

「庇うつていうの？ 探偵のあなたか？」

「それは……」

「それに、あなた言ったじゃない。逃げるなって。これが私の……
犯罪者の運命なのよ」

いつか自ら死を選ぶとした灰原に言った言葉だった。確かにあの時は、その後の事も含めてそう言った。

最近になって感情をよく見せるようになった。なにがきつかけになったのかは分からないが、いい傾向だと思っていた。

なのに……。

そこだけを切り取ってしまえば、こいつの言う通りなのかもしれないけど。

でも、それが彼女の運命だなんて。余りに残酷すぎる。

「じゃあ……なんか欲しいモンとかねーのか？」

「ないわ」

「……ちよつとは考えるよ」

予想していた答えが返ってくる。

「なんかねーのかよ。俺が用意してやるからさ」

「どうしてあなたにそんなこと……」

「いいから考えろよ。なんでもいいぞ」

相変わらず窓からの光で顔はみえないが、溜め息が聞こえたので呆れた表情をしているのは簡単に想像がついた。

「無理よ」

しばしの沈黙のあと灰原は言い放つ。

「なにが」

「あなたには無理よ、って言ってるの」

「はあ？ なんだよそれ。俺が用意できねーって事がよ」

「そう。絶対に無理」

そんな風に言われ、俺も少し意地になる。

「いいから言ってみろよ。なんとかすつから」

すると、少し黙り込んでいたが、やがてゆっくりと近づいてきて俺と視線を合わせるようにしゃがみこんだ。

「な、なんだよ」

「無理なのよ……」

灰原は俺の頬に指を滑らした。

「灰原……？」

「だって……あなたの瞳には、彼女しか映ってないんでしょう？」

なんだ？

なんの話してるんだ？

俺は何が欲しいかと聞いていたはずだ。

彼女？

蘭のことか？

俺の瞳には？

……え？

「お、おまえ……」
「なーんてね」

ハイ？

「……おい」

「あなたって簡単に引つかかってくれるわね」

「おまえ今日二回目だぞ、それ」

「あら、正確には今日になってからは一回目よ？」

「……相変わらずいい性格してやがんな。オメー」

「それはどうも。じゃ、私もう寝るわ。おやすみ」

「……オヤスミナサイ」

どうやらまたからかわれたようだ。何ともたちの悪い冗談をかましてくれる。

階段を降りている灰原を睨むように見る。

暗くてよく見えないはずなのに、その瞳は哀しげに揺れているように見えた。

なんとなくその場を離れられなくて、灰原の触れていた頬に手をあてる。

俺の頬に触れていた灰原の手は、どこか懐かしいような気がした……。

そうだとしても

無数の足音が入り組んだ通路に響きわたる。

此処までの道程を頭に叩き込みながら走り抜く。だがそれもそろそろ限界だ。どこも同じような場所ばかりで流石に頭が混乱してくる。

足を止めて一緒にここまでできた数人の捜査官に、息を整えながら声をかける。

「ちょっと待って。闇雲に進んでも迷っちゃうだけだよ。みんな帰りの道覚えてる？」

「今のところはね。でも、こう似たような場所ばかりだと流石に参るわね……」

ジヨディ先生がそう零すと他の捜査官も同じようなことを口走る。

どうする？

正直『俺達』としては、このまま進んでしまいたい。まだ目的の物が見つかっていない。しかし、あの薬の事を余り知られたくはなかった。

「ジヨディ先生。このブロックの制圧はほとんど完了してるんだよね」

「え？ ええ、ほぼね。でも……」

「じゃあ、先生達は他のブロックの応援に行ってあげて」

「先生達は、って……コナン君はどうするのよ」

「……まだ探し物が見つからなくてね」

俺の言葉にジヨディ先生の表情が怒りに変わる。

「なに言ってるの。いくらあなたでもこんな所に一人残してなんかいけないわ。だいたいあなた達を此処に連れてくること事態が……」
「一人じゃないわ。二人よ」

早口で俺を責め立てるジヨディ先生を灰原が遮った。

「ちょっと……あなたまでなに言いだすの。それにあなたは命を狙われてるのよ」

もっともな意見だが此処にいる時点で全員が危険だ。灰原一人を狙って、ということはないだろう。

「大丈夫だよ。ほとんど制圧は完了してるんでしょ？ だったら探し物するだけなら問題ないよ。それに優秀な捜査官達を、僕達の護衛だけにつけるなんて、もったいないからね」
「だけど……」

視線が俺から灰原に移る。

「私も大丈夫よ。それに何かあつたら江戸川君が守ってくれるらしいから。……ね？」
「ハハ……」

緊迫した雰囲気をぶち壊すように半笑いを浮かべると灰原に乾いた笑いがでる。

「あなたたち、ねえ……」

どうやらジョディ先生達もそのようで、大きく溜め息を吐いてうなだれている。

「携帯も繋がるようだし、もし危なくなったらおとなしくどこかに隠れてるからさ」

場の空気が少しだけ和らいだのもう一言追加する。

「……わかったわ。でも絶対に無茶はしないで。何かあったら必ず連絡するのよ」

わかったよ、と俺の返事を聞いてから、くるりと背中を向けて今きた道を引き返していった。

息をついて肩の力を抜く。すると隣から声がかかった。

「で？ ジョディ先生達を追い払って、何をするつもりなのかしら？」

「何を、って……。さっきも言っただろ。探し物だよ」

「それだけだったなら護衛がいてもかまわないじゃない。それに、ジョンが捕まったって報告はまだないんでしょう。今護衛を外すのは危険すぎるわ」

なるほど。先程は話しを合わせてくれたらしい。

「……じゃあなんでお前は話しを合わせてくれたんだよ」

「決まってるじゃない。みんなが反対したら、あなたいつの間にかひとりどこかへ行っちゃうもの。で、どうするつもりなのよ」

俺の行動パターンは読まれているらしい。しかし、ここで議論をしている暇はない。

「……あの薬のデータを見られる訳にはいかねーだろ」
「……なにが言いたいのか」

どう説明すればいいのかわからず、思わず言葉に詰まる。

「恐らくFBIは私が誰なのか気づいてるわ。ただ確信をもてないだけで……。だから今更どうする事もできないのよ」

灰原の言っている事はあたっているだろう。それどころか確実に灰原を知っているだろう人物に心当たりがある。

ここで口にすることはできないが……。

「大丈夫。あなたの事は伏せておくから」

「そんなの無理にきまって……」

「でも、ありがとう」

俺の言葉を見無視するように灰原はぼつりと漏らした。

「あなたがそう思ってくれてるだけで、私は充分よ……」

はっきりとした口調でそう言った灰原の顔は、覚悟を決めている表情だった。いや、そんなものづくにできていたんだ、こいつは。

覚悟できてないのは俺の方、っつか……。

「なに情けない顔してるのよ」

「な、別に情けねー顔なんか……」

「なに？ そんなに私がいなくなるのが寂しい？」

緊張感の欠片もないその発言と態度にだんだん腹が立ってくる。

「……行くぞ」

「あつ、ちよつと……」

強引に灰原の手をひいて近くの部屋の扉へと向かった。

探偵としての

「ここでもないか……」

幾つめかの部屋に入り、粗方探し終えた頃に思わず口にでた。

「そのようね……次、行きましょ」

「なあ、ここにあるパソコンから薬のデータをとれないのか」

「やめておいた方がいいわ。なにかしら仕掛けがあるかもしれないし」

「でもそれじゃあどれを使ってもいつしよなんじゃ……」

「私はここに来たことないけど、薬の研究はこつちでも進めていたはずよ。ただ、私が研究を中断した時から、薬の開発が滞った状態なら……」

「薬の研究に使われていた場所が、その頃のまま放置されていて、なんの仕掛けもしていない可能性が高いってわけか」

「確証はないけどね。それに私が組織を抜けてから随分たつし、簡単にアクセスできないと思っておいた方がいいわ」

「でもこのだだっ広い場所から探すのかよ」

「たまらず愚痴を零す。すると灰原はデスクに置いてあったファイルを一つ手に取り開いてみせた。」

「これはAPTX4869のデータではないけど、別の薬のものよ。たぶんね」

「それで」

「薬品関係のものが見つかり始めたということは、この周辺に私達の目的の物があるかもしれないってこと」

「それも確証はないんだろ」

「否定はしないわ」

なんとも齒痒いが灰原の意見に従っていたほうが賢明なようだ。

「さ、行くわよ」

「おう」

重たい扉を開き、薄暗い通路にでる。屋内だということにとっても寒く反射的に身を竦める。

それから幾つかの場所を搜索し、ある一つの扉に行き着いた。

扉を開けるとそこは今までとは違い小さな六畳ほどの部屋で少々古いタイプのパソコンが数台並んでいる。右側の方には大きな棚が置いてあり、実験器具が所狭しと並べられている。

「ここだな」

「たぶんね」

俺は直感的にそう感じた。灰原も同じらしい。

灰原は並べられているパソコンの一つを起動させた。キーボードには少し埃がかぶつてあるので最近は使用されていないのが見てとれる。俺は灰原の横に立ち、モニターを覗き込みながら質問する。

「これ、ちゃんと使えんのかよ？」

「動いてるって事は問題ないんじゃないの」

キーボードを叩く音が狭い室内にやけに大きく響く。

「それより、かなりスムーズにいきそうよ。ホントに無警戒だった

みたいね」

それを聞いた俺はもう一つの目的の為に灰原の隣のパソコンを起動させる。

「ちょっと、なにしてるのよ」

「あー、ちょっと調べものを……」

「それ、答えになってると思ってるの」

「まっ、いいからお前は作業を続けろって」

適当に誤魔化してマウスを動かす。ここまできた以上、薬のデータを手に入れてそのまま帰るということはできない。

「あつたわ」

「よし」

灰原はデータのコピーをとり始めた。

「また焼けちまわねーだろーな？」

「……」

灰原は俺の軽口には反応せずに作業に移る。なんとなく不思議に思ったが、気にせず俺も向き直ってモニターを睨みつける。

暫くして俺の目的のものを発見する。

思わず笑みが漏れる。

そこまでの道のりを頭に刻み込みながら携帯を手に持った。

バカ…

「もしもし、ジヨディ先生」

いきなり子供の声色で喋りだしたので少々驚いて彼の方に顔を向ける。電話をかけているようだ。

「 違つよ。探し物が見つからなかったから、ここまで迎えにきてほしいんだけど、そっちはどのあたりにいるの？」

まったく何を言い出すのか。

「 そつか。うん、大丈夫だよ。誰にもあわなかったし、今いる場所に隠れてるから」

彼は二言二言喋りここの場所を伝えると、じゃあね、と電話を切ってしまった。

「 どういうつもりよ」

「 聞いてたたる。迎えにきてもらうんだよ」

「 そうじゃなくて」

私が何を言いたいのかわかってるくせに。そんな彼の態度に苛立つて思わず声が大きくなる。

「 ……薬の存在を知られるわけにはいかない」

「 そんなことできると思うの？ それに私達が何を探しているかだつて……」

「 ああ……もしかしたら見当がついてるかもな。だからこそ、この

薬のデータを渡すわけにはいかない。例えFBIにも。いや……FBIだからこそ。お前だって分かってるだろう？」

確かに薬の存在が知られば利用しようとする者が出てくるだろう。FBIは『集団』だ。その中に自らの欲で利用しようとする者が現れないとは言い切れない。そしてそうなってしまった場合、発端がFBIだとすると事態はかなり深刻になる。それに私達は薬の貴重なサンプルとも言えるのだ。私はともかく、彼にこれ以上首をつっこませるわけにはいかない。

だが薬の存在が知られても、データがなければただの夢物語にすぎない。しかし……。

「何も話さずに私を帰してくれるとでも？」

「……それはジョーディ先生に頼み込むしかない。個人的にな」

結局のところ、結論は私と同じらしい。

私としては、私の事、APT X 4 8 6 9の事、組織の事を話すかわりに、解毒剤を作る時間と彼の検査期間を貰えるように『頼む』しかないと思っていた。

もう一つ重要な事も。

だが彼は薬の存在をも隠しておこうとしているらしい。確かにそれが最善の策だ。

うまくいくとはおもえないが……。

彼に返事をせずにモニターに視線を移すと一枚目のコピーが終了していた。それを彼に手渡す。

「なんだよ。お前が持つてるよ」

「保険よ。私がそれを紛失させてしまっても、破損させてしまってもかぎらない。だから私とあなたで一枚ずつ」

「なるほどね……。で、後はもう一枚コピーをとって終わりか？」

「まだよ。一応APTX4869自体も抑えておきたいの。それからデータの消去ね」

「じゃ、後はお前一人でも大丈夫だな」

振り向くと既に立ち上がってなにやらニヤついている。それと同時に彼が使っていたパソコンのモニターが視界に入る。一気に全身の血の気が引いた気がした。

「あなた、まさか」

「ああ。ちよつくら行ってくるわ」

彼はそう言い放つと背中向ける。私は立ち上がって思わず彼の手を握る。

「ダメよ！ やめなさい！ これ以上深入りしたら、あなた本当にもう後戻りできないわよ！」

「……もうおせえよ」

確かにもう手遅れなのかもしれない。だけど……。

「そうだとしてもよ！ 今朝も言ったはずよ！ 薬のデータを手に入れたらおとなしく……」

「大丈夫だって。お前は心配しすぎなんだよ。それにな、探偵が目の前にある真実をほったらかしになんかできねえだろ？」

いつもの憎々しい笑みを浮かべている。こうなった彼をもう止めることはできないだろうが、最後のカードを切る。

「……彼女のところに帰れないかもしれないわよ」

「大丈夫だよ」

はっきりと言った彼の顔には迷いは一切なかった。何も言い返すことができず、その顔を睨みつけながら強く手を握り締める。

「ジョディ先生達がいる所はここから少し距離がある。その間にお前のやるべき事をやって、ここでおとなしく待ってる」

彼は私の手からスルリと抜けて部屋を出て行った。

私は彼の出て行った扉を見つめながら暫く立ち尽くしていた。

もついいよね？

どのくらい時間がたっただろうか。暫く立ち尽くしていたが、私の仕事はまだ残っている。腹立ちはまだおさまらないがいつまでもこうしているわけにはいかない。

椅子に座り、背もたれに体重をかける。天井を仰ぎ見て深く息を吐いてからモニターに向き直った。

彼が使っていたパソコンには、彼が現在向かっているだろう場所への道のりが表示されている。

ここからだ結構な距離があるようだ。恐らくここには戻ってこず、そのまま脱出するつもりなのだろう。ジョディ先生達に、ここまで迎えにきてほしい、と言ったのもその為だ。私の為に……。

彼が行動にでる事は予想できていた。止めても無駄だという事も。今までいくら警告しても聞く耳もたずだったのだから。

彼の幼馴染の事が脳裏によぎる。

彼女は健気に彼の帰りを長い間待ちつづけている。たまにフラッと帰ってきたと思ったら、いつの間にかいなくなってしまっ。お互いに言いたい事を言えず。

それでも周りには悲しい表情を一切見せないで。それどころか、眩しい笑顔を見せている。

しかし、彼がもし帰れない事になったとしたら、彼女から笑顔が消えてしまうかもしれない。

いや、恐らく絶対に……。

やはり無理矢理にでも彼を止めるべきだった。そもそもそれ以前に此処に連れてくるべきではなかったのだ。でも、彼の言うように、たぶんもう手遅れなのだとということも分かって……。……。だけど、此処で手を引いておけばなんとかなったかもしれない、という僅かな望みもあって……。

いや……。

彼が薬を飲まされた時点で、もう深く関わってしまったのだ。

全て私の作ってしまった薬のせいで……。

室内が暗くなってハッと我に返る。スクリーンセーバーが起動していた。腕時計に目を落とすと、結構な時間がたっている。どうやらかなり長い間考え込んでいたようだ。

今は早く私のやるべき事を終わらせなければ。その後の事を考えるのはそれからだ。

二枚目のコピーをしている間に、机の引出しを開けてまわる。だが全部の引出しの中を探したが見つからない。

この部屋にはないのか？

後はあの大きな棚を調べなければ。時間がかかりそうだが、ジヨデイ先生達が来るまでに見つけなければならぬ。

棚の前まで近づき、手の届く範囲の場所を探そうとした時、乱暴に扉の開く音がした。

もうジヨデイ先生達が来てしまったのか？

しかし耳に入ってきた音声は一気に私の体を強張らせた。

「……またか……何でこんな所にガキがいやがる……？」

体が固まってしまったように動かない。しかし振り返らないわけにもいかず、全身の力を振り絞り声のした方に体ごと振り向く。開け放たれた扉の前には誰もいなかったが、扉の横の壁に寄りかかって座り込んでいる銀髪の男がいた。

「……お前……その顔は……」

「久しぶりね」

平静を装いながら後ろ手に麻醉銃のスコープを開く。

「フン……捜しても、見つからねえ、わけだ」

「それは残念だったわね」

そこから動く気配がない。よく見ると通路の蛍光灯に僅かに照らされて
いるその体からは、かなりの出血が見られ、呼吸も荒い。

「無様な姿だな……シエリー……」

「今のあなたには言われたくないわね」

「……………此処に来るまでもガキを見かけたが……お前がシエリー
ーだということは、あのガキも同じような存在か…………？」

見かけた、という事は彼はジンとは接触してないらしい。ホッと息
を吐きたいところだがなんとか我慢する。

「なんの事？ 出血多量で幻覚でも見たんじゃない？」

もうすぐジョディ先生達が来る。目の前の男は虫の息だが、連行さ
れる事を考えると、彼が幼児化した事を知られるわけにはいかない。
恐らく無駄だろうが。

「……………貴様がこの部屋にいるのはそういう事だろう……………どんな理屈
でそんな身体になっているのかは理解できねえが……………」

「悪いけど、あなたとお喋りしてる時間はないの。本当なら、今す
ぐあなたの口と鼻を塞いであげたいんだけどね」

質問には答えずに背を向け、麻醉銃のスコープをパチリと閉じる。
ジンはなんとか口を動かしているものの、身じろぎさえしない。此
処に逃れてくるのに精一杯だったようだ。

たぶん今言ったとおり、ジンの息の根を止めることは、この小さな
体でも造作もないだろう。

しかし、今は私がやるべき事をしなくては。

棚に向き直り、手当たり次第に引出しを開けていく。

「フン……姉の仇より、優先することがあるってわけか……」

思わず手が止まってしまふ。

そんな訳ない。お姉ちゃんの仇が目の前にいるのだ。それもかなり弱った状態で。

だけど……。

『お姉ちゃんは大丈夫だから……』

今は生きている彼の為にできることをしなければ。

憎しみに負けるわけにはいかない。

ジンの言葉は無視して搜索を続行した。

暫く搜索していたが手の届く範囲にはなかった。椅子を棚の近くまで移動させて、上の方を探そうとしたとき

「お迎えが来たようだぜ……」

開けっ放しの扉から足音が聞こえてきた。タイムオーバーというわけか。

部屋になだれこんできた数人の捜査官達は、ジンが此処にいる事に驚いていたが、抵抗できないであろう姿を見て緊張を少しといっているようだ。

ジョディ先生は硬い表情でジンが連行されるのを見ていたが、私を見るなり安堵した表情になる。

「大丈夫？」

「ええ、このとおり」

「コナン君は？」

彼の事を説明しなければならぬと思うと気が重いが、話さない訳にもいかなかった。

一通り説明すると、呆れたとも険しいともいえない顔をしていた。

「無茶しないで、って言ったのに……。仕方ないわ。コナン君が行った場所には捜査官も向かっているから、彼はそっちに任せて私達は脱出するわよ」

彼を追いかけたかったが許可されないだろう。彼はFBIに任せられない。

ジョディ先生と共に通路に出てから忘れ物に気付く。

「ちょっと待って。忘れ物しちゃったわ」

手早くお願いねと言うジョディ先生を残し部屋に戻る。パソコンの前に立ち、コピーが完了した薬のデータを取り出そうとした。が、その瞬間、大きな爆発音と共に強い揺れが襲う。室内にあった実験器具は耳障りな音をたてながら床に散らばる。それと同時に部屋の中は粉塵で一杯になった。

ジョディ先生の声が聞こえたが、やけに遠くに感じる。

知らぬ間に倒れていた体を起こし周りを見渡す。咳き込みながら粉塵でよく見えない室内に目を凝らした。机の上にあったパソコンは床に落ちていて、棚も横倒しになっている。

そして入口は瓦礫によって見事に塞がれていた。外で叫んでいるジヨディ先生とは裏腹に、データを彼にも渡しておいて良かったとか、データを消去する必要もなくなったとか。やけに冷静な自分が少し可笑しかった。

ああ、早くジヨディ先生に逃げるように言わないと。瓦礫で埋まってしまった入口に近づき声をだそうとした。

『灰原！』

外から彼の声がする。彼がなぜ此処にいるのかよくわからないが早く脱出させなければ。

『おい、灰原！ 返事しろ！ 大丈夫なのか！？』

「私は大丈夫。反対側の壁に穴が空いたからそっちから脱出するわ。あなたも早く逃げて」

『お前本当か！ 嘘ついてんじゃねーだろーな！』

「大丈夫よ。早く行って」

彼の怒鳴り声が次第に遠くなっていく。ちゃんと脱出できるだろうか。今心配なのはそれだけだった。

パラパラと天井から破片が落ちてくる。床に座り込んで瓦礫にも

たれかかった。

これでよかったのだ。結局は私にはこの道しかなかった。彼を元の体に戻す事は私にはできなかったが、薬のデータさえあればなんとかなるだろう。

私の役目は終わった。

「お姉ちゃん……私……好きな人の為に……頑張ったの……だから……」

また大きな爆発音がして、亀裂の走った壁がと崩れ落ちる。

轟音がする中でそっと瞼を閉じた。

離れた手

体が痛い

どこだ此処は

俺はいつたいどうしたんだ

最初に眼に入ったのは薄暗い部屋の白い天井だった。この独特な匂いは病院のようだ。

頭が回らない

俺はなんでこんな所に？

「気がついたようじゃの」

横から声がする。視線だけそちらに向けると、心配そうな面持ちで俺の顔を覗き込んでいる博士の顔があった。

「……博士……？」

とりあえず安心じゃわい、と呟いて表情を少し和らげている。どうして俺が病院で寝ているのか、理解できなかった。

「博士。俺……いつたい……」

と、何を聞けばいいのか言葉を詰まらせる。
まだ頭が混乱している。

俺の質問に博士は硬い表情になる。

「……君は脱出する際に建物の倒壊に巻き込まれたんじゃないよ……わしもまだ詳しい事はわからんのじゃが……」

建物の倒壊？

その言葉を聞いて徐々に頭が回りだす。

そつだ。確か俺は……

一気に意識が覚醒する

勢いよく体を起こすと、一瞬息が詰まる。背中が痛い。だがそんな事どうでもよかった。

「おいおい。まだ寝とらんと……」

「灰原……。灰原は！」

博士は眉間に皺を寄せ顔をそらした。

嫌な感覚が胸の中に広がっていく。

「おい博士！ 灰原は今どこにいるんだよ！」

思わず博士の服を引っ張る。

博士に怒鳴っても仕方ないということぐらいわかっている。だが今の俺にはそれしかできなかった。

「……今はわからんが……まだ見つかってないと言っておった……」

話しによると、少し離れた所で待機していた博士は、煙があがったのを見てたまらず近くまでビートルを走らせたらしい。

そしてジョディ先生から気絶していた俺を預けられ、病院へ連れて行け、と言われ今に至る、ということを簡単に説明してくれた。

「……ジョディ先生が言うには、哀君は恐らく建物の中に取り残された……と言った……」

博士の服を掴んでいた手から力が抜ける。

取り残された？

そんな事わかっている。

俺が聞きたいのはそんなことじゃない。

「ここは現場からどのくらいの距離だ」

「そう離れておらんが……」

とっさに追跡眼鏡のスイッチをいれようとしたが眼鏡をかけていない。薄暗い部屋を見回すと水の横に俺の着ていた服と共に置いてあった。

眼鏡を手に取り追跡機能をONにする。

しかし、レンズには簡易MAPが映されるだけだった。範囲を広げても俺の期待する光点は表示されない。

俺の服をひつつかみポケットから携帯を取り出す。
が、電池が切れたのか、壊れてしまったのか画面は暗いまま操作に反応しない。

「……博士。俺を現場まで連れてってくれ……」

「何を言っとるんじゃ。怪我は大したことないらしいが、君はまだ寝とらんと……」

「こんな所で寝てる場合じゃねーんだよ！」

早くあいつを探しに行かないと

ベッドを降りようとしたとき病室の扉が静かに開かれた。廊下の光が電気が点いていない部屋の中を少し明るくする。

「気がついたようね」

パタンと扉は閉められ部屋は再び暗くなったが、ジヨディ先生が部屋の電気を点けてパツと明るくなる。暗い室内に眼が慣れていたのでかなり眩しくかんじる。

「ジヨディ先生。灰原は？」

俺の質問にジヨディ先生は眼を伏せる。

心臓がうるさい

「……まだ見つかっていないわ」

その後の事は余り覚えていなかった。

ジヨディ先生に喚き散らしていたのが微かに記憶にあるが急に気が遠くなって、眼がさめたら朝になっていた。

暗闇の自宅

崩壊した建物の周りには警察やらレスキューやら野次馬やらでこった返していた。

顔を知っている刑事達を探したがこの人数では見つけれない。忍び込もうにも現場に近づくことすらできなかった。

結局俺と博士は車に乗り込み帰途につくしかなかった。

俺に麻醉銃を撃ち込んでから博士がジヨディ先生に聞いた話によると、脱出目の前所で落ちてきた瓦礫に俺と俺を抱えていた捜査官と共に下敷きになってしまった。が、幸いうまい具合に瓦礫の隙間になっていた所に俺達の体は入り込んで、事なきを得たという事らしい。俺を庇った捜査官も軽傷だったと聞かされて少し安心したがその時に背中を強く打った俺は気絶してしまい……ということらしい。

ほとんど記憶にあることばかりだが。

そして、恐らくあの崩壊では……

と、博士は黙り込んだ。

俺もその先は聞きたくなかった。

「蘭君にはわしの家に泊まると電話しておいたが……」
「……ああ、サンキユ……」

渋滞にひっかかりふと車の窓から外を見ると、もうクリスマスかと気付いた。

歩道の脇に植え込まれている木にはたくさんの電飾が飾られ夕焼けの街並みを鮮やかに照らし出している。洋菓子屋の前には簡素な台の上にケーキが入っているであろう箱が積まれていて、店員の若い女性二人がサンタクロースの格好をして道行く人に声をかけている。男女の二人連れや子供連れの中年女性がその前に立ち止まり何やら楽しそうに話している。

ブランド物のショップの前にはショーウィンドウに張り付いて食い入るように眺めている中高生や思いつめた顔で店の前を行き来している男性。男性は恐らくプレゼント用なのだろうが、この不景気の中では決心がつかないようだ。

んなもん気持ちだると内心毒づくが、やはり社会人になると違うのだろうか、とも思った。

飲食店も綺麗に飾り付けられていて、店内にもクリスマスツリーなどが置かれていることが想像できる。店の前にはやはりカップルであるう男女や、集団で固まっている人達などが話しこんでいる。この時期はどこにいても混雑しているので悩んでいるようだ。だが、みんなどこか楽しそうに見える。

歩いている人達も笑顔を湛^たえているようなのは俺の気のせいだろうか。

にぎやかな街は車の中とは別世界と思える程に遠く感じた。

やがてゆっくりと車が動き出し街は流れていった。

博士の家についたときには陽はもう沈んでいた。二日しかたつてないのになぜかとても久しぶりのような気がする。

広い家の中はとてもひんやりとしていて、博士がすぐに暖房をつけたが暖まるのに時間がかかった。

俺と博士はただ押し黙ってソファに腰をおろしていた。なにも喋る気にはならなかった。

ふと視線を動かすとファッション雑誌が眼に入る。たまらず顔をそむけて顔をあげると地下室へと続く扉が見える。

「博士。俺、隣にいるから」

「……ああ、連絡があったらすぐに知らせるよ」

博士の声を背に受けながら俺は玄関に向かった。

よく考えると変わった家が並んでるよな、と思う。所々外装が剥げていて暗い夜の中では不気味に見える。幽霊屋敷に見られるのも仕方ないのかもしれない。

大きな扉を開けて広い玄関を抜け暗いリビングを通り過ぎる。二階への階段をのぼり自室に入る。体が縮んでからも家の中に数回入ったが自室に入るのは本当に久しぶりだった。

暗がりの中でベッドに倒れ込む。

上着を脱ぐのも億劫だった。そういえば携帯を充電していない。いや、壊れてるんだっけか。時計を見ると21時になっていた。夕飯をまだ食べてないな。まあいいか。ちよっとベッドが埃っぽいかな。

俺の頭はどうでもいいことばかりを考えようと必死になっていた。

夢魔

無機質な通路をひたすら走る。

今のところパソコンで見たこの建物の全体図は正しいようだ。本当に正しいのかどうか疑わしいものだったが。

少し足を止め壁に寄りかかる。この小さな体ではどれだけ急いでも思った以上に進まない。慣れていたはずなのに今は改めてそれを実感する。呼吸もまだ整わない。走った距離はたいしたことないのだがそれに反するように脈をうっている。

いつまでも休んでいるわけにはいかない。

大きく深呼吸をして再び走り出そうとした。

だが……。

『……またか……何でこんな所にガキがいやがる……？』

急に近くに聞こえた音声に身構えて後ろを振り向く。だがその姿は確認できない。周りを見回してみてもやはりその声の主はいなかった。

背中に冷たいものが走る。

『久しぶりね』

大きく舌打ちして来た道を引き返す。今からじゃ間に合わないだろうとかは頭になかった。

俺は油断していたのか。それとも高をくくっていたのか。ジンがまだ捕まっていないことは分かっていたのに。この周辺はほぼ制圧しているということに安心しきっていた。

眼鏡を通して聞こえてくる音声に集中しながら全力で走る。

焦っている俺とは裏腹に灰原の声はどこか落ち着いているような気がする。

どうなっているんだ？

『…………… 此処にくるまでにもガキを見かけたが…………… お前がシエリ
ーだということは、あのガキも同じような存在か……………？』

見かけた？

此処に潜入している子供なんか俺と灰原しかいない。つまり俺はジンが近くにいたのに気づかなかったというのか。それらしい殺気は感じなかったのに。

『なんの事？ 出血多量で幻覚でも見たんじゃない？』

嘲笑うかのように聞こえた灰原の言葉はどこか余裕があるように感じた。どうやらジンは重傷のようだ。とりあえず灰原の身は安心だが、同時に別の不安がよぎる。

『悪いけど、あなたとお喋りしてる時間はないの。本当なら、今すぐあなたの口と鼻を塞いであげたいんだけどね』

今の灰原の言葉を信じるなら最悪の選択を選ぶことはなさそうだ。

『フン…………… 姉の仇より、優先することがあるってわけか……………』

なにか恨みでもあるのか。いちいち灰原を挑発するような発言に腹が立つ。

それきりどちらの声も聞こえなくなり不安が募っていく。ガタガタと何かの音しか聞こえなくなった。

走り続けていた足がもつれはじめたころ、ジンの声と共にまた別の音声が聞こえてきた。どうやらジョディ先生達が到着したようだ。少ししてから灰原の声も聞こえてきたので足を止め膝に手を置く。

もう大丈夫だ。

すぐそこまで来てしまったので合流したほうがよさそうだ。

乱れる呼吸のまま歩きだそうとしたとき強烈な振動で床に倒れ込んだ。

一瞬なにが起こったのか分からなかった。とりあえずジョディ先生達の所に行かなければ。

俺の眼に飛び込んできたのはさっきまで俺もいた部屋の前で大声をだしながらうろたえている捜査官達だった。

嘘だろ？

嫌な予感的中した。灰原が中に閉じ込められている。

灰原に呼び掛けてみたものの、大丈夫だから行け、と冷静に言う。

ふいに視線が高くなる。

「離せ！ 灰原がまだ中にいるんだぞ！」

別のルートから脱出すると言っていたが本当とは思えない。眼鏡のスイッチを入れると光点が表示されているが動きが遅い。俺が離れて行っているだけだ。周りの轟音と捜査官達の声のせいなのか眼鏡からは何も聞こえてこない。

レンズに映っていた光点は、あっけなく消滅した。

自分の叫び声で目が覚める。

心臓が激しく打っていて息が苦しい。ヒーターもつけず、毛布すらかぶっていないのに全身に汗をかいていて気持ち悪い。

いつの間に眠ってしまったのだろうか。

ベッドの枕元においてある電気スタンドをつけて腕時計をみる。

まだ一時間もたっていないかった。

汗を流したくてシャワーを浴びたが着替えがないことに気づく。

仕方ないので工藤新一のセーターを着た。それだけで足元までスッポリと俺の体を包み込んでいる。少し寒いが部屋を暖かくすれば問題ないだろう。明日博士に着替えを頼まなければ。

コーヒーを淹れて自室に戻る。シャワーを浴びる前にヒーターをつけていた為すでに部屋は暖かい。電気をつける気にはならず点けっぱなしになっていた電気スタンドの横にコーヒーを置き、ベッドに座る。

もう一度眠る気にはなれなかった。また同じ夢を見てしまいそうで。

俺は手を離してしまった。

『ヤバくなったらオレがなんとかしてやっからよ!』

「……………」

『守ってくれるんでしょ?』

「……………」

あいつは怒りながらも俺の心配をしていた。俺の手を強く握り締め、引き止めようとしていた。なのに俺があいつの手を離してしまった。

俺があいつを置き去りにした。あんな場所にあいつを独り残してきてしまった。あのとき俺も残っていれば何か違ったんだろうか。もしかしたら今も独りにいるのかもしれない。

淹れてきたコーヒーには口をつけず、俺はひたすら朝がおとずれるのを待った。

どうでもいい

「新一、ちゃんと寝ておるのか？」

「……………そういつ博士こそ……………」

ジョディ先生からなんの連絡もないまま一週間が過ぎた。

自宅に引きこもっている俺を気にして博士は簡単な食事を持ってきてくれている。ほとんど喉を通らないけれど。

「そろそろ一回帰ったほうがいいんじゃないのかの」

「俺が帰ったところで年明けの雰囲気をぶち壊すだけだよ……………」

いま蘭には会いたくなかった。いくら俺がいつも通りのフリをしたって蘭は気づくだろう。

「冬休みの間は博士が預かるとでも言っといてくれ」

「かまわんが……………いつまでもこうしてる訳にはいかんじゃろ」

「もう探偵事務所に居候する意味はなくなったんだ。丁度いいかな」

「そりゃそうじゃが……………」

「ごちそうさま」

博士が持ってきてくれた食事にはほとんど手をつけないまま席をたつ。食事といってもレトルトばかりだが。

ソファに座りテレビをつけると、どのチャンネルをいれても同じニュースばかりやっている。

「もう一週間もたつのにのう」

いつの間にか博士もソファに腰かけている。

「原因がまったく不明だからな。マスコミが飛びつくのも無理ないさ」

正月だったのにニュースを延々とやっている。当然の事なのかもしれないが。

「転校、という事にしたほうがいいかの？」

誰の？ とは聞けなかった。

「……………どっちにしたってそうなってたんだ……………」

例えあいつが今ここにいたとしてもいずれはそうなる。あいつにしても、俺にしても。

「……………君はどうするんじや……………」

学校になんか行きなくなかった。あの三人がひどく落ち込むのは目に見えている。そんなあいつらを気遣う余裕が俺にあるとは思えなかった。逆にあいつらを傷つけてしまってもいいかもしれない。

「ついでだ、俺も転校したことにしてくれ……………」

「……………わかった」

てっきり反対されるものだと思っていたのに、あっさり賛成したので拍子抜けする。何でだろう、と思ったが別にどうでもいい。

「冬休みが終わる前におっちゃん、と蘭には俺から言っよ」

「その後はどうするんじゃ？」

「こっちに移るよ」

「じゃがこの家には……」

「あのひとならもういないよ」

詳しく説明しなければならぬが今はそんな気分ではない。

そういえばあいつにも説明してなかったな……

この家に置いてある大量の本を全部読み直せば時間はいくらでもつぶせるだろう。

博士の家にはとてもじゃないが居られない。

あいつがいた痕跡があるあの家には。

ソファに座り雑誌を読んでいる姿が見えるような気がして

今にも欠伸をしつつ地下室から出てきそうな気がして

俺はこれからどうするんだろう？

他人ごとのようにそう思った。

二人の行方

まだ暗い中ベッドから抜けだす。窓から日の光が入ってくるのはもう少ししてからだ。

洗面を済ませてから台所に向かう。年明けから、色々な事がありすぎて私の頭はまだついていってない。朝食の準備をしながらも私は別の事で頭がいっぱいだっただ。はっと我にかえり材料を少し冷蔵庫に戻す。

年明けは久しぶりに家族三人ですごした。コナン君はずっと博士の家に泊まると言っていたので呼び戻そうとしたが、コナン君は優しい子ね、とお母さんが言ったので気を使ってくれたのだと気づいた。

コナン君がご両親のところに戻ると言い出したのは本当に急のことだった。博士の家から帰ってくるなり話しがあると切り出したのである。

コナン君は終始笑顔だったけど、いつもの笑顔とは違っていた。眼鏡の奥の瞳は悲しい色がうかんでいて、愛想笑いだということは明白だった。

最初は友達と別れるのが辛いんだと思っていたが、今は少し違うように思えた。

今思えば二週間程前に家を出て行った時とは明らかに雰囲気が変わっていた。

冬休みが終わり、学校から帰ったときだった。始業式だけで早めに家につき昼食の準備をしようと思っていたら、三人の子供達が訪ねてきた。三人は涙目になりながら、コナン君はどこいったの、と尋ねてきたのだ。

「え？ コナン君から何も聞いてないの？」

「知らない。今日学校に行ったらコナン君も哀ちゃんも転校したって先生が……」

「哀ちゃんも？」

「……うん」

そう言っただけ少女は泣きだしてしまった。

「コナン君。送ってくよ」

「ごめん、蘭姉ちゃん。ちょっと寄るところがあるから。それに博士に送ってもらおう事になってるんだ」

「そう……」

「ごめんね。お父さんもお母さんも忙しくて挨拶にこれなくて。落ち着いたら連絡するから」

てつきり探偵団のみんなにお別れをしにいくものだとばかり思っていた。でもそれは違っていた。
それに哀ちゃんも転校したなんて。

それから博士に電話してみたけどずっと留守電のままだった。家にも行って見たが、外からみるかぎり人がいるような気配はなく、何度インターホンを鳴らしてみても博士が姿をみせることはなかった。

何かおかしい

けれど、それがなんなのかは私には見当もつかなかった。

訪問者

相変わらずの人の多さにうんざりする。何回経験しても慣れることはない。

場所が場所だけに仕方ないが。

肩をぶつけながら人混みの中を縫うように進む。タクシー乗り場まで着いた時には疲労感がさらに襲ってくる。やっとのことでタクシーに乗り込み行き先を告げるとドカッとシートにもたれかかった。何の連絡もないのでいてもたってもいられず飛行機に乗り込んだのだが。

「お前は来ないほうがいい」

「せやけどやなあ」

「ここから先はお前だけじゃなく、お前の周りの人にも迷惑がかかるかもしれないんだ」

「そんなんお前からかていつしょやろ」

「俺と灰原は当事者なんだぜ？俺達が行かなくてどうすんだよ」

「……………」

「わりいな、服部。でもお前だからこそ、これ以上は……………」

数週間前の電話での会話が思い出される。ついて行く、と言う俺に工藤は諭すように拒否した。

確かに工藤の言うことはわかる。一般人の俺が関わることではないのだ。

でも、簡単には納得できるものではなかった。
しかしもし俺と工藤の立場が逆だったのであれば、やはりそうして
いたのかもしれない。

窓の外を見ると久しぶりに見る街並みがみえてくる。
連絡をまで、と言われおとなしくしていたがもう限界だった。工藤
の携帯は電源が切られているようで繋がることはなかった。阿笠の
じいさんにも。

工藤もねーちゃんも大丈夫なんか……

住宅街に入り、白い大きな家の前でタクシーを止める。既に日は
傾きかけていてその白い壁をオレンジ色に染めているように見えた。

インターホンを鳴らしても人がでてくる気配はない。大きな窓には
全てカーテンが閉められていて中を窺うことはできない。携帯で家
のほうに電話をかける。微かにコール音が家の中から聞こえてくる
が、いくら待っても相手がでることはなかった。

電話を鳴らしたままイライラしながらインターホンを続けざまに押
す。

家にはおらんのか？

もし何かマズイ事態になっているのなら……、と思い探偵事務所では
なく先にこちらにきたのだが。どうしたものかと悩んでいたら静
かに扉が開かれた。

「服部君」

「じいさん、おったんかいな。連絡とれへんから来てもってんけど……」

「すまんのう。とりあえず中に入れてくれ」

どこか疲れた表情で俺を迎え入れたじいさんに嫌な予感のはしる。

「うそ、やろ……」

それ以上言葉が続かなかった。

淡々と感情のこもってない声で事情を聞いた後はただ黙っているしかなかった。

「ほんで……工藤は……？」

「あれから自宅にこもりっぱなしじゃ」

「あれから……もう三週間ぐらいたつねんで？ 毛利の姉ちゃんらが心配しとんのと……」

「江戸川コナンも灰原哀も両親のところに帰ったことになつとる」

「は？ ちょ、ちょーまてや。その……ねーちゃんとはとかく……工藤はどないすんねん。あのねーちゃんがおらんかったら工藤はもう……」

と、自分が言おうとした言葉に、さらに事態は大変な事に愕然とする。

工藤の体を元に戻すことができるのはあのねーちゃんだけ。

そのねーちゃんがおらんという事は……

「ああ、そのことが。今日君がきてくれたのは丁度よかったのかも
しねんの」

「どづいじつとや？」

「実はの」

作られた道

「よおー工藤。久しぶりやのー」

「……静かにしろよ……」

リビングのソファに寝転びながら小説のページをめくっていると、急に玄関の扉が開き服部と博士が入ってきた。持っていた小説を閉じ体を起こす。

「おお、スマンスマン」

「……ったく」

そういえば服部に連絡するのを忘れていたことを思いだす。我慢できずにこっちに直接来たのだろう。

「せやけどごつつい本の量やのー」

「……まあ、座れよ」

博士と一緒にきたということは全部知っているのだろう。それにも関わらずいつも通り接してくれている。今はそれがありがたかった。

そういう奴だもんな……

服部と博士はテーブルを挟んで俺の向かい側にあるソファに腰を下ろす。

「コーヒーでいいか？」

「ああ、わしが淹れてくるよ」

博士は今座ったばかりの腰を上げ、キッチンへと向かっていった。博士の姿が見えなくなったのと同時に服部は真剣な表情をしながら俺を見る。

「……………全部聞いた」

「……………そっか」

それきり俺達は喋ることなく博士が来るまで黙っていた。事情を知っている服部はあれこれ聞いてくることはないだろう。それが本当に楽だった。

蘭とおっちゃんに、親のところに戻る、と言うだけで自分でもわからないぐらいに動揺していた。それを悟られないように無理矢理笑顔を貼り付けていたが、たぶん気づかれていたはずだ。

なんで？

（なんで独りで置いてきたの？）

どうして……………そんな急に

（どうして助けてあげなかったの？）

蘭は何も知らない。でも蘭の言葉は全部俺を責め立てているような気がして。まったく関係のない話しをしているのに。被害妄想もいいところだ。

博士がコーヒーを俺の前に置いたことで我にかえる。

「今日は新一君に大事な話があるんじゃない」

「なんだよ」

博士は少し考え込んでから一つのカプセルをテーブルの中央に置いた。

「これ……」

「わしが作ったものじゃよ」

「……でも、どうやって」

「君が持ち帰った薬のデータと、哀君

久しぶりに聞くあいつの名前に心臓を鷲掴みにされたような感覚になる

が残しておったレポートを参考にしてな」

「薬のデータ……?」

あれから薬のことなど頭になかった。いわれてみれば俺は薬のデータを持っていたんだった。

あいつがいないから元の体に戻れないかもしれない、とかは頭から飛んでいた。

「そつか……博士が……」

博士が解毒剤を作ったことに驚きはしたものの、どこか納得している自分もいる。同時に今まで博士に対して感じていた疑問もなんとなく分かった気がする。

「家にこもってたのはこれを作ってたからか」

「食事はこっちにきて俺と一緒にとるが、それ以外は博士も家にこもっていた。」

「サンキュ、博士……でも俺は……」

「哀君は君のために必死じゃったよ」

博士は俺の言葉を先読みしたように遮った。

「俺の、為？」

「ああ。君の体を小さくしてしまったことに、随分責任を感じていたようじゃ。表にこそだしておらんかったがの。徹夜で解毒剤の研究をしていたのは君も知っておるじゃろう？」

確かに夜更かしして解毒剤の研究をしていたことは知っている。でもそれはあいつ自身の為でもあったので気にしていなかった。

そういえば一時的に元の体に戻った時も、あいつは苦言を吐きながらも協力してくれた。

でも

「あいつ、俺の前では……全然そんなふうには……」

「君のまえではそんな姿を見せることはできんかったんじゃろう。」

「薬を作ったのは哀君じゃからな……。じゃが頼れるのは君しかおらんかったからのう。だから君に甘えてしまわんようにあんな態度をとっていたんじゃないかの……」

「頼れる……」

『とにかく、しっかり守ってあげなさいよ！新ちゃんだけが頼りな
んだから……』

「なあ、工藤……」

今まで黙っていた服部が口を開く。

「いつまでもこうしとるわけにはいかんやろ？ 江戸川コナンはも
うこの街には存在せんのやったら、出歩くこともできんひんで。お
前ずつとこの家に閉じこもっとくんか？」

「俺は……別に……」

「お前が今辛いんはようわかる……。元の体に戻んのか悩むのも。
せやけどあのねーちゃんはお前の為にここまで頑張ったんやで……。
文字通り、命懸けでな……」

「……少し……考えさせてくれ……」

溢れるほどの

夕食を済ませ工藤の家を出たときは外はすっかり暗くなっていた。夜空を見上げてみたが雲がかかっているようで星の一つも見えない。

それはまるで……

ふう、と息を吐き門を押し開ける。家の前をスーツを着た男が通り過ぎていく。自分も一般的な企業に勤めることになれば、帰りはこんな時間になるのだろうか、などと考えながら隣の家の門を押し。そんなつもりは毛頭ないが。

「スマンなあ、じいさん。泊めてもらて」

「なあに、かまわんよ」

久しぶりに電気をつけたわい、などと言いながらキッチンへと向かっていった。

ソファに座り改めて部屋の中を見渡すと整然としている。何日もそのままのだろう。ベッドも皺一つなく使用していないのがわかる。テーブルにも少し埃がかぶっているようなので、近くにあった布巾で拭いてやる。

工藤の体を元に戻す薬を作るのに一日の大半は地下室にいたのだろう。

「すまなかつたの」

紅茶を淹れたカップを両手にじいさんは戻ってきた。

「俺はなんもしてへんて」

一緒に工藤を説得してくれ、と言われたがほとんどじいさんが喋っていた。

「いや、君には感謝しておるよ。わしも、新一君もな」

と言いながら俺の前に紅茶を置き向かいのソファに静かに腰をおろした。

「工藤も？」

「ああ。いつもより食事を多めに食べておったからの」

「……あれで多めかいな……」

工藤の食べた量は多いなどは程遠いものだった。

いつもの眼鏡を外しているその顔は一切の感情を無くしてしまったようだった。口調はいつも通りでも無表情のまま、眼の下には隈をつくり眠れていないの是一目でわかる。

今の工藤の胸中など誰にも推し量れるものではないだろう。

「ま、かなり時間はかかるやろうな……」

「そうじゃのう……」

じいさんもや、と思ったが口には出さない。工藤の為に気を張っているのだろう。

余り会ったことのない俺でさえ辛いのに、この二人の悲しみは相当

深いはずだ。

紅茶を一口掬い、そういえば、と思いだした。

じいさんが工藤を説得している時にふと思ったことがある。

「なあ、じいさん……。ひよっとして……。あの小っこいねーちゃん
は工藤のこと……」

「……今となってはわからんがの……」

今まで工藤への責任感から、あのねーちゃんは協力していると思っ
ていた。

だがじいさんが工藤にした話しを聞いた後では少し違うように思え
た。罪悪感からだけでそこまで工藤の為にするだろうか？ 工藤の
体を元に戻す薬を作るならば、薬のデータを手に入れた後にやれば
いいことだ。

もしそうであれば今までどんなおもいで工藤に協力していたのだろ
うか。恐らく体が小さくなってしまってから一番近くにいたはずだ。
たぶんお互いに。

ならば工藤が毛利の姉ちゃんの事を大切に想っていることも知って
いるはずで。逆に毛利の姉ちゃんが工藤の事を待っているのも知っ
ていて。

だから工藤の為に自分の感情を押し隠し、工藤を元の体に戻して、
毛利の姉ちゃんのところへ送り届けようとしていたのか

全部工藤の幸せを願って

自分の作った薬で二人に辛いおもいをさせているから

自分の身を危険にさらしてまで

それほどまでの工藤への……

全て俺の想像にすぎないけれど。

でもさっきのじいさんの口振りからはたぶんそうだということだ。

ぐっと胸が締め付けられるようだった。

これは工藤には絶対言つたらあかなあ……

口が裂けてもこんなこと工藤には言えるはずがない。

今工藤はギリギリのところを彷徨っている。これを知れば工藤の心に一生モノの傷をつけることになるだろう。自分に好意を持っているたかもしれない人が、自分の為に命を落としたと知ってしまったえば……

ねーちゃんは工藤の為に必死やったんやな……

でもな……

死んでもたら意味ないで……ねーちゃん……

冷めてしまった紅茶を飲み干して、大きく息を吐いた。

逃げへの選択

ベッドに突っ伏したまま博士の言葉を反芻する。

時計をみると服部達がこちらで夕食を済ませ隣の家に帰っていつてから既に四時間ほどたっていた。

久しぶりに騒がしい食卓だった。ここの所ほとんど博士がコンビニで買ってきたものばかりを食べていたことを知り、ちゃんとしたもん食わんかい！ と叱られてしまった。

だが俺達に三人分の食事が作れるはずもなく、結局近くの店に注文することになったが。

食事中も服部は黙ることはなく、喋りっぱなしだった。今まで大阪で関わった事のある事件のことや、剣道の試合のこと、幼少時代のことなど、俺が聞いたことのない話ばかりだった。たぶん話を選んでくれていたのだろう。

久しぶりの和やかな雰囲気博士もいつもより笑顔を見せているようだった。そんな二人を見ていると心が穏やかなものに少し満たされていくのを感じた。

でも、たぶんそれは一時的なものだと心のどこかではわかっている。すぐに現実を叩きつけられることもわかっていて。

でもそれを手離すことなんかできなくて。

いちばん大事なものを手離しちまったってのにな……。

いちばん？

まあ、一番の理解者とも言えるもんな……。

そういえば……。俺はあいつのことを理解してやれていたんだろっか？

組織に身を置いていたことは知っている。姉さんを殺されたことでも、それだけだ。あいつ自身が何も話さそうとしなかったから俺も深くは追及しなかったし、気にもしなかった。

以前あいつの姉さんが残していたカセットテープを俺が聴こうとしたとき、あいつは声を荒げながら止めようとした。これ以上の深入りは……などと言っていた覚えがある。

結果的には俺が望んだ内容ではなかったが。

そういえばあいつと最後に交わした会話もそうだった。もう後戻りはできなくなる、と言っていた。

あいつは俺を関わらせたくなかったのか。いや、関わらせないようにはしてくれていたのかもしれない。これ以上は駄目だと。

もしそうだとしたら……。

俺はあいつのこと何もわかってやれてなかったんだな……。

それなのに俺を頼ってたってののかよ？

博士が言っていたことは正直信じられなかった。

俺の自分勝手な行動のせいであいつは……。探偵がどうか、真実がどうか以前に、ただ自分の欲求に逆らえなかつただけだ。そんなものの為に俺は。

こんな自分に頼ってた？

何を？

どこに頼るってんだ？

やっぱり信じらんねーよ……。

『哀君は君の為に必死じゃったよ』

俺の為？

馬鹿な。

『完成させるわよ……あなたの為に……』

いや、でも……あの後、なーんてね、とか言ってたし……。

なーんてね。

あれがあいつの精一杯の気持ちの伝えかた……だったのか？

『仲間外れの危険人物…私の場合…案外勘違いじゃないかもしれな
いわね…』

『何もかも忘れてブーイングの届かないどこか遠くへ…逃げられる
んだもの…』

いや違う。

だってあいつは……。

『だって……あなたの瞳には、彼女しか映ってないんでしょう？』

違う。

違うに決まってる。

あいつはそういう意味で言ったんじゃない。俺をからかったただけだ。
そうだ、そうに決まってる。

強く頭を振ってから立ち上がる。気分を変えたくて窓の側に立っ
た。

住宅街は既に灯りはなく、街灯の光だけが点々と連なっている。
視線を近くに移すと、家の前を人影が通り過ぎていく。

日付はもう変わっているのに社会人はご苦労なことだ。それとも
上司に付き合わされていたのか。あるいは今まで遊んでいた若者だ
ろうか。

あと数時間もすれば空は明るくなってくる。もうしばらくで学生達もここを通っていくのだろう。解毒剤を飲めば俺もそこに混じることになる。

俺がこれからとるであろう行動は単にこの状況から逃げ出したいだけかもしれない。本当に正しいのかどうかなんてわからない。

でも、それがあいつの望んだことならば……。

俺はそう思うことで正当化しようとしていた。

目覚めた朝は

昨日だけでなんともめまぐるしい一日だった。

飛行機に乗り東京にきて、事のあらましを聞き、じいさんが薬を作ったと聞かされて、工藤があんな状態で。

身体はともかくやはり精神的に疲れていたのだろうか。目覚めた時には九時をまわっていた。

ソファから体を起こし大きく伸びをする。もう一つあったベッドはどうしても使う気にはならなかった。

「おはよう、服部君」

じいさんは既に起きていたようだ。

「おはよーさん」

まだ眠い目を擦りながら応答し、立ち上がる。

日の光が閉じられたカーテン越しに室内を明るくしている。恐らくずっと閉めっぱなしだったのだろう。

開けてやるうかとも思ったが、自分がここにいることを誰かに知れないほうがいいだろう。俺を知っている人が訪れないとも言えない。

家主に任せるべきと思い洗面所に向かう。冷たい水で顔を洗うと一

気が目が覚める。それがやはり現実なのだ俺に思い知らされるようだった。

「朝食は新一君の家に行つてからになるんじゃないか……」
「かまへんで」

話しによると工藤はあれから一度もこちらの家には足を踏み入れてないと聞く。気持ちはわからないでもないが少し疑問に思われた。

もしかしたら俺達に話してない、何か、があるのかもしれない。今の工藤を問い詰めることなんてできないが。

上着を羽織り玄関に向かおうとしたときインターホンが鳴った。思わず二人で顔を見合わせ動きを止める。

自分にはこの家に訪ねてくる人間なんてわからない。思いあたるのはじいさんがよく面倒をみている子ども達か毛利の姉ちゃんか。今日は休日なのでありえる事だ。

「とりあえずでてくるわい」

まあ、もしそうやったら俺がフォローしたらんとな

事情を知っているのにじいさん一人に押し付けるのは心苦しい。ソファに座り対応を待つことにする。全く知らない人間の可能性もある。

玄関の方でドアが開く音がする。

「し、新一君……」

戸惑ったようなじいさんの声が聞こえてきた。

「と、とりあえず早く中に入るんじゃ」

足音が聞こえ、じいさんと工藤が姿をあらわした。

何も分かってなかった

驚愕した表情の博士に背中を押され家の中に入る。

博士の家に入るのはあの時以来だ。やはり少し足が竦む。だがこちらの方が博士も何かとやりやすいだろうと思い、インターホンを押した。

「く、工藤……」

「……おはよう」

やはり服部も眼を見開いて驚いている。

「久しぶり……やなー……」

「昨日も聞いたぜ……それ……」

呆然としたまま服部が放った言葉に内心苦笑する。らしいと言えはらしいのだが。

「博士。とりあえず検査とかしたほうがいいんだろ？」

隣でつつ立っている博士を促す。俺としてはどちらでもいいけれど。

「あ……ああ、そうじゃな」

漸く博士は地下室に足を向ける。一番見たくはなかった場所だが仕方ない。いつまでも博士に迷惑をかけるわけにはいかないのだから。

階段を降りて扉を開けると、最後に見た時とほぼ変わらない光景だ

った。違うのはキーボードの周りにファイルが山積みになっていることぐらいだろうか。

視界に入ったランドセルは見えないふりをする。

俺はパソコンデスクの後ろにあるソファに腰かけた。リビングにあるものとは違い硬い感触だ。

博士はパソコンを起動させキーボードを叩きつつ俺に顔を向ける。

「いつ飲んだんじゃ？」

「約三十分前だ」

本当はもう少し早くこちらに来るつもりだった。一睡もせず朝を迎えたが、元の体に戻る時の負担を考えて睡眠をとるべきだと思ったのだ。結局はいつもの悪夢のせいでもほとんど眠れてないが。その後、汗を流したくてシャワーを浴び、こちらに来る頃にはこんな時間になっていた。

まだ俺の姿を見られないほうがいいとは思っていたが、博士にこれ以上心配をかけたくなかったので家の周辺に人がいない事を確認してこつちに来たのだった。

「わりいな……朝からバタバタさせちまって……」

「かまわんよ。ちようど君の家に行こうととったところじゃからな」

パソコンのモニターを見ると空欄のデータ表のようなものが映しだされている。

赤血球数、白血球数、血小板数、ヘモグロビン量、白血球分画、末梢血塗抹、全血質……。他にも様々な単語が表示されている。

「とりあえず採血じゃな。と言ってもそれぐらいしかやることかな」

いんじゃないかな」

「そうなのか？」

「わしがやれる事には限りがあるからのう」

博士が俺の血液を小型のシリンダーに数個分け封をしている時に服部が部屋に入ってきた。手にはマグカップが三つ置かれた盆を持っている。

「血い抜いたんか？ 別のんがよかったか？」

「いいよ……たいした量じゃねーし」

服部からコーヒーを受け取り、両手を温めるように包み込む。

「すまん。服部君」

「かまへんで。で、どないやねん？」

博士は服部からマグカップを受け取り一口掬い、座っていた椅子を回し、体ごとこちらに向き直った。

「まあ、今のところは問題無いようじゃ。結果がでるのに時間が必要なものもあるから、まだ断言はできんがの」

「そうか。まあ、俺にはよくわかんねーから博士に任せるしかねーけど……」

「わしもたいした事はできんがの……」

やはりこの薬に関してはあいつじゃないとよくわからないのだろう。

「せやけど、どないな仕組みなんやろな。えー、アポトキシン……ちゆうたか？」

「わしがわかる範囲で説明するとじゃな……」

硬い表情の博士に俺と服部も黙って顔を向ける。

「APT X 4 8 6 9 のアポとはアポトーシスのことじゃと哀君は言
つておった」

俺も以前聞いたことがある。

「アポトーシスとはプログラム細胞死のことじゃな。細胞膜の構造
が変化し、核が凝縮する。そしてDNAを細かく断片化され、細胞
が小型のアポトーシス小胞と呼ばれる構造に分解される。これを誘
導するものがAPT X 4 8 6 9 には含まれているんじゃ。そしても
う一つ。テロメアーゼと呼ばれるものじゃ。人間の生殖細胞、幹細
胞意外での活性はほとんど見られないものなんじゃが、これをあら
ゆる細胞で活性させるものが含まれていたようじゃ。テロメアーゼ
活性が低い細胞は、細胞分裂ごとにテロメアの短縮が進んで、最終
的にヘイフリック限界に達し、細胞分裂が停止してしまうんじゃな
じゃが活性を高めることによって細胞分裂の寿命を延長するんじゃ。
さらにどういう作用かは分からんが細胞の増殖能力を高める成分も
含まれていたんじゃ。つまりアポトーシスによって急激に早められ
た細胞分裂を、テロメアーゼ活性によって細胞の増殖能力を高め抑
制しようとしたんじゃな。アポトーシスにより細胞死すると同時に、
テロメアーゼ活性によって細胞を増殖させ、細胞の寿命を延長させ
ておった。これらがどう作用したかは分からんが、新一君は体が縮
んだ……いや、幼児期の頃の細胞に戻ってしまったという訳じゃな」

ふう、と息を吐き博士はコーヒーを啜る。

全く頭がついていかない。途中聞いたことのある単語はでてきた
が、それらが何がどうなつてとかは理解できなかった。

ソファの肘掛けに腰を降ろしている服部の顔を盗み見ると訳が分

からんという顔をしている。

「まあ、わしも資料に書いてあった事を説明しとるだけで全部理解しとるわけじゃないんじゃないか。一つ言えるのは、君ら二人が幼児化したのは本当に奇跡のような確率だったんじゃないよ」

確かにその通りだろう。だがそんな事より一つの疑問が浮かぶ。

「なあ……博士。そんな薬の解毒剤なんて作れるもんなのか？」

自分で可笑しな質問をしていると思ったが、今の説明を聞かされた後には聞かすにはいられなかった。

「まあ、たぶん無理じゃな」

当たり前のように博士は答えた。

「どづいことだよ」

「薬のデータだけでは恐らくわしには作れんかったよ。もちろん哀君の残しておったレポートもじゃが」

ますます意味が分からない。

「君は解毒剤を服用せずに元の体に戻った事があるじゃろ？」

「あ……」

博士が言わんとする事を理解する。俺は思わず服部の顔を見た。

「な、なんやねん」

「いや……すげえな……お前……」

はあ、と怪訝な顔をしている。

「もしかしたら哀君は分かっておったのかもしれない……じゃからパイカルの成分を調べて解毒剤を作ろうとしていたのかもしれない

……」

「そう……か」

やはり俺は何も分かっていなかったのだと痛感した。

何も分かってなかった（後書き）

本文に書いてあるAPT-X4869の事に関しての内容は全てデータ
ラメですのでご注意を

それっばい単語を羅列しているだけですので……

失った日常

鏡に写る制服に身を包んだ自分の姿は、まるで俺そっくりの別人を見ているような気分だった。

あれから十日間検査を重ね、特に問題は無いと博士は判断した。ただし、これからも継続的に検査は必要らしい。学校には行っていいらしいが無理は禁物とも言われた。

相変わらずジヨディ先生からの連絡はない。口にこそださないが、それが答えだということは俺も博士も分かっていた。

だからこちらから連絡をとるのは怖かった。はっきりと言われるのが。

だから博士は学校に行くように勧めてきたのだろう。気分を少しでも変えたほうがいいと。大阪に帰った服部にも言われたことだった。

コーヒーだけを胃に流し込み鞆を掴む。玄関の扉を開けると凍えるような寒さに身を竦める。コートを取りに戻ろうかと思ったが、面倒くさいので別にいい。

空はどんよりと曇っていて今にもガダガタと落ちてきそうな厚い雲がかかっている。

久しぶりに外を歩く。視界に入ってくる家並みは今までより目線が

高くなり、元に戻ったのだと改めて実感する。

住宅街を抜けて大通りにでると人が多くなってくる。小学生、中学生、高校生、社会人。だが目的地に近づくにつれ、見慣れた制服を着ている高校生ばかりになってくる。

それと同時にチラチラと視線が向けられている。俺を見ながらにやら囁きあっている女子生徒もいた。

鬱陶しい……

今まで気にしなかった……いや、むしろ優越感さえ抱いていた周りのその行為は、今の俺には苦痛でしかなかった。

懐かしいとさえ思える校舎が視界に入る頃には、団体になってこちらを見ている者達さえいた。

歩く足を速め校門を通り過ぎる。下足箱で靴を履き替えて階段をのぼり、教室へ向かう。

ドアを開ける手が躊躇われる。恐らく俺が教室に入れば騒がしくなるはずだ。だがそれ以上に俺を躊躇わせる大きな理由があった。

意を決して静かにドアをスライドさせる。

クラスメート達はまだ俺には気づいていない。自分の席につこうとしたが、数ヶ月休んでいたの前とは違っているかもしれない。

「なあ、俺の席どこ……？」

仕方なく近くにいた男子生徒の背中を叩いて問いかける。

「はあ？ なに言ってる……く、工藤？」

驚いた表情で放った男子生徒の言葉に、授業前の騒がしかった教室がシンと静まり返った。

「工藤！」

「工藤じゃねーか！」

口々に俺の名前を叫びながら俺を取り囲む。予想はしていたことだがやはり煩わしかった。

適当に質問を遮り窓際の一番後ろの席に腰をおろした。これ以上の質問は受け付けられない、という意味をこめ窓の外に視線を移す。

空は黒い雲に覆われていて以前暗いままだ。

クラスメート達はそんな俺の態度など気づかない様子で、興奮気味に質問してくる。

ああ……やっぱり……

ここに俺の居場所などない。元の体に戻って学校に通えば、以前の俺に戻るかもしれないと思った。

江戸川コナンじゃなかった以前の俺に。

あいつと出会っていない俺に。

あいつを知らない俺に。

でもそんなものただの幻想だ。

俺はただ逃げようとしただけだ。

なあ、お前もこんな気持ちだったのか……

大切な人を亡くし……

自分の姿が変わり……

自分を全く知らない人間の中に放り込まれ……

俺も以前経験したはずだった。江戸川コナンとして小学校に初めて行ったときに。

しかしその時とは絶望的なまでの違いがあった。

お前は平然としてたな……

『あなたがいたもの……』

そうか……

お前がいないんだな……

ここには俺と同じ状況の奴なんか一人もいない

体が縮んだ奴も

大切な人がいなくなった奴も

タイセツナヒト？

少し、違う……か

認めたくなかった

それを認めてしまえば……俺は……

「……新一？」

聞き覚えのある声が俺の耳に入ってくる。俺は体が強張るのを感じた。

悲しい色

天気予報では降水確率二十%と言っていた。だけど空をみると今にも雨が降ってきそうな程曇っていたので傘を持って家をでた。

コートの前を上まで閉め、その上から赤いマフラーを巻く。それでも身震いするほど寒い。

コナン君がいない生活にも少し慣れてきた。

いつかはこの日がくるとは思ってはいたものの、暮る寂寥感は簡単に拭えない。口にはださないけどお父さんも同じだと思う。

だけどいつまでも私が落ち込んではいられない。

信号機の近くでしばらく立っていると、私が歩いてきた方とは逆の方向から三つの小さな人影が歩いてくる。

「おはよう、みんな」

私が挨拶をすると元気に返してくれる。今は三人になってしまった少年探偵団も、以前よりは笑顔を見せてくれるようになった。

あれから私自身、休み明けの試験や部活も本格的に始まり忙しくなってしまうって、博士の家には行ってない。

落ち着いたら連絡すると言っていたコナン君からの連絡も未だない。

落ち込んでいた幼い子ども達を放つてはおけなかった。
いや、私が励まされていたのかもしれない。

コナン君がいなくなって寂しいのもあったけど私にはもう一つ大きな気がかりがあった。

年末頃から新一に連絡が全くとれない。何度も電話を試みたけどずっと留守電のままだった。新一が一カ月以上音信不通というのは初めてだ。

何かあったのかな……

もしかして何かの事件に巻き込まれて連絡がとれない状況なんじゃ……

そんな考えばかりが頭を駆け巡り、不安でたまらなかった。

いつの間にか別れ道まで来ていた。

子ども達の後ろ姿が見えなくなったのを確認して歩きだそうとした時、後ろから声をかけられる。

「ちよつとかまいすぎじゃない？」

「園子……」

「おはよ、蘭」

おはよう、と返し二人で連れ立って歩く。

「心配なのは分かるけどさ」

「うん……もうみんな大丈夫……かな」

「私が心配なのはあんたの方」

「え？」

ドキツとして園子の顔を見る。

「まっ……たく。女房がこんな状態の時に、どこほつつき歩いてんだか。あの推理オタク」

一気に顔が熱くなる。

「によ、女房って。私と新一はそんなんじゃない……」

「誰も、新一君、なんて言っていないけど？」

「園子！」

園子はニヤニヤ笑っているので強引に話題を変える。

親友だもんね……

とりとめののない話をしながら学校につく頃には沈んでいた気分も幾分晴れていた。

そんな私の気分とは逆に、曇っていた空はさらに黒い雲が重なっていく。雨が降っていないのが不思議なくらいだった。

廊下を歩いていると周りの生徒の会話が聞こえてきた。

一瞬意味がわからなかった。思わず園子と顔を見合わせる。園子もびっくりしているようだった。

早足で教室に向かう。

驚きと、少しの怒りと、たまらない嬉しさと、

色んな感情が入り混じって、まだ混乱した頭のまま教室のドアを開けた。

学校に来なくなって少ししてから、なにかと面倒だからと席は窓際が一番後ろに移動されていた。いつも学校にくるたび、その空席ともいえる机を見るとなんともいえない気持ちにさせられていた。

でも今日は違うかった。

クラスメートに囲まれながら、確かにその人はその席に座っていた。

「……新一？」

机を囲んでいたクラスメート達は一斉に私の方を向く。

「お！ 毛利じゃん！」

「そっぴや今日は夫婦で登校じゃないのかー」

「あー、だからなんか工藤の様子がおかしいのか」

他にも好き勝手な事を言いながら盛り上がっている。

でも今の私には、夫婦、などと言われても否定する余裕はなかった。
周りの冷やかしは無視して静かに歩み寄る。

「新一」

いつ？

いつ帰ってきたの？

帰ってきてるなら連絡ぐらいしなさいよ

どうして今まで連絡してくれなかったの？

事件はもう解決したの？

それはどんな事件だったの？

聞きたい事が山ほどあって何を聞いていいか分からない。

「新一、大丈夫？」

新一は窓に向けていた顔をゆっくりとこちらに向けた。困惑した表情で私を見ている。

私自身、なぜ自分がそんな事を言ったのか分からなかった。でも今の新一を問い詰める事はできない。そんな雰囲気は新一はだしている。

いや……背負っている。

そんな気がした。

「あ、ああ。ちょっと……疲れてんだ……」

そう言った新一の顔はやつれていて、目の下には隈をつくっていた。本当に疲れているようだった。でもそれだけじゃない。

今までの新一の瞳じゃない。

この瞳……どこかで……

「そう。無理しちゃだめだよ？」

確か……確かあの時の……

「……ああ」

あの時のコナン君と同じ、悲しい色をした瞳だった。

それはダレの為に？

思いも寄らない蘭の言葉に驚くと同時に肩の力が抜けるのを感じた。

俺の顔を見るなり様々な事をまくし立ててくると思っていたのに、それを覚悟して学校にきたが俺の予想は外れた。

なぜ蘭があんな事を言ったのか分からなかった。しかし蘭のその言葉にほっとしている自分がある。

話は終わり、というように頬杖をついてもう一度窓の外に顔を向ける。俺がそんな態度をとっても蘭は何も言うことはなく、自分の席に向かったようだ。園子と何か言葉を交わっていたようだが、もう一度俺の所にくることはなかった。

俺の周りにいたクラスメイト達は何かを察知したらしく、それから何も言っただけだった。なかには、夫婦喧嘩かー？などと茶化してくる奴らも数人いたが。

しばらくすると教師が入ってきて教室は静かになる。俺は教師のありがたい小言を適当に流し、授業を始めるように促した。

俺……何しにきたんだろ？

何もかも元通りに戻るかもしれない。

そんな俺の小さな小さな期待は崩れ去った。最初からわかっていた事だけだ。

俺がここにいることでクラスメートに気をつかわせるかもしれない。蘭にも。いや、すでに今そんな状態だ。

やはり俺はここに在るべきではない。

楽しくないのに周りに合わせて笑うことなんかできない。当たり前だ。俺がいることでこの場の空気を悪くするなら、今すぐ離れたほうがいい。

不意に孤独感を感じた。

俺はどこに行けばいい？

（もうなくなつたよ）

自分で決めた事だろ？

（自分で？）

工藤新一に戻ると

（逃げただけだろ？）

解毒剤を飲んだ日、俺は江戸川コナンを捨てたんだ

(捨てることなんてできない)

だって俺は工藤新一なんだから

(だって工藤新一は俺なんだから)

だから俺の本当の居場所はここなんだ

(本当に?)

今更後悔したって遅いんだ

(何を?)

.....

(江戸川コナンとして)

.....

(灰原哀を)

.....やめる

(待たなきゃいけなかったこと?)

.....何を待ってたんだ.....あいつはもっ.....

(もっ? 何?)

……………戻ってこれない

(それはどういう意味?)

……………うるせえよ

(どうして戻ってこれないんだ?)

……………うるさい

(俺は知ってるよ)

……………黙れよ

(だって俺が)

……………黙れ

(灰原を)

……………もうやめてくれ

(なんだ……………知ってんじゃない)

……………

(もう遅いよ。俺はオレには戻れない)

……………わかってる

(取り返しのつかないことをしたな)

.....

(でも、例えオレのままでも結局同じだろ?)

.....なにが?

(俺が灰原を置き去りにしたこと)

ガンと鈍い音が教室に鳴り響く。教科書やノートなど一切だして
いない俺の机に、震える握り拳が視界に入った。

「えっ.....と。工藤?どうかしたか?」

「.....何でも.....ないです.....」

俺は頭がどうかしてしまったのか。いったい俺は誰と会話していた
のか。

幻聴?

違う。

俺の脳に直接語りかけてくるような。

それはやけにはっきりと聞いていて。

馬鹿馬鹿しい……。

俺はノートを机の上に広げ、授業に集中した。

この寒い中わざわざ屋上にくるやつなどいない。しかも今にも雨が降りそうなのだ。

両手を枕にして仰向けに寝そべる。

すると俺の視界には暗い空しか入らなくなった。

相変わらず黒い雲が空を覆い尽くしている。朝見た時の空よりもさらに低くなっているように感じた。

今にも空は落ちてきそうだ。このままここにいれば押しつぶされるのだろうか。瞼を閉じるとさらに深い闇に包まれる。

こうしていれば俺をどこかに連れて行ってくれそうな気がした。

ギィと扉の開く音が聞こえた。足音が俺に近づいてきて、俺の隣で立ち止まる。ゆっくりと眼を開けると長い黒髪の女子生徒が俺の横

に座っていた。

「はい、私のおごり」

そう言うと小さなペットボトルを俺の胸の上に置いた。顔を動かして蘭のほうをみると缶コーヒーのプルタブをあけているところだった。

「俺、コーヒーがいい」

「ダメ」

「え？」

蘭は前を向いたまま缶コーヒーを傾けた。

「ホントはオレンジジュースとかのほうがいいかなって思ったんだけど。でも寒いでしょ？ だからホットレモン」

「……なんで？」

蘭は俺の問いに答えずに前を向いたまま黙っていた。

最初から気づかれていたのか。だから第一声が、大丈夫か、だったのか。

「……サンキユな」

「いいよ。このくらい」

胸に置かれたままのペットボトルを手に取り体を起こす。蓋をあけて口の中にホットレモンを流し込むと、久しぶりに感じる甘みに胃が満たされる。

蘭は黙っていた。聞きたい事がたくさんあるに違いない。でも蘭は

何も聞いてこなかった。

幼なじみ、か……。

「今日から完全に復帰」

何とかそれだけを言う。

「そっか」

ようやく俺の眼を見て蘭は笑顔をみせた。しかし蘭の笑顔は俺には痛かった。

不審に思われないように、ペットボトルを口元に持っていきながら顔をそらす。そんなに時間はたっていないのに、ぬるくなっていた。

「もうお昼休み終わるよ？」

蘭は見計らったようにそう言いながら立ち上がった。

「……ああ」

「……先、行ってるね」

「……うん」

後ろで扉の閉まる音を確認してからもう一度寝転がる。

ごめんな……。

蘭が待ち望んでいる言葉は、たぶんもつあげられない。

それはどうしてと問われても、明確な答えなんかないけれど。

答えなんか知らない。

知りたくなかった。

知らないふりをする。

でも……。

せめて。

せめてもう一度だけ。

もう一度だけ会えるなら。

ごめん、と。

そう伝えたい。

なんどこころでその言葉を口にしても。

なんど心の中で呟いても。

それはあいつには届かない。

もし。

もし俺の言葉を届けることができたなら。

その時は。

俺はその答えを認めることができるのだろうか。

チャイムの鳴る音がする。でも俺はそこから動くことはできなかつた。

秘めているもの

「蘭。新一君は？」

「さあ？」

「さあ、つてあんだ……」

「疲れてるみたいだし、今は、ね」

納得できない、という表情の園子に笑顔を貼り付ける。

朝に、新一が学校にきている、と他の生徒の話聞いて舞い上がっていた気持ちはすでになく、今はただ心配だった。明らかに今の新一の状態は普通ではない。

あんな新一の姿は初めて見る。授業中のこともある。あの時の新一は何か怯えているような。そんな感じがした。

結局新一はお昼休みが終わっても教室に戻らず、放課後になっても姿を見せなかった。

「園子、先に……」

「わかってるって」

背中を向け、ひらひら手を振って園子は教室を出て行った。

自分と新一の鞆を持って屋上へと足を速めた。

屋上の扉を開けると強い風が頬を叩く。新一はさっきと同じ場所で座っていた。新一に近づき声をかけようとしたが、はっと息を呑む。

肩で息をして、横顔を覗き込むと青ざめた顔をしている。寒いというのに汗をかいているようだ。

「……新一？」

声をかけるとやっと私がいることに気がついたようで素早く私のほうに振り向く。

「……ら、ん？」

「どうしたの？」

思わず聞いてしまった。

「い、いや……ちょっと……嫌な……夢……見ちゃって」

夢？

じゃあ寝ていたというのか。この寒空の中、汗をかくほどの嫌な夢をみたと？

「もう授業終わったよ。帰ろう？風邪ひいちゃうよ？」

「ああ……わりいな……」

新一はゆっくりと立ち上がると、私から鞆を受け取り歩き出した。

久しぶりに新一と下校する。二人で歩くのも久しぶりだ。でも以前のような雰囲気は微塵もなかった。

「新一、家に誰がいる？」

「いや……俺一人だよ」

「そうなの？」

沖矢さんはいないのだろうか。でもそんなことすら聞ける様子ではない。

「じゃあ晩御飯、うちで食べてかない？」

今の新一を一人にはしておけないと思った。

「サンキユ……でも寝みいんだ……」

新一は前を向いたまま私と視線をあわそうとしない。

「そっか……。でも」

「ああ、ちゃんとメシは食うから」

「……うん」

それから新一の家の前につくまで会話はなかった。

「じゃあ気をつけて帰れよ」

「うん……。新一、明日は学校行くの？」

「ああ、ずっと休んでたしな」

そう言っつて新一は笑った。

……つもりなのだろう。

「わかった。じゃあまた明日ね」

「おう。あ……。ちよっとの間、朝はゆっくり行くからさ、迎えにこなくていいから」

なんで？

「わかった。遅刻しないようにね？」

「わーってるよ」

新一が玄関の扉を開け、家に入っていく後ろ姿をじっと見つめる。

ねえ、新一？

無表情の笑顔を見せられるのって。

こんなに悲しいんだね……。

涙がでそうになるのを必死に堪える。

新一は何かとてつもないものを抱えている。それがなんなのかは分からない。それを聞くこともできない。新一が話したくないのなら。

でも今の新一を放っておくなんて……。

車が近くで止まる音がし、はっとして振り向く。

「博士……」

家の中に入ると部屋の中は少し散らかっていた。幼いながらもしっかりした同居人がいなくなってしまうたからだろうか。

「ごめんね、博士。いきなり押し掛けちゃって」

「かまわんよ。ちょっと待っててくれんか。今コーヒーでも……」

「あ、いいよ。晩御飯の準備しなきゃいけないからすぐ帰らなきゃいけないし」

「そうか？ すまんの」

博士は私の向かい側のソファに腰を下ろした。新一と同じように疲れた表情をしていた。

「で、聞きたい事とはなんじゃ？」

「うん……。新一が帰ってきたの。博士は知ってる？」

「……ああ、隣じゃからな」

「いつ帰ってきたかは？」

「……さあの。わしも二、三日前に見かけただけじゃから」

「そうなんだ……」

じゃあ新一に何があったのかは聞いても無駄というわけか。それでも聞かすにはいられなかった。

「新一、様子がおかしいんだけど……何か知らない？」

「……そうなのか？ わしはよく知らんが……」

やっぱり予想通りの答えだった。

「じゃあ、もう一つ聞いていい？」

この約一ヶ月ずっと気になっていたことだった。

「コナン君のことなんだけど……」

「そのことが……」

博士は眼をそらした。やっぱり何か知っているようだ。

「コナン君……友達に何も言わずに行っちゃったみたいなんだけど……。何か知らない？ コナン君を送ってっただの、博士でしょ？」
「あの子はわしに何も言わなかったが……。本当に急の事じゃったからな。後で連絡でもするつもりだったんじゃないののう？」

博士の言っている事は本当の事とは思えなかった。

「でも、また連絡するってコナン君も言ってたけど、何の連絡もないの」

「まあ、大丈夫じゃろう。コナン君はしっかりした子じゃし、心配せんでもその内電話でもしてくるよ」

何かを隠そうとしている。そんな風に思われた。

「じゃあ哀ちゃんは？」

私の言葉に博士は顔を曇らせた。

なに……？

「あ……ああ。哀君はの……実はコナン君の両親が預かると言っ

きての。それでいつしよに行ったんじゃよ」

「コナン君の『両親が？どうして？』」

コナン君と哀ちゃんちゃんの両親は今海外にいて、コナン君の親の仕事が一段落したからいつしよに預かると申し出たらしい。それなら哀ちゃんも両親と会える時間が増えるから、と博士は説明した。

確かに親としてはいつまでも子供を放っておくわけにはいかないだろう。博士の説明したことはもっともらしいと思う。

それが本当の事ならば……。

そんなに時間はたっていないのに博士の家をでた時にはすっかり暗くなっていた。

隣の家を見ると灯りはついていない。家に人がいるようには見えなかった。

とぼとぼと自宅に向かって歩き出す。

ずっと会いたかった。

ずっと声を聞きたかった。

ずっと……確かめたかった。

でも……。

今の新一は……。

ポツポツと空から落ちてくるものを感じ、傘をひらく。やがてと頭の上で雨粒が傘を叩く音がしだす。

「かわりに泣いてくれるの……?」

それは私じゃなくて……。

新一のかわりに……。

新一は……。

見えない涙を流していたから……。

声にならない叫びが聞こえてきたから……。

あの瞳をみるだけでわかる……。

でも……。

それはたぶん……私にはどうすることもできない……。

「新一の心は……どこいつちゃったの?」

ポツリと口からでた言葉は雨音にかき消されていった。

迎える限界

もう自分がどのくらいの時間で起きるか、分かるようになってしまった。ぴつたりと、何分何秒まで。

自分の声で目覚めたあとも、今まで自分が見ていたものは、それが夢なのか現実なのか分からない。

夢に見ていたものは確かに現実にあったことで。今の現実が夢であればと願ってみても、それは確かに現実で。

俺は今どっちにいるんだ？

学校に行き始めて一週間。俺の中では喪失感ばかりが広がっていく。それでも学校を休もうとは思わなかった。いつかはこの苦痛から抜け出せるなら。

玄関の扉を開けると強い日差しで目が眩む。澄み渡るような冬の青空が広がっていた。

フラつく足で博士の家に向かう。

「新一君。大丈夫なのか？」

「……ちゃんと生きてるよ」

朝の検査を終えて家をでようとすると博士に引き止められる。

「無理せず休んだほうが……」

「行かせてくれよ……。ただでさえ出席日数たんねーかもしれねーんだ」

「しかし……」

「それに……留年しちまうと、自分のせいだ、って思うだろうから……」

俺がそう言つと博士は言葉をなくしたようだった。それ以上博士と顔を合わせてはいられず、足早に玄関へと向かった。

人混みに埋もれながら通学路を歩く。周りを歩いている人達はマフラーや手袋、暖かそうなコートやダウンジャケットを身につけているのに寒そうにしている。

こんなに晴れてるのに？

俺には寒いのか暑いのか、よく分からなかった。

教室に入り自分の席に座る。俺に喋りかけてくる奴などもういなかっただ。蘭を除いて。

相変わらず蘭は核心には触れてこず、付かず離れずの距離を保っている。俺の体調を心配するような事しか聞いてこなかった。

もういいのに、と思う。もう俺に関わらないでいいと。これ以上は

蘭を傷つけるだけだ。いつ俺が罵声を浴びせるかも分からないのに。ガラスとドアが開く音がして教師が入ってくる。授業に集中している間は何もかも忘れられた。

一時間目

二時間目

三時間目

四時間目

昼休み

サンドイッチを一切れ食べた。残ってしまったものは今日の晩飯と明日の朝食にしよう。

五時間目

六時間目

放課後

席を立ち、足早に教室を出る。蘭に呼ばれた気がしたが、かまわず足を進めた。

校舎の出入り口まで来ると朝の青空が消えてしまったような曇り空が眼に入る。空からは何かが落ちてきている。

雪、かな……？

あの夜のこと、昨日のことのようにおもいだされた。

あの時に誓ったはずなのに……

降ってきているものが白なのか黒なのか。曇っている空が黒なのか白なのか。もう俺には分からない。

俺の眼に映るものは全て色を無くしてしまったように灰色に染まっ
ていく。

空も

雪も

木も

建物も

車も

道も

人も……

この色を失った世界で俺はどこにかえろうとしているのか。

別に……どこだっていい、か……

そうだ……どうでもいい

どうにでもなればいい

こんな体も

こんな毎日も

俺はこの苦痛からは逃れられないんだ

どこに行ったってそれはかわらない

俺はこの苦痛を背負って生きていかなければならない

それはとても長い道のりで

それを俺は独りで進んでいかなければならない

それが俺の……

俺の……

重い足を動かして校門へ向かう。

ほとんど睡眠と食事をとっていない俺の体が悲鳴をあげていることに、俺の脳はまだ感知していなかった。

雪の舞い散る夕刻に

あくびを噛み殺し、窓の外を流れていく景色をただ眺める。

久しぶりに見る街並みは少し寂しく見えた。最後に見たときは年末で活気づいていたので、そう見えるのは仕方ないのかもしれない。自分自身の変化もあるのだろうか。

ちらりと隣の美しい女性を見ると疲れなど感じさせない表情でハンドルを握っている。それどころか何やら楽しそうに見える。

そういえばさつきもそうだった。着るものを持っていない私の為に、じゃあ買いに行きましょう、と無理矢理連れ出されてしまったのだった。今貸してくれているもので充分だと言う私の言葉も耳に入っていないようだった。本当に楽しそうに洋服を選んでいたので、い出す。気がつくとも冬物ばかりか春物にまで手をのばしていたので、さすがに待ったをかけると、えー、と不満そうにしていたのはなぜなのか。

その買い物に思ったより時間がかかってしまい予定より遅れてしまった。私ができることを指摘すると、ちょうどいいじゃない、と満面の笑みを返された。いや、確かにそうなのだけど……。

あまり目立つことはしたくなかった。ただでさえ彼は目立つのだ。そして隣にいるこの女性も。彼の体調が気になって了承したが、よく考えるとあまりよくないと思えた。おそらく彼女もいるだろう。今私が彼女と顔を合わせるのはまずい。

「あら、雪ね」

視線を空に向けると確かに白いものが降ってきている。雪は車のフロントガラスに張り付き、やがて水滴になっていく。やはり日本の冬は寒い、と置いていたがそれだけではなかったようだ。

「なーんかロマンティックよねー」

「……なにがですか」

私の問いには答えず、なにやら意味ありげにニヤけている。この人と過ごした期間は短い、私の心の内などお見通しなのだろう。今更否定したところで徒労に終わるのだろうが、小さく息を吐き話をそらす。

「それより本当に行くんですか？ もうそろそろ授業が終わる時間ですよ？ だったら私は家で待ってた方が……」

「なーに言ってるのよ！ もうここまで来ちゃったんだから！」

なぜこの人がそんな拗ねた顔をするのか。

「それに博士も言ってたでしょ？ 早く会ってあげなさいって」

「それは……そうですけど……」

数ヶ月居候した家を訪ねると、博士はしばらく呆然と私を見ているだけだった。私も何も言えずにいると、肩を震わせながら私の手を握りしめてきたのだった。こんなに心配をかけていたのかと胸が痛んだ。事の経緯を説明すると、ドタドタと地下室に降りていき数秒で戻ってきた。そして私の前でしゃがみ込み、持ってきたものを差し出しながら、早く新一君に会ってあげなさい、と涙ながらに言ったのだった。

どうして私の分まで？ とは言えるわけなかった。

結局、自分自身の検査や彼の検査結果を調べていたら時間がかかってしまったが。その上買物にまで連れ出されてかなりの時間をとってしまった。

信号に捕まり、彼の母親は私に顔を向けた。

「あなただって早く新ちゃんに会いたいでしょ？」

「確かに彼の体調は気になりますけど」

私がそう言うと、はぁー、と大きな溜め息を吐きハンドルに顎をのせる。

「あなたも新ちゃんと同じで、頑固よねー」

「なにがですか」

すると真顔になってまた私の方に顔を向ける。

「新ちゃんが今どんな状態か、博士から聞いたでしょ。いくらなんでもおかしいわよ。なんで新ちゃんがそんな事になってるか、あなたも分かってるんじゃない？」

真剣な眼差しにたまらず顔をそらす。

「何のことですか」

そんなわけあるはずがない。

信号が青になる。私の言葉に何も返されず、乱暴に車が発進する。少し不安になりチラリと顔を盗み見た。のだが……。

子供のよつにむすりと頬を膨らませていた。思わず少し吹き出してしまふ。

「なによー」

「いえ、ごめんなさい」

それでも私が小さく笑っていると、反撃とばかりにからかうような目を向けられる。

「私聞いたわよー。あのジョディって人から。あなた、新ちゃんの為に随分頑張ってくれたそうじゃない？」

まったく、黙っておいてくれと言ったのに。

「別に私は何もしてません。……ただ……結局私のとった行動は息子さんを追い詰めることになってしまいましたけど……」

彼がそこまでの状態になっているのは私としては意外だった。

「でも、あなたは新ちゃんの為を思ってそうしてくれたんじゃない。気に病む必要はないわよ」

「でも、ただでさえ私はあなたがた親子に迷惑をかけているのに……」

「それはもうとつくに話がついたことでしょ？ それに迷惑だなんてこれっぽっちも思っていないわよ」

笑みを絶やすことなく、はっきりと言い切られ何も言えなくなる。すると微かに笑い声が聞こえた。

「あ、ごめんね。でもそういう色んな表情を見せてくれるようになったのは、かなりの進歩よねーって思ってた」

まったくこの親子は……。どこまでも私の心をかき乱してくれる。しかしそれに不快感を感じないのはこの人の影響なのだろうか。この人とこんな風に言葉を交わす時がくるとは想像もしてなかった。

後で辛くなるのは自分なのにね……。

気がつくといつの間にか車は帝丹高校の近くまで来ていた。やがて校門の近くで停車する。

「はい！ 降りた降りた！」

ここまできたら仕方ない。渋々ドアを開けて外にでる。暖房のきいた車の中にいたせいか、外はとても寒く感じた。まだ体がついていないのかもしれない。傘は持っていないが雪はそんなに降っていないので問題ないだろう。

「じゃあ私は夕飯の買い物でもしてくるから」

「え？」

振り向くと運転席に座ったまま助手席の窓を開けて私を見ていた。

「ちょっと……有希子さん……！」

「じゃーねー」

止める間もなく荒々しく車は発進していった。思わず溜め息がでる。あの人はいったい何を勘違いしているのだろうか。彼は優しすぎるのだ。だから今の彼は……。

仕方ないわね……。

上着のポケットに手を入れ校門から少し離れてから塀にもたれかけた。

いったいどんな顔をして会えばいいのか。怒鳴り散らされるのを覚悟していたほうがいいかもしれない。そしておそらく彼女も一緒にいるはずだ。彼女の不安を煽るような事はしなくなかった。いや、ただ見たくないだけかもしれない。彼女といるところを……。

まあ、それ以前にこの姿では私とは分からないかもしれないが。

ふと視線を空に向ける。あの時とは何もかも違う。私を取り巻く環境も、私自身も。そしてそれは、きつと彼も。

ただ、空から落ちてきている雪だけは変わらないもののように思えた。

チャイムの鳴る音がする。周りを見ると私のように人を待っているであろう若者が数人いる。それは、恋人か。友人か。はたまた兄弟姉妹か……。

私はそのどれとも該当しない。被害者と加害者。探偵と犯罪者。被験者と開発者。

しかし私がここから姿を消せばそれすらもなくなり、彼と私を結ぶものはない。私はそれを望んでいたはずだった。だが今の私の現状は他になんと言え表せばいいのか分からない。

ちらほらと生徒が校門からでてくる。生徒達は学校指定と思われるコートを着た上に羽織っている。

塀にもたれかかったまま彼の姿を探す。雪が降ることは予報されていたのか、ほとんどの生徒は傘をさしている。その中で傘をささずに校門からでてきた一人の男子生徒が視界に入った。

彼は一人だった。

見慣れた子供の姿ではなく、高校生としてそこにいる男性は確かに彼だった。ゆっくりと私のいる方に向かって歩いてくる。

だが……。

顔がはつきりと見える距離になってくると思わず息を呑んだ。

雪が降るほど寒いというのにコートも着ず、防寒具一つ身につけていない。青白い顔に大きな隈をつくり、いつも鋭い光を放っていたその瞳は、もう何も映していないのではないかと思うほど濁っていた。

あまりの彼の姿に呆然としてみると、私の前を通り過ぎていった。はっと我にかえり慌てて彼の背中を追う。

少し躊躇った後、彼の肩を叩いた。

「工藤君」

たとえ幻でも

誰かに肩を叩かれる

誰だ

そういえば教室をでるときに蘭に呼び止められたんだっけ

早足で来たつもりだが追いつかれたのだろう

だが俺の耳に入ってきた声は蘭のものではなかった

「工藤君」

どこかで聞いたことのある声も

俺のことを工藤と呼ぶその言い方も

なんで……聞こえるんだ……

空耳なのだろうか

振り向くのが怖い

振り向いて誰もいなかったら？

別人だったら？

足が震えているのが自分でもわかる

俺の肩を叩いたんだ。あいつのはずがない

しかし俺の意志とは反して体が勝手に動いていく

後ろを振り向くとやはり俺の想像していた人物とは違っていた

誰だ

いや…

俺は知っている

この色を無くした世界で、はっきりとその存在を証明するように色を放っているこの茶髪の女性を俺は知っているのだ

俺は幻でも見ているのだろうか

それでもいいと思った

例え幻であったとしても

また彼女に会えたのだから…

その流れるものは

「工藤君」

私の声に彼はびくりと肩を震わせ、ゆっくりとこちらに振り返った

虚ろな瞳は徐々に見開かれていき、

驚愕した表情で私を見ている

視線が交錯する

なんと声をかければいいのかと迷っていると、ふわりと自分の体温ではないものが私の体を包みこむ

何が起きているのか分からなかった

周りで歓声のようなものが聞こえて、やっと自分の状況を理解する

視界に入るのは、青色のブレザーと緑色のネクタイの結び目

今は彼の方が少し高くなってしまった背丈のせいか、彼の息づかいが耳の上で聞こえてくる

私の肩を抱く彼の腕は震えていた

予想外の出来事に驚きすぎて声もでなかった

熱いものが胸にこみ上げてくる

この抱擁はそういう意味ではないのだと、

これは生きて再会できたことによるものなのだ、

そう自分に言い聞かせてみても、

置いてきたはずの想いが

封印したはずの感情が

私の身体の隅々まで満たしていく

無意識に私の腕が彼の背中にまわろうとしたとき…

「……………新……………」

背後で聞こえてきた音声に我にかえる

咄嗟に体を離そうとした

だが…

…ごめんな…灰原…

私の耳元で小さく、本当に小さく聞こえてきた

その声は確かに工藤新一のものだった

同時に自分の髪の毛に何かがつたうのを感じる

彼の顔は見えないが、それが何なのか理解するのに時間はかからなかった

私は今置かれている状況を忘れ記憶の中にある彼の姿と、今の彼の姿を照らし合わせる

最初に出会った時から

最後に別れた時まで

しかし、一致するものは一つもなかった

「…新一？」

また彼女の声が聞こえた

だが先程とは別の戸惑いのようなものが含まれているような気がした

気がつくと周りの歓声が消えている

そうか…

私だけじゃなく彼女も初めて見るのかもしれない

彼の涙を…

夢と現実の狭間で

目に飛び込んだできたのは自分の部屋の天井だった。なぜかとても久しぶりのような気がする。天井は少し遠くに感じた。あの日から、目覚めると同時に、押し潰されるのではないか、と思うほど低く感じていたのに。

天井だけでなく、洋風の電灯や本棚の上部が視界に入る。頭の上の方には窓が見えた。カーテンがふわふわ揺れている

ああ……俺、寝てんのか……。

でも、なんで……。

確か俺は、学校から帰る途中だったのに……。

その時に……誰かに……。

誰かに会ったんだ……。

あれは……あの人は……。

あいつは……。

もう少しで思い出せるという時に頭に何かが触れた。

これは……。

ああ……夢か……。

この手は、いつか見た夢と同じ感触だった。
やさしくて。あたたかくて。心地良くて。
それは俺の中の凝り固まった部分を溶かし、
胸の隙間を埋めていく。
久しぶりの安らぎを感じながら目を閉じた。

このまま夢の中に居たい。

これは現実ではないのだと思うと、目覚めてしまうのが怖かった。
またあんな毎日が待っているのだろうか？ またあの悪夢を見る日
がくるのか？ このままこの夢の中にいれば……。

そんな考えとは反するように俺の頭から手が離れた。

そっぴや……そんな展開だったな……。

もうすぐ扉の閉まる音がして、この夢も終わる。ならばわざわざこの人物が誰かを確かめる必要はない。どうせ夢なんだから……。

……………？

頬になにかが触れた。

これ……さっきと同じ手、だよな……？

この手は……夢じゃないどこかで……。

しかしまた俺が思い出す前に手は離れた。

まっ……。

重い瞼をこじ開けると、また自分の部屋の天井が視界に入る。ただ先程とは違い、電灯の光りによって部屋の中が明るかった。眩しくて目を細める。目の奥が痛い。その痛みは確かに現実だった。

やっぱり……夢、か。

「起きたの？」

だが右側から聞こえてきた聞き覚えのある声に意識は一気に浮上する。声の聞こえてきた方に顔を向けると、見覚えのある顔の茶髪の女性が椅子に腰掛けていた。

「……いつから起きてたの」

その女性はなぜかばつの悪そうな表情で聞いてきた。妙な既視感を感じる。

前にもこんな会話を……誰かと……。

確か……確か……。

「はい……ば、ら……？」

「なに」

「灰……原……」

「なによ」

「灰原……」

「……だからなに」

「灰原……」

「……」

「灰原……？」

「……大丈夫？」

茶髪の女性は心配そうに俺の顔を覗き込んできた。

そうだ……俺が会ったのは……。

「灰原……なんだよな？」

「今更なに言ってるのよ……」

やはりこの女性は灰原だ。この姿の彼女をはっきりとは見てなかったが、やっぱり灰原だ。でもどうして元の身体に……？ いや、そんなことより……。

「本当に……灰原なんだな？」

「……あなた、誰かもわからずにあんな事したの？」

「あんな事？」

「……覚えてないの？」

灰原は眉間に皺を寄せて顔をそむけた。

そういえば記憶が曖昧だ。俺はどうして自宅にいるのだろう。

「それより、そろそろ離してくれないかしら」

「え？」

彼女は顔をそむけたまま大きく溜め息を吐き、右手を少し掲げて見せた。なぜか俺の手も勝手に動く。

「あ……」

「……早く」

「……はい」

言われるままに俺はなぜか繋いでいた手を離そうとした。

……。だけど……。

離してはいけない。

そんな気がして、さらに力を込める。手のひらから感じる彼女の体温が、これが夢ではないと教えてくれているようだった。

「……工藤君？」

「いるんだよな……？　ここに……」

自分でも情けない声がでたと思った。

でも灰原はそんな俺を見ても馬鹿にして笑うことはなかった。

「……いるわ。私はここに」

彼女は微かに微笑んでそう返したが、その表情はどこか物悲しいようにも見えた。しかしすぐに硬い表情になり口を開く。

「まだ寝てなさい。ほとんど寝てないんでしょう？」

なんで知ってるんだ。いや、そんなこと今はどうでもいい。だけど腹の底の方から何かが込み上げてきて言葉がでてこない。

「お前……何で……」

なんとか口にした言葉はノックの音で遮られた。しかたなく返事をすると遠慮がちに扉が開かれる。

「あ、新一、気がついたの？」

そこには心配げな表情をした蘭が立っていた。

いっただいどういう状況なんだ。もう混乱して何がなんだかわからない。

「じゃ、私、行くわね」

灰原はそう言いながら俺の手を引き剥がして立ち上がった。

「お……おい、ちょっと待てよ」

咄嗟に体を起こす。

しかし俺の声など聞こえないといった感じで背中を向けられる。不意にどうしようもない恐怖を感じて、もう一度彼女の手をとる。

「おい、灰原！ どこ行くんだよ！」

彼女は顔だけこちらに向けて、呆れたような表情でまた大きな溜め息を吐いた。

「……私も戻ったばかりで疲れてるの。休ませてもらうわ」

「戻った、って……」

「あなたも今日は寝てなさい。じゃあね」

そう言うとスルリと俺の手から抜け出し、蘭に軽く会釈して部屋をでていった。一瞬の出来事に、俺はただ閉められた扉を呆然と見ているしかなかった。

「新一、大丈夫……？」

蘭はさっきまで彼女が座っていた椅子に腰掛けた。

「え？ あ、ああ……」

今すぐあいつを追いかけたかった。だがそうすれば蘭もついてくるだろう。蘭を交えて詳しい話などできるはずがない。今は我慢してここにいた方がよさそうだ。何より頭を整理する時間が欲しかった。

「たぶん、本当だと思うよ……」

「え？」

何のことだ。

「疲れてるって言ってたの。あのひと……新一のお母さんと一緒にいたから……。新一のお母さん、日本に着いたばかりだって言ってたし……。あのひと戻ったばかりって言ってたでしょ？」

「母さんと!？」

また俺の頭を混乱させる要素が増えた。一体どうなってんだ。

「あのひと……誰なの……?」

蘭は不安そうな面持ちで尋ねてきた。今の俺にはそれが何に対しての不安なのか理解できた。

「えっ……と……ちょっと待ってくれ。俺にも何が何だか……」

あいつが蘭に自分の事をどう説明しているのかわからない。俺が下手にあいつの事を喋らないほうがいいと思った。実際、まだ頭がついていってないのもあるが。

「それより、なんで俺、家で寝てんだ？」

少々強引だが話をそらす。というより、本当に分からない事だった。

「……新一、覚えてないの？」

「学校から帰る途中に……あいつに会って……それから……」

そこから先がどうしても思い出せなかった。

「そっからがわかんねえ……」

俺がそう言つと蘭は困つたような笑みを浮かべながら視線を落とした。

「新一は、その……倒れたんだよ……」

「倒れた？ 俺が？」

「うん……」

「いつ？ 蘭はその場にいたのか？」

俺の言葉に蘭の表情が曇る。

なんだ……？

「とりあえず寝たら？ あのひとつもそう言つてたし。私も帰るよ」

蘭は俺の質問に答えることなく立ち上がった。

「おい……蘭」

「詳しい事はあのひとに聞けばいいと思つよ」

聞きたい事はたくさんあるが、あいつの事を追及されるのは避けた

い。この場合は蘭の言う事に従うことにする。

「わかったよ」

「……じゃあね、新一」

「おう」

蘭は部屋の灯りを消して、こちらを振り返ることなく出て行った。

大きく息を吐きベッドに倒れ込む。暗くなった室内は俺の頭を少し冷静にさせてくれた。

一体なにがどうなってんだ。

目が覚めたら家で寝てて。

蘭がいて。

母さんも帰ってきてるって言うし。

それで……灰原が……。

「……………」

灰原……。

あいつだった。あの物言いや態度は確かに灰原哀だった。

よかった……。

分からない事がありすぎて考えがまとまらないが、それだけは確かな事だ。

もうしばらくしたらあいつに会いにいかねければと考えながら、猛烈な睡魔に俺は抗うことができなかつた。

不安と疑問と少しの予感

聞きたい事がたくさんあった。だけどこれ以上新一と顔を合わせ
てはいられなかったので部屋を出てきてしまった。でも、階段を降
りていくことも躊躇われる。

今下に行けばたぶんあの人がいるはずだから。

新一は誤魔化してるんじゃないかと、本当に覚えていない様子だった。

今日の新一はいつも以上に調子が悪そうに見えた。少なくとも私
の目には。でもいくら私が、早退したほうがいいんじゃないか、と
言っても新一は首を横に振るだけだった。じゃあせめて保健室に、
とも言ったけど答えは同じだった。

新一は授業が終わると早々に教室を出て行った。慌てて追いかけた
けど途中で部活の先輩に捕まってしまい、少し時間をとられる。
校舎を出ても新一の姿は見えない。雪が降っているけどかまわず校
門へと向かった。

校門から出て少し離れた所に新一はいた。

いたけど……。

雪の降る中に立っている二人は、周りにいる人達とは何かに区切ら
れているような。遠い世界にいるような。ドラマのワンシーンでも
見ているような気分だった。

金縛りにあったように動けない。頭が真っ白になって何も考えられなかった。

「……新……」

無意識にでた私の声に反応するように茶髪の女性の肩が揺れ、その人は少し後ずさる。だがすぐに動きが止まった。それと同時に私は自分の目を疑った。

「……新一？」

今まで見たことのないものだった。

初めて見る新一の姿に驚いていると、茶髪の女性を抱きしめていた新一の腕がダラリと落ち、その人にもたれ掛かるように倒れ込んだ。

「新一……!!」

ようやく動けるようになり二人の所に駆け寄る。

「あ、あの……」

「大丈夫。気を失っただけよ」

私にそう言うと、すでに携帯電話を耳にあてていた。救急車ではなく誰かに迎えを頼んでいるようだった。電話をしながらも、新一の脈を測ったりしている。

私はその無駄の無い動作を眺めながら、別の事を考えていた。

この人……誰かに……

電話を切ったのを確認してから声をかける。

「あの……あなたは？」

「もう来たみたいね」

私の質問には答えずに、道路の方を見ながらそう言う。視線を同じ方に向けると赤い車が凄いスピードでこちらに向かってきていた。

「なんだか随分早かったですけど……」

「気のせいよ。あら、蘭ちゃん久しぶりね」

車の窓から顔をだした人物に私はさらに驚かされた。

「し、新一……君の、お母さん……」

電話の相手は新一のお母さんだったということなのだろうか？　この人はいったい何者なんだろう？

「あなたもくる？」

声をかけられて、はっと我に返る。

「え……あの……」

「とりあえず、工藤君を運ぶの手伝ってくれない？」

「は、はい」

言われるまま、二人で新一の体を抱えて車の後部座席に乗り込んだ。

茶髪の女性は新一を運び終わると助手席に乗る為か車の外にできるようにする。

「……」

「……工藤君？」

新一の手はそれを嫌がるように茶髪の女性の手を握っていた。気がついたの？ とその人が声をかけても新一は無反応で起きたわけはなかった。

でもその人がいくら振り払おうとしても、新一の手は意思をもっているかのように離すことはない。

「蘭ちゃん。前に乗ってくれろ？」

「あ、はい……」

新一のお母さんに言われて助手席に移る。茶髪の女性は何か言いたそうに新一のお母さんを見ていたけど黙って新一の隣に乗り込んだ。

気になる事はたくさんあったけど、車の中では新一のお母さんにずっと喋りかけられていて考える暇はなかった。

まるで私に質問をさせないように。

後ろの二人を盗み見ると、相変わらず新一の手は茶髪の女性の手を固く握り締めている。その人はそんな新一を無表情で見つめていた。ただ、少し眼が潤んでいるような気がする。それとは逆に新一は安心したような顔で眠っていた。

なんだかどこかで見たような光景だった。

新一の家に到着して部屋に連れて行く時も、ついに新一は手を離すことはなかった。

私がさつき部屋に入った時も……

あの人が出て行こうとした時、新一は引き止めようとしていた。

でも……私の時は……

泣きだしてしまいそうになり、必死にこらえる。今はそんな事を考えている場合じゃないと分かっている。簡単には頭から離れなかった。一週間ほど前に新一の姿を見た時とは違う不安が膨らんでいく。

あの方は新一の……彼女、なんだろうか？

新一のお母さんとも親しげな様子に見えたのは気のせいではないはず。

もう混乱して何から考えればいいのか分からないほどだった。

「蘭ちゃん。どうしたの、そんなところで？」

「あ……いえ」

気がつくとも新一のお母さんが階段の方からこっちに向かってきていた。

「新ちゃんは？ 起きたって言ってたけど」

「えっ……と」

私が答える前にドアを開けて部屋の中を覗き込んでいた。

「寝ちゃったみたいね」

「え、もうですか？」

私はそんなに長い間考え込んでいたのだろうか？

「ごめんね、蘭ちゃん。新ちゃんが迷惑かけちゃって」

新一のお母さんは申し訳なさそうに言う。

「いえ、私は全然……」

「お礼ってわけじゃないけど送ってくわ。雪も降ってるしね」

外は薄暗くなっていて、雪が少し積もっている。車の中から見ると街並みは、降っている雪が街灯に照らされて幻想的な世界をつくりだしていた。

「あの……ちょっと聞いていいですか？」

「ん？ なに？」

「あの女の人って、誰なんですか？」

「ちよつとわけがあつて、うちで預かってた子よ」

「新一も知ってたんですか？」

少しの間が空く。

「んー……まあね」

「そう、ですか……」

やっぱり新一とあの人は……

違うと思いたい。

だけど……じゃああの時の二人はどう説明すればいいのか。

それにもう一つ気になる事があった。

「あの……あの人のお名前は……？」

「本人から聞いてない？」

「はい……」

雪がつよく降ってきたのか、新一のお母さんはワイパーのスピードを速める。

「……宮野、宮野志保ちゃんよ」

「宮野さん、ですか……」

それから家につくまで会話はなかった。距離は離れていないからた
いした時間ではなかったけど。

自分の部屋に入り暗がりの中ベッドに座り込む。

あの人を見た時、誰かに似ていると思った。すぐには思い出せなかったけど、新一の言葉で思い出した。

新一は確かにあの人に……宮野という人に向かってこう言った。

灰原、と……

震える心

二階のカーテンを少し開けてみると空は薄暗く、雪はまだ降り続けている。光の粒はその量を増やし、住宅街を白く染めていた。

窓から見えるこの風景は何度も目にしたはずなのに、初めて見たような感覚に陥る。いや、確かに初めて見るのだ。この目線の高さからは。

まさか自分も解毒剤を飲むとは思ってもなかった。

別に元の身体に戻りたくなかったわけではない。しかし、絶対に元の身体に戻りたいとも思っただけでなかった。

戻ろうが戻らまいが私の運命は同じはずだったのだから。

でも私はまたこの場にいる。新しい役割を与えられて。それが私の受けるべき罰なのだと言われたらどうしようもない。到底納得できるものではないけど。

しかもさらに問題が発生している。

やはりあのタイミングで会いに行っただのは失敗だった。

私自身、動揺していたので彼女に何の説明もできなかった。今更ただの知り合いだと言いつつ張ったところで信じてくれるとは思えない。彼女の刺さるような視線に耐えられず、逃げるようにこっちにきたが、彼はこの状況をどう説明しただろうか。

どんどん積もる雪と同じように私の抱える問題は山積みなのだった。

そんな事を考えていると、隣の家から車が出てくる。その車が家の前を横切り、通りの角を曲がったのを確認してからカーテンを閉めた。

「博士。ちょっと工藤君の様子、みてくるわね」

「ああ、ゆっくりみてやっどくれ」

先程は彼女がいたから詳しい検査をするわけにはいかなかった。正しく言えばできなかつただけだ。

「とりあえず蘭ちゃんが出てきたら、私有家まで送ってくわ。あ、鍵は開けとくから」

荷物を持ち、数分前に出てきた玄関の扉を開ける。リビングは灯りが点けられたままになっていた。

幅の広い階段を上り、幾つもある部屋の一つを数回ノックする。しかし応答がない。静かに扉を開けると、部屋の中は灯りが消されていた。

「工藤君？」

声をかけてみたがやはり応答はない。荷物を床に置き、音をたてないようにベッドに近寄ってみる。暗がりの中、目を凝らして彼の顔を覗き込むと、規則正しい呼吸音をたてていた。

さほど時間はたっていないのにもう眠ってしまったのか。

仕方ない。起きるのを待っていてもいいが、いつになるかわからない。今できることをやってしまおう。

博士から渡された彼の検査結果を見るかぎり、薬の副作用と思われる反応や症状はなかった。だがやはり自分の目で確かめなければ。

彼の顔を窺いながら部屋の灯りを点ける。だがそれで目を覚ますことはなかった。

やれるだけの検査を終え、この場で結果がだせるものだけを見れば特に問題はなかった。

しかし今の彼はそれ以前の問題だった。

ベッドの横に膝をつき、穏やかな表情で眠る彼をじっと見つめてみる。

どうして、と彼に問いたかった。

あなたのやるべき事は終わったのに。

あなたが苦しむことなんて何も無いのに。

なのに……

どうして……

両手でシーツの端を掴み、額をベッドに押し付けた。

「じゅめん……な、さい……っ……！」

固く瞼を閉じても溢れてくるものは止められなかった。

わかっていた。

彼をここまで追い詰めてしまったのは私なのだ。

でも、どうしてそこまで。

解毒剤はできたのだから元の身体に戻り、以前の生活を全て取り戻したはず。

私がどうなるかと彼が苦しむことは何も無いはずだ。

それなのに……

彼はあの時何に対して謝罪したのか。

涙なんか……見たくなかった……

「……どうして、なの……」

彼に会う前に、ここに戻る前に心に決めたはずだった。それなのにこんなにも簡単に蘇ってしまう。

さらに彼の一連の行動がより一層私の心を揺さぶっていた。

今私の頬をつたうのは、悲しさか、悔しさか……。

止まることのない涙は、奔流となって私を押し流していく。

行き場のない思いは、零れ落ちる滴と共に、心に染み込んでいくようだった。

親たちの懸念

「おお、有希子さん。どうしたんじゃ？」

「ちよつとこつちにいさせて」

肩についていた雪を払い家の中に入ると、暖かい空気が体を包み込む。自宅から博士の家に行くだけだというのに体の芯まで冷えたような気がする。

部屋の中は夕方出て来た時よりも幾分片づいていた。

「哀君が新一君の様子を見にいつとるはずじゃが……」

「うん、大丈夫みたい」

ソファに座り背もたれに深く体重を預ける。自分でも思った以上に気を張っていたのか、肩の力がスツと抜けるのを感じた。

「……薬の副作用なんじゃろうか？」

博士は硬い表情で私の向かい側のソファに腰かけた。

「分からないけど……たぶん大丈夫よ。何かあれば哀ちゃんが言うてくるだろうし」

「……そういえば哀君は？」

「まだ新ちゃんの部屋にいるわ」

「そうか……」

博士は険しい表情で腕を組み、視線を落とした。

「大丈夫だって。今まで張り詰めていたものが一気に緩んだだけよ」

それはたぶん、あの子も。

「すまんのう……わしは新一君に何もしてあげれなかった……」

博士は俯いて本当に申し訳なさそうに言う。

「何言ってるのよ。博士には本当に感謝してるわ。今まで新ちゃんについててくれて……。私と優作は分かかって何の連絡もしなかったんだから……」

「しかしそれは……君らも自由に動けるわけじゃなかったんじゃない？」

「それは哀ちゃんが言ってるだけよ。電話一本いれるぐらい、やろうと思えばできたわ……。でもあの時は下手な事はしないほうがよかったし……。それに、哀ちゃんが新ちゃんの為にしてくれたことを、万が一にも無駄にしたくなかったしね……」

「けど、仕方のなかった事とはいえ、やはり苦しいものだった。」

「しかし、わしらの知らん所でそんな事になっておったとは……」

「まあ……幸か不幸か、新ちゃんがFBIの人達と知り合ってたかしたら、今とは違う結果だったかもしれないわね……」

それはどちらが良かったのか、私には分からなかった。

「……本当に哀君は新一君に何も言わんつもりなのかの？」

「……簡単に言える事じゃないもの」

たぶんあの子はそれが新一の重荷になると、そう思っているのだろう。

……ただし。

「ま、これからの二人しだいつてどこじゃない？」

「そっじゃな……」

と言つよりは既に答えがでていようような気もするけど。

私も半信半疑だった。この約一カ月の新一の様子を博士から直接聞くまでは。それにいくら自分の息子がその方面に関しては疎いと知っていても、人前であんな行動はしないだろう（覗いていたなんて口が裂けても言えない）。どうやら新一は覚えていないらしいが、なら尚更だ。

まあ、後は私が口を挟むことではない……とは思っただけど……。

「問題は……哀ちゃんなのよねー」

思わず口にでた言葉に博士は苦笑している。どうやら考えていることとは同じみただった。

「博士は気づいてたの？」

「まあ、これでも一緒に住んでおるからの」

初めてあの子に会った時から感じていたものは、一緒に過ごしてみても、やはりそうだったと思った。私とその事をほめかしても無表情を貫いていたが、却つてその態度が私には答えに思えた。

しかしあの子が素直に自分の気持ちを表にだすとは到底思えない。ただでさえあの子の心を溶かすのに時間がかかったのだから。それは新一への罪悪感からなのか。私達に対してなのか。蘭ちゃんに対

してなのか……。全部かもしれない。

でも、と思う。

それとこれとは別の話だ。そんなふうにしてしまつのは、あの子の過去を知っている為の同情かもしれない。短い間とはいえ一緒に暮らした事で情が移ったのかもしれない。

だけど……。

制限があるとはいえ、やっと自由になれたのだから思うままに生きてほしい。あの子は今まで本当に過酷な人生を歩んできたのだからそれは本心だ。

何より、あんなとこ見せつけられちゃったらねえ……。

問題は他にもあるが、結局はそこに行き着くのだと思うと、頭を抱えてしまう。

「まあなんにせよ、哀君が無事に戻ってきて何よりじゃわい」

視線を上げると博士からは険しい表情が消え、ほっとしたような笑顔を見せていた。

「それは博士のおかげね。前日に連絡をもらってなかったら、もう少し時間がかかってたと思うわ。ホント新ちゃんたら、私達に何も言わないで進めちゃうんだから……」

「まあまあ、新一君は君らに心配をかけたくなかつたんじゃよ」

博士はなだめるように言う。

まあ……今まで息子を放っておいて、言える事じゃないわね……。ソファに座ったまま二階の窓に視線を向けると、街灯に照らされた自宅のシルエットがぼんやりと見える。

「哀君は……これからどうするんじやろうな……」

博士を見ると同じように窓の外に目を向けていた。私もまた視線を戻す。

「あの子だって、今更バカなこと考えないわよ」

「……有希子さんはそれでいいと、本当に思っどるのか？」

私は博士の問いに答えることも、顔を見ることもできなかった。

「いや、すまん……君らを責めとるわけではないんじや」

「……わかってる」

だからせめて。

「私ができることを、やっていくつもりよ」

きつとあの子はそれを望まないのだからうけれど。それでも私は、私達は。

博士はまた沈みかけた空気を飛ばすように、手を叩いて明るい声をあげた。

「おお、そうじゃ。哀君の無事を、あの子にも伝えてやらんな」

「あの子？」

「新一君の友達じゃよ」

博士は腰をあげ、電話が置いてある方に歩いていった。なんとなく私も立ち上がり、窓の傍に歩み寄る。

カーテンを開けて外を見ると、雪はもうやんでいた。塀の上には随時積もっていて、それは家の中から漏れる光や街灯の灯りによって反射して外は薄明るい。

空を見上げると、さっきまで雪が降っていたというのに、無数の星が瞬いてた。

その中の大きな満月の柔らかかな光は、街全体を照らしているような気がした。

如何に奇妙なことであっても

「腹へった……」

空腹感で目が覚めた。

部屋の中は薄暗く、カーテンの隙間から見える空は深い闇に包まれていて、それが夜だということはなんとなくわかった。随分眠ったような気がするのだが気のせいなのだろうか。

だが今はそんな事よりなにか腹にいれたい。だけでももう少し眠ってもいたい。ぐだぐだと考えながら目を閉じて寝返りをうった時、顔になにかがあたった。

なにかふわふわとした感触で甘い香りがする。

なんだ……？

目を閉じたまま手探りでそれに触れてみると、それは髪の毛だとすぐにわかった。そしてそれが人の頭だと理解して俺は慌てて顔を離して体を起こした。

「……………は？」

俺にはできそうにない、正座を崩したような座り方で、膝から先を腿より外に開き、床に尻をつけて座り込んでいる。ベッドの端に、腕を枕にするように頭をのせて眠っていた。背中には毛布がかかけられている。

「……………なにしてた……こいつ？」

彼女の周りを見ると、見たことのある検査器具やファイルなどが置かれていた。

なんとなく状況は理解したが、まだ頭がぼーっとしている。

そのせいなのだろうか。俺は気づいたらその茶髪の髪の毛に手を伸ばしていた。少し癖のある髪の毛は、指の間を這うように抜けていき、こそばゆい感触がなんだか心地良い。

彼女はくすぐったそうに身悶えしてから、小さく声をあげゆっくりと顔をあげた。

「……工藤……君……？」

まだ意識がはっきりしてないのか、ぼんやりとした目でじっと俺を見上げている。

「風邪……ひくぞ……」

俺が声をかけると、ようやく目を覚ましたかのように数回瞬きをして体を起こした。

「……私……？」

頭に置かれている俺の手もそのままに、ゆっくりと部屋の中を見回している。そして最後にその大きな瞳は俺を捉え、眠たそうな顔は徐々に怪訝な表情に変わった。そして素早く手を振り払われる。

「なにしてるのよ」

「それは俺がききたい」

とは言うものの、なぜ彼女がここで眠っていたのかなんて一目瞭然

だった。彼女のあからさまな不機嫌な表情がそれを証明している。

「いつから起きてたの」

乱れた髪を手で整えながら口にした言葉に俺は苦笑した。

「…………おまえ…………そればっかだな」

俺が眠りから目覚めた時になぜその質問をするのかよく分からない。だがそんな疑問よりも相変わらずのその態度に、見慣れている姿ではないが確かに灰原なのだと思うと深い安堵感が胸の中で広がっていった。それと同時に胸のさらに奥のほうが悪くなる。

俺は衝動のままに彼女の腕を掴んで引き寄せた。

「……………工藤、君……………」

耳元で聞こえた彼女の声からは大きな戸惑いが窺えた。だが改めて彼女の姿を目にしてみれば、自分に逆らう事はできなかった。

彼女を失ったと思った時の喪失と自分に対する苛立ち。何か大事なものを手離してしまったようなあの感覚。それは今まで味わったことのないものだった。

それを俺は認めたくなかった。

解毒剤ができないかもしれないから？

違う。

自分の近しい人間が急にいなくなってしまうたから？

違う。

俺と同じ境遇の人間がもういないと思ったから？

違う。

約束を……守れなかったから？

それすらも……違うかった……。

そうやって違うものを消去していけば、導きだされる答えは一つしかなくて。そしてそれは確かに今まで蘭に向けられていたものだった。

そんなわけあるはずがない。そう自分を否定しても、考える事全てが彼女へと繋がっていつて。

どうして？　なんで？　なぜ俺は灰原に……。

でも、こうして彼女に触れてみれば、誤魔化す事なんて、できなかつた。

「怖かつたんだ……」

違う。俺が認めたくなかつたものはそんなことは通り越していて、もっと先にあつた。

「おまえがいないのが……怖かったんだ……」

その感情が向けられている相手がもつけないのだと。もう会うことができないのだと。それを認めるのが怖くてたまらなかった。そんな怖さなど俺は知りたくもなかった。

彼女の首もとに顔を埋めると、先程と同じ甘い香りがして、冷えた体温が頬に伝わってくる。

なんで抵抗しないのか、など今の俺には考える余裕もなく。今はただ、近くで聞こえてくる浅い息づかいと、伝わってくる鼓動を感じていたい。

生きてここにいるという証。彼女の命の音を。

あの時手離してしまったものが確かにこの胸の中にある。

「ちよつと見ない間に、随分泣き虫になったのね……」

そつと背中と頭に手が添えられた。

「……泣いてねえよ」

「……そつ」

まるでいたわるように、指が髪の上を滑っていく。彼女の言葉とは裏腹に、その手はひどく優しくかった。

「……っ」

眠る前はあんなに冷静でいられたのに、こんなにも彼女を求めている

る。

ああ、いつから俺は……。

理由を探してみたところで今の俺には思い当たらない。はっきりとしているのは、この感情が確かな恋情だという事だけだった。

手を肩に置きゆつくりと体を離す。至近距離で見つめ合うとその大きな瞳に吸い込まれそうだった。

「灰原……俺……俺は……」

その時部屋の外で物音がして、ガチャリと扉が開かれた。

「あら、二人とも起きてたの？」

手を口の前にあて、ふあ、と大あくびをかましている俺の母親の姿があった。

突然の事態に俺は声もでなかった。母さんは目をこすりながら片目で俺達を一瞥すると、ピタリとその動きを止める。

「……おじゃまだったかしら？」

「バ、バー口。何を……」

慌てて彼女の肩から手を離す。母さんのその言い方が、からかうようではなく、本当に疑問に思ったような調子だったので俺は余計に焦った。

「じゃあ私はもうひと眠りしまふ」

あくびをしながら喋っているので語尾が怪しい。本当に眠いのだろう。

「お、おい……ちょっと」

「おやすみー」

パタリと扉は閉められて部屋の中は再び静寂に包まれた。

おそろおそろ灰原を見ると閉められた扉を呆然と見ている。そして俺は改めて彼女との距離が近い事にどきりとした。

「あ……のさ……」

灰原はゆるりと顔をこちらに向け、小さく息を吐いて床にぺたんと尻餅をついた。

「一気に目が覚めたわ……」

「ハハ……」

「気まずい……」。

「……」

「……」

「……」

「は……腹へったな」

「……用意するから、あなたはシャワーでも浴びて、頭をすっきりさせてきたら？」

彼女の言葉の意味をなんとなく理解した。

「いや……灰原、俺は……」

彼女は俺の言葉も待たずさっさと部屋をでて行ってしまった。

壁に両手をついてうなだれるように頭からシャワーを浴びていると、少し落ち着きを取り戻した。

蘭が言っていたように今まで灰原は母さんといたのは確かなようだ。おそらく父さんも一枚噛んでいるはずだ。だがその理由が全く思いつかない。それになぜ今まで姿を消していたのか、なぜ連絡をよこさなかったのか……。

ふと視線をあげるとタイル張りの壁についている小窓が目に入る。

そのガラスの向こうに見える空はうっすらと明るくなっていた。

流れ着いた先

勝手にごそごそするのは躊躇われたが、彼に食事の用意ができないのは知っている。

大きな冷蔵庫には様々な食品が詰め込まれていた。どれも消費期限が新しい。たぶん彼の母が用意したものだろう。博士から聞いた話によると、一応食事は三食とっているらしい。だが量はごくわずかだと言っていた。あまり濃い味のものではないほうがよさそうだ。

彼が本当におなかをすかしているのかは疑問だが、用意する、と言った手前そうするしかない。それに、例えそうでなかったとしても食事をとったほうがいいのは確かなのだから。しかし、こうしていることで少しでも気を紛らわせていただけなのかもしれない。

彼の行動に驚いてもいたが、それ以上に簡単にそれを受け入れてしまった自分自身に驚いた。さっきの自分はどうかしていたとしか思えない。

目覚めたばかりで気が緩んでいたのだろうか。一度目の時とは違い、屋内で二人きりだったからだろうか。彼がいつになく弱々しい姿だったからだろうか。そうやって理由を幾つか並べてみても、それは自分への言い訳にしかすぎないという事も自覚していた。

怖かった、なんて言われると思ってなくて。

言って……くれるなんて……。

彼のその言葉の前では、私のどんな抵抗も無駄でしかなかった。

抱きしめられたことに何も感じなかったわけではない。だがそれよりも、彼のその言葉が……。

嬉しかった……。

自分の身を案じてくれて。自分の死を怖いと感じてくれて。そしてその事に涙をみせた彼を突き放すなど、私にできるはずがなかったのだ。

でも、それはきつと違うから……。

かぶりを振って大きく息を吐き、頭を切り替える。とりあえず今は彼の食事を作らなければ。

シンクの後ろにある茶色い食器棚を開こうとした時、遠くで物音がして、速い足音が近づいてきた。

「なあ、今何時だ？」

「はあ？」

キッチンに入ってくるなり少し焦ったように聞いてきた彼に気の抜けた声がでってしまった。振り向くと彼の髪の毛はまだ濡れていて、

したたる水滴がグレーのハイネックの首周りに染みを作っている。慌ててこちらにきた様子が窺えた。

「何時って……」

壁にかけられている時計をみると、針は6時半を少し回ったところを指している。

「6時半でしょ？」

なぜいちいち私に聞くのか。

「……朝の、だよな？」

一瞬意味がわからなかったが、はっとしてポケットの携帯を取り出すと、ディスプレイには06:32と表示されていた。18時ではない。夜だと思っていたが早朝だったらしい。

半日近く眠っていたというのか。

言われてみれば頭が少し重い。彼の母がなぜあんなに眠たそうにしていたのかも納得がいく。おそらく何度も様子を見に来ていたのだろう。なぜ今まで気がつかなかったのか。

「気づかなかった……」

「空が明るくなってから、おかしいと思ったんだよ」

彼はともかく、私も余程疲れていたのだろうか。

「おまえ……その……いつから俺の部屋にいたんだ？」

少し遠慮がちに聞いてくる。いらぬ事を言ってしまった。

「さあ。それよりあなた、朝からこれ食べれる？」

これ以上誤解をさせたくも受けたくもなかった。

誤解？

「……ああ、腹へってんのはホントだから」

「向こうで待ってて。もう少しでできるから」

彼に背を向け、食器棚の扉を開けて器をとりだす。

「……あのさ、灰原」

「髪、ちゃんと乾かしてきたら？」

「……おう」

私は何を恐れているのだろう……。

ダイニングのテーブルにうどんの入った器を置くと、ただきま
す、と言うと彼は早々に箸をつけた。どうやら空腹だったのは本当
らしい。食欲はあるようなのでほっと胸をなで下ろす。私はお茶を
持って向かい側の椅子に座った。

「もうちょっとゆっくり食べなさい」

持っていたお茶を彼に差し出す。

「……へいへい」

彼は拗ねたように言う。私の言った通りゆっくりと………というのは始めだけだった。

「おなか壊してもしらないから」

「……心配してくれてんの？」

「あなたねえ……」

思わず溜め息がでる。彼の調子に先程まであれこれ考えていた自分が馬鹿らしかった。だが笑顔をみせる彼に、やっと心の底から安堵する。まだやつれた青白い顔ではあるが、その瞳にもう曇りはないように思える。

「おまえは食わねーの？」

「え？ ええ、私はおなかすいてないから」

あれから眠っていたという事は、昨日のお昼から何も口にしていな
い事になる。けれども食欲などこれっぽっちもなかった。

彼は、ふーん、と言うと黙々と食べ進める。私は頬杖をつき、そ
んな彼をただ黙って眺めていた。

食事を終わると彼はようやくやくひとごちついたようで、お茶を一
口飲むと大きく息を吐いた。

「ごちそーさん」

「身体の調子はどじつ？」

「ん？ 別に……」

「学校には行けそう？」

「はあ？」

彼は少し声を荒げ、何を言いだすのだという表情だ。

「今日は行ったほうがいいわ。色々とね……」

ゆっくり休息をとったほうがいいとは思う。しかし昨日の出来事は結構な数の生徒に見られている。彼の母が予想以上に早く（いささか早すぎたような気がするが）駆けつけてくれたので騒ぎにはならなかったが、工藤新一は有名人なのだ。噂などすぐに広がる。身体の調子がそれほど悪くないのであれば、今日は登校するべきだ。

「何だよ色々って？」

「彼女に言い訳するなら早いほうがいいでしょ」

「言い訳？」

何の事か分からないといった表情をしている。本当に覚えていないらしい。自分の口から告げるのは抵抗があつたが、昨日の出来事を説明しないわけにもいかなかった。

彼は口を挟むこともなく腕組みをして目を閉じ、黙って私の話に耳をかたむけていた。

「そっか……迷惑かけちまったな」

しばしの沈黙の後、彼はそれだけを口にした。そしてその反応はとても淡泊なもので、言い様のない感情が胸に込み上げる。

「別に……。とにかくわかったでしょう？ 今日学校を休んだら、彼女に変な誤解をさせたままに……」
「誤解、か……」

私が全てを言い終わる前に、彼はぽつりと呟き、薄く目をあけて私を見る。

「そうよ。だから……」
「おまえ……わかってて言ってるじゃねーだろーな……」

苛立った口調で彼は私の言葉を遮る。そしてその言葉の意味が、今の私に理解できないはずがなかった。

そんなものとは程遠く

口にだした後で、なにかとんでもないことを言ってしまったと思
ったが、今更訂正する気などさらさらない。だがそれ以上言葉が続
かないのも事実だった。

さつきは母さんが現れたことで中断されてしまったが、あの時俺が
何を告げようとしていたかぐらい、言わなくてもわかってはいるはず
だ。

案の定、灰原は狼狽ろうたひしたように俺から目を転じて押し黙る。

彼女のその態度に俺は余計に苛立った。いや、それ以前に俺はどう
してこんなにイライラしているのか。自分でもわからない。

カチカチと時計の音だけが響くなか、先に沈黙を破ったのは彼女だ
った。

「着替えてきたら。彼女、迎えにくるんじゃないの？」

そう言いながら俺の前に置かれている器を手に取り、キッチンに向
かって歩いていく。

「おい、ちよつとまって……！」

「時間ないわよ」

彼女は振り返ることなく言うつと足早にキッチンへと姿を消す。時計
に視線を移すと結構な時間がたっていた。

ちゃんと話をしたいところだが学校に行かないわけにもいかない。

確かに今の話を聞いた後では蘭の事は気がかりではあるが、俺にとつて……いや、結局は彼女の為になのか。もしかしたらもう遅い事なのかもしれないけれど、灰原は生きてここにいる。彼女を追いかけられない自分にごくもどかしさを感じながらも、俺はひとまず自室に戻ることにした。

カーテンを開けると、高くなった太陽の光で、部屋の中は灯りを点けなくても充分だった。扉の近くの点けっぱなしになっていたヒーターと加湿器を消す。加湿器なんて家にあっただろうか。不思議に思ったが、思い当たる人物はこの家には俺と灰原の他に一人しかいなかった。

ベッドの横には灰原の物と思われる荷物と彼女が掛けていた毛布が床に置かれたままになっている。

いつもの彼女なら気づかないはずがない。

「……………つたく」

毛布をたたみベッドの端に置いてその横に座り込む。すると、さっき自分がこの部屋でとつた行動と醜態を思いだし、途端に気恥ずかしくなった。

「なにもなかったような顔しやがって……………」

そうやって口にしてから、なぜ自分がこんなに苛立っているのがわかった。

彼女の余りにも冷静な態度に俺はひとりで苛ついていたのだ。この部屋に二人でいた時からそう時間はたっていないと言つのに。しかもどうやら俺は昨日も似たような行動をとつたらしい。にもかかわらず彼女は平然とした口調で話すのだ。いつもの無表情で。

俺が勢いに任せてその言葉を口にしようとした時の表情とは別人と思えるほどに。

だが乱雑に置かれたままになっている荷物や、床に落ちたままだった毛布を見ると、平静を装っていたのだろうか、とも思った。それはそれで腹が立つのだが。

しかし今は他に考えなければならぬことがある。

とりあえず今はこの厄介な感情と苛立ちを頭の隅に追いやつた。

俺は制服に着替えると、適当に灰原の荷物をまとめた。勝手に触るのはどうかと思つたが、私物と思われるような物は一切なく、検査に必要な物ばかりだ。それらしいものはベッドの傍の椅子に掛けられている、やけに真新しいグレーのニットコートと、暖かそうな白い色のマフラーぐらい。わざわざ俺の部屋に取りにくるのも彼女も面倒だろう。

自分と彼女の荷物を全て持ち廊下にでる。灰原の荷物は思ったよりも重量があつて少し驚いた。冷え冷えとした廊下を歩いて階段をおりると、その気配から灰原はまだキッチンにいるようだった。俺は、向こうにいるから、とだけ声をかけリビングへと続く扉のドアノブに手をかけた。

リビングにある窓も全てカーテンが閉められていて部屋の中は薄暗い。ただでさえひんやりとしている部屋が余計に寒く感じる。窓の傍まで歩み寄りカーテンをあけると、一気に部屋の中は明るくなり思わず目を細める。俺はエアコンの暖房をつけてからソファに腰を下ろした。

リモコンでテレビをつけると、画面の向こうには若い女性アナウンサーが街にくりだして、流行りの電子機器だとか安くて美味しい食べ物だとかの紹介をしている。テレビを見るのは久しぶりだった。何度かチャンネルを入れ替えてみても、この時間帯はどこも同じような内容のものをしている。

なんだ……？

不意に頭の中で何かが引つかかる。しかしそれが何なのかはわからない。

もやもやとしたまま考えこんでいると、足音が聞こえてきた。

「あら、悪いわね。持ってきてもらって」

開け放たれたままになっていた扉の横から彼女は姿を現した。そして俺の横に座ると荷物を探り始める。

「ちょうどよかったわ。昨日はちゃんと検査できなかったから」

「なあ、灰原。おまえ今まで……」

「話は後にして」

強い口調で言い放つと、ファイルをテーブルの上に広げ始める。取り付く島もない。とりあえず今は灰原の指示に黙って従う事にした。

テレビは天気予報をやっている。今日は快晴らしい。

「よくこんな状態で風邪をこじらせなかったわね」
「ほっとけ」

俺はブレザーを羽織りながらむっとして答えた。

「おまえは？」

「何が？」

「何が？ じゃねーよ。おまえも解毒剤飲んだんだろ。身体はなんともないのか？」

「あなたが大丈夫なんだから問題無いに決まってるでしょう」

灰原は片付ける手を休めることなく呆れたように言う。

「いつ戻ったんだ？」

「昨日よ。言っただけだよ」

という事は昨日の灰原の言葉はそのままの意味だったらしい。しかし俺が知りたいのもうひとつの意味だ。

「じゃあそろそろ教えろよ」

「何を？」

「ふざけんなよ……。今までどうしてたんだって聞いてんだよ！」

相変わらずのどこか冷めた態度に、俺は自然と声が大きくなっていった。灰原は小さく溜め息をついてから、手に持っていたファイルを

ボタンと閉じた。そしてその端正な顔をこちらに向ける。

何の感情も浮かんでいないその表情は、俺の知っている、そして…
…余りにも灰原哀だった。

戻った光

寝不足でぼんやりとした頭のまま家を出てきたけど、太陽の光や外の気温の低さでしだいに意識は覚醒に導かれた。

昨夜降った雪はすでにその形を変え、小さな水溜まりになって歩道のいたるところ存在している。それに写る青空には雲ひとつない。歩道の脇に僅かに残っている雪もこの天気では下校するときにはなくなっているだろう。しかし身体を貫くような突風が吹き、はためくスカートをおさえながら立ち止まる。やはりいくら晴れていても寒さはなんら変わることはない。そう思いながら私はマフラーをかけ直す。だけど冷たいマフラーは、私の首から体温をさらに奪っていっただけだった。

私は再び歩きだしながらコートのポケットから携帯を取り出した。何回か操作すると電話番号とメールアドレス、そしてその人物の名前が表示される。だけど電話をかけることもメールをだすこともできなかつた。今まではためらいなくできていたことなのに。

あれからどうしたんだろう。

たぶん今日は学校に顔を出すことはないと思う。そう考えて新一の家の前を通り過ぎてきた。それに新一のお母さんもいるはずなので朝早くから訪ねていくことは迷惑かもしれないと思っただの。

さんざん悩んでから、結局携帯をポケットもどす。それにもし今新一と話をすることができたとしても、本当に聞きたい事がそれを邪魔しそうな気がした。

沈んだ気持ちのまましばらく歩いてみると交差点が見えてくる。信号待ちをしている人混みの中で、思いがけない人物の背中が私の視界に入った。急いで駆け寄りその背中に声をかける。

「……………新一？」

新一は振り向いて私の眼を真っ直ぐ見る。

「おう……………」

新一は寒そうに肩をすくめながら、首に巻いている白いマフラーを口元まで引き上げ、制服の上に着ているコートのポケットに手を入れた。

「おはよう……………。新一、大丈夫なの？」

「ん……………。ああ、まあ……………」

返事をするものどこか上の空で、気づくと新一の視線は私から逸れ、私の後ろの方を真剣な目つきで見据えている。なにかあるの、と私が振り返ろうとすると新一は私の肩を掴んで曖昧に笑ってみせた。

「なんでもねーよ。ほら、行こうぜ」

私の肩から手を離すと横断歩道を渡っていく。私は慌てて新一の後を追って横に並んだ。

「ねえ、ホントに大丈夫なの？」

「……………ちよっと疲れが溜まってただけだよ」

寒そうにはしているものの、新一はしつかりとした足取りで歩いている。それに帰ってきてからの誰も寄せ付けないような雰囲気は無くなっているような気がした。

「ああ、そっぴや昨日は悪かったな。迷惑かけちまったみてーで」
「え？ ……ああ、うん。全然大丈夫だよ」

喋りながらも新一は顔を前に向けたまま、目をせわしなく右へ左へ動かしている。そしてその目はどこか険しいもののように私の目には映った。

「なにかあるの？ さっきから周りを気にしてるけど？」
「ん。いや……」

それだけを言うと新一は黙り込んだ。新一の様子がおかしいと感じたけど、私には他に気がかりがある。先程までは躊躇していたのに、実際に新一を前にすると私の口は勝手に開いていた。

「ねえ、新一。あの人……宮野さんとはどういう知り合いなの？」

私があの人の名前を口にした瞬間、新一は不機嫌そうに顔を歪めた。

「……あいつは」

新一はなにかを言いかけて立ち止まる。そして驚いた表情で私に顔を向けた。

「蘭……なんであいつの名前知ってた……！」

新一の余りの驚きように私の方がびっくりしてしまつ。名前を知っている事がそんなに驚く事だろうか。

「新一のお母さんに聞いたけど……」

「母さんが？ そうか……」

新一は少し眉をひそめてまた歩き出す。

「でも新一、新一はあの人のこと灰原って……」

「俺が初めて会った時は灰原だったんだよ。だからつい今でもそう呼んじまう時があるんだ。ほら、灰原哀っていただろ？ あいつはその子の……従姉妹いとこなんだよ。今はちよつと事情があつて名字が変わつちまつたんだ」

「そうなんだ……」

新一は私の疑問を見透かしたように、尋ねていないことまで教えてくれる。そういえば新一のお母さんも理由があつて預かつていたと言っていた。それ以上深く聞く事はできそうにない。それに今の話はどうもしっくりこない。でもそんなことよりも……。

機嫌、悪い……？

私があの人の名前を口にしたときから、明らかに新一の雰囲気がい……というか昔から知っている機嫌が悪いときのそれだ。

でも……

「なあ、蘭。ちよつと聞いていいか？」

「え……うん。何？」

「年末あたりにあった大きな事件のこと、蘭は知ってるか？年明けもずっとニュースやってたやつ」

「うん、それなら知ってるよ。原因がわからなくて、テロじゃないかってことになった事件のことだよな？」

あの事件のことはよく覚えている。テレビはその話題ばかりだったし、丁度コナン君が博士の家に泊まりに行った翌日のことだったからだ。

「……テロ、か」

新一は何かを考えるように手を顎に持っていく。

この……新一は、

「他には？ 警察は何て発表したんだ？」

「そついえば……被害の割には亡くなった人や怪我した人はいなかったらしいよ。でも、結局警察は他に何も掴めなくて、たぶん今も調査中……とかじゃなかったかな……？」

テレビでは何の情報も掴めない警察を、マスコミは激しくバッシングしていた。裏で何かあるじゃないかと報道したところもあった。お父さんとお母さんが、警察もかなり頭を抱えているだろうな、と珍しく真剣に話し合っていたのも記憶にある。

「……………そうか」

苦い表情でそれだけ絞り出すと新一は眉間の皺をさらに深くする。

「あの事件のこと調べてるの？　もしかして新一が今まで追ってた事件って……」

私がそう言つと、新一ははっとして顔の前で手を振って笑つた。

「いや、ちげーよ。ちょっと気になっただけだ」

……新一、だ

久しぶりに会話らしい会話をしながら歩いていると、いつの間にか学校の校門の近くまで来ていた。

昨日見た光景が鮮明に蘇る。

だんだんと私の足取りは重くなり、自然と重苦しい沈黙が支配する。新一は昨日の事を本当に覚えていないのか、スタスタと校門を通り過ぎていく。私の足は校舎に入つてすぐの下足場で止まっていた。

「ねえ……新一？」

「……なんだ？」

新一は下足箱に靴をいれながら顔だけを向ける。両手で鞆をギユツと掴んで私が口を開こうとした時、下足箱の影から担任の先生が姿を現した。

「お、工藤。大丈夫なのか？」

「え？ …… ああ。 はい …… まあ」

「そうか …… ならいいんだが ……。 工藤、 ちょっと話がある」

「あー、 えー …… っと」

新一は言葉に詰まりながら私を見る。

「あ、 じゃあ私先に行ってるね」

「すまん、 毛利。 …… 工藤」

「 …… 蘭、 また後でな」

「うん ……」

新一と先生は足早に職員室のある方にむかって歩いていった。 一人取り残された私の横を同じ制服を着た生徒達がどンドン通り過ぎていく。

新一の背中を見送りながら、 やっぱり新一だと思った。 ちゃんと私の目を見て話す新一は、 久しぶりに笑顔を見せた新一は、 確かに以前の新一だった。

よかった ……

いつもの新一に戻ってそう思ったのは本当だった。 本心からそう思う。

だけど、それが何がきっかけなのか。 どうしてそうなったのか。

誰のおかげなのか …… なんて、 考えたくはなかった。

カケラを拾い集めて

「失礼しました」

暖房の効いている職員室を出ると生徒の姿はすでに無く、静まり返った廊下はどこか寂しげな印象だった。ドアの横の冷たい壁にもたれ、白い床を見ながらふっと小さく息をつく。

正直助かったと思った。

さつき蘭が何を言おうとしていたかぐらい、蘭の顔を見ていれば大体の想像はつく。しかしそれを問われたところで、どう答えればいいのかなんて俺にだってわからない。それに昨日の出来事を知っていながら、蘭と二人で教室に入っていく度胸など今の俺にはなかった。

そんなふうに冷静に考えている自分に嫌悪感を感じながらも、やっぱりそういうことなんだな、と変に納得する。

担任の教師の話は半ば予想していたことだったので、それほどショックではなかった。俺が倒れたことを知っているような素振りだったのは、昨日もその話で俺を追いかけた時にその場面に遭遇したらしい。担任の話が聞かされて最初に考えたのは両親でも蘭のことでもなく、あいつのことだった。結局無駄足になってしまったわけだが、どうやら今はそれどころではないらしい。

予鈴は既に鳴っている。このまま帰宅してもよかったのだが、あいつとは顔を合わせづらい。何から考えればいいのか、情報を整理する時間が欲しくもあった。多少の躊躇いはあるが仕方ない。俺は深

く息を吸い込むと、もたれていた壁から離れ教室に足を向けた。

少し緊張しながらドアを開けたが、教室の中はいつも通りの雰囲気だった。てつきり園子にでも詰め寄られると思っていたのだが。どうやら彼女の心配は杞憂に終わったようだ。少しホツとする。もしそうなら俺に^{すべ}対処する術などない。

ロッカーにコートとマフラーを入れ自分の席に移動する。その間にある一点からずっと視線を感じていたが俺は見返すことができなかった。

明日、明後日と休みを挟み、来週から試験らしい。なので授業もテスト勉強ということ^で自習だった。教師も余っている椅子に座り文庫本を開いている。試験など俺には関係のないことだが、静かな教室は推理するにはいい環境だった。俺は椅子を少し後ろに引き、背もたれに深く身体を預け、腕組みをして目を閉じた。

蘭があいつの名前を知っていたのには驚かされたが、あいつが昨日の事を話してくれた中に含まれていたことなので、一応その後は予定通りだ。何とか誤魔化せたようなので、差当たったの問題はクリアと言っているだろう。

「あなたが彼女の前で私のことを灰原と呼んだことだけで、そのことで彼女に追及されても、ここは変に誤魔化すよりそれを貫いたほうがいいわ」

どういうことだ？

「私と灰原哀は姉妹だとかそういう設定にして、事情があつて私の名字は変わってしまったと言っても言いなさい。私とあなたが知り合った時は灰原だった、てね。それに、違う名前ならまだしも、灰原の名がでた時点で彼女も不審に思つてるかもしれないわ。私が誰かに似てるってね」

そうだな……。おまえ、あんま顔変わんねーもんな。

「………………。ところで、あなたは私の名前知ってるのかしら？」

ほとんど彼女の提案通りに話した。ただ、姉妹という設定にはしたくなかった。特に理由はない。なんとなくだ。まあこれぐらいの変更に齟齬^{そご}は発生しないだろう。

問題はその後、蘭に聞いた話の事だ。

蘭の話信じるならば、あれから大した進展は無いらしい。まだコナンの姿だった時まで記憶をさかのぼると、確かにテレビでは何の情報も出ていなかったような気がする。

だがそんなことありえない。

奴らを捕らえたのであれば日本の警察に引き渡すはずだ。それに、よく考えれば俺に何の連絡もないのはおかしいのだ。あの人からももし奴らを捕らえそこねたのだと仮定すれば、何の情報も明るみに

なっていないのは当然の事と言えるだろう。しかし、もしそうであれば、俺が工藤新一に戻り学校に通い始めてから一週間ほど経過しているにも関わらず、こうして普通に生活できているのには疑問が残る。ベルモットが何らかの手を回したとも考えられるが、それなら灰原が無事なはずがない。そして、やはりそうであればジヨディ先生から連絡があるはずだ。

という事は、奴らは捕らえたが何らかの問題が発生して日本の警察には事情を伏せるように要請した、あるいは全てを隠しているという事だ。

どっちにしろ、俺が腑抜けてた間も、確実に事態は進展してたってわけだ……クソッ……！！

思わず頭をかきむしる。今更悔やんだところでどうしようもないのだが、自分への歯痒さと焦る気持ちは募るばかりだ。

それにこの先を推測するには決定的な情報が抜け落ちている。

やはりあいつに聞くしかない。あいつが今までどこで何をしていたか、それがわかれば一気に答えに近付けるとは思っていたが……。

「あなたには関係ないわ」

「……は？」

俺の眼を見て言う彼女の瞳は真剣なものだった。

「おい……俺は真面目に聞いてんだぞ……」

「私も真面目に応えたつもりだけど？」

あっさりと言つてのけると、俺から視線を外し、持っていたファイルを鞆の中に入れる。冗談を言っている風ではなかった。それがわかると押し込めていた苛立ちとともに頭に血が上っていく。

俺は彼女の肩を掴んで強引にこちらに向かせた。

「おいっ……！ ふざけんなよおまえ！」

「別にふざけてなんかないわ」

ぱしりと俺の手を払いのけると冷笑といつてもいい微笑みを浮かべている。

「私が今まで何をしていたかを、どうしてあなたにいちいち言わなきゃならないのよ？」

いつもなら軽くかわせそうな彼女の言葉は、今の俺には怒りを増幅させるのに十分だった。

俺は怒りにまかせて彼女に何か口走ったが、彼女の冷えた視線に何故か耐えられず、俺はリビングのドア開けて玄関の扉の前まで来るとそのまま家を飛び出した……が。

「……さっみい！」

一気に頭が冷えた。

高い青空が広がっていて太陽の日差しがあるものの気温は低い。庭は雪が薄く積もっていて一面真っ白だ。冷たい風が通り抜け自然と両腕を抱える。寒い。だがいつまでも突っ立っているわけにもいかず、とりあえず扉を押し開けようと手を伸ばした……のだが。

思わず手を引つ込める。鉄の扉は凍ったように冷たくていつそう寒さが増す。

よく考えてみれば学校に行こうにも鞆を持っていない。財布と携帯もだ。だが取りに帰ろうにもあいつとは顔を合わせたくない。いや、合わせられない。博士の家に行くか？ダメだ、それだとどっちみち彼女と鉢合わせしてしまう。

ど、どうすっかな……

身体が震えだしてきた。立っているだけでは身体がどんどん冷えてくる。しばらく悩んでいたが他にどうしようもない。仕方なく踵かかとを返し家の中に入ろうとした。

「いつ……!」

振り向くと玄関の扉の前に彼女が立っている。思わぬ事態に心臓が跳ねる。俺が言葉を詰まらせている間に彼女は近づいてくると、持っていた俺のコートと鞆、そして俺の物ではない白いマフラーを俺に押し付けた。そして人差し指で俺の胸をつつき、睨むように俺を見上げる。

「いい？ 絶対に無理しないで」

彼女はそれだけを言い残し、呆然としている俺を置いて扉の向こうに消えていった。

「おい、工藤」

「え？」

目を開けると前の席の男子が半身になって俺を見ていた。

「もう昼休みだぞ？」

「あ、ああ、わりい……って、もう昼休み？」

黒板の上の時計を見ると12時50分だった。

「寝てたのか？」

「いや、そういうわけじゃねーけど……」

さすがに驚いた。色々考える事が多かったとはいえ、そんなに時間がたっていたとは。もしかしたら記憶を反芻するうちに本当に眠っていたのかもしれない。

俺はそいつに礼を言うとか机の上に寝そべって脱力した。

程良い疲労感と、久しぶりに頭を使ったせいか激しい空腹が襲ってくる。とりあえず昼飯にしよう。このままでは頭が回らない。

購買にでも行くか……。

俺はそのままの体勢のまま、財布を取り出そうと机の横にかけている鞆に手を伸ばした。

「ん？」

たいして物は入っていないはずなのに、いつもと違う重みを感じる。姿勢を正して鞆の中を確認すると、無地の青い風呂敷に包まれた四角い物体が入っていた。

これ……

母さんは寝ていたはずなので、用意したとすれば彼女しかいない。家を出た時から違和感に気をとられていたとはいえ、どうして今まで気づかなかつたんだろうか。

どういつつもりだ、とは思ったが悪い気はしない。むしろ……なんというか……。じわじわと胸の中が何かに支配される。同時に朝と同じ気恥ずかしさでたまらなくなった。

朝はケンカのようになって別れてきたのに。あんなに冷たい態度をとられたのに。朝からずっと心の中で燻くすぶっていた苛立ちが瞬時に消え去ってしまった。

なんだ？ なんだろ？ 何かおかしい。彼女の言っている事とやっている事は、なんとなくチグハグな気がする。

「工藤、なにひとりでニヤニヤしてんの？」

次は横から声をかけられる。

「あ、いや……アハハ。な、何でもねーよ」

咄嗟に取り繕ったが頬がだらしなく緩んでいることが自分でもわかる。

声をかけてきたクラスメイトは怪しげな表情で俺をじっと見ていたが、急に口を緩めて吹きだした。

「お、おい。なんだよ……」

「あー、いや。やっと元気になったなーって思ってさ」

「え……？」

意味がわからず言葉に詰まる。俺がそうしている間に、他のクラスメート達が数人俺の机に歩み寄ってきた。

「おー工藤、やっと元に戻ったか？」

「みんな心配してたんだぜ？　なんか様子おかしかったからさ」

「ホントホント。喋りかけんな、つー雰囲気だったし」

「まあ、探偵やってたら嫌な事件にも遭遇するよな……」

「あ、バカ！　そういうこと言うなって！」

こいつら……

今になって気づいた。

俺はこんなにも周りに心配をかけていたのだと。多少の誤解はあるようだが（あながち間違いではない）こいつらはこいつらなりに俺を気遣ってくれていたのだ。

学校に来ていたのは、確かにあいつの為にでもあった。だがそれだけではなかったのかもしれない。

自分の居場所や、存在価値を無くしたくなかった。俺は工藤新一なのだ。そうやって現実逃避をして。自分を守る為に。

ただそれだけの為に……。
なのにこいつらは。

窓の外に視線をやると、細かくちぎれた雲が青空の下を漂っていて、柔らかな日差しが街並みの上に降り注いでいる。

ここから見える街も、眼に見えない場所も、確かに存在している。

それが嫌だった。

彼女が存在しない世界は、色褪せていて、とてもおかしな世界だった。色というバランスを失った世界は、今にも壊れてしまいそうでも周り人間はそんな歪んだ世界を気にもせず歩いている。

こんなはずじゃない。

俺が望んだ日常はこんなものじゃなかった。

そう思って眠りにについても、目覚めれば変わらない世界があつて。

でも、今日は違う。

俺の視界に入るモノ、全てが鮮やかに色付いている。灰色のビルも、それは一つ一つ違ったイロで。そしてその中には俺と彼女が通っていた小学校もあるはずだ。

あいつら、どうしてるかな……

さよならも告げずに別れてしまった幼き友人達は、急にいなくなつた俺達をどう思っただろう。おそらく、彼らの知る俺達とは、もう二度と会えない。この先解毒剤の効果が切れないとは断言できないが、そうならない確信が俺にはあつた。

未だ俺の周りを取り囲んで騒いでいるクラスメート達に、もう大丈夫だという旨を伝えると、一様にどこか安心したような笑みを浮かべながらそれぞれの席に戻っていった。

自分の情けなさに腹が立つ。しかし俺に悔やんでいる暇はない。後悔など、後でいくらでもできるのだ。

もうこれ以上後悔しない為に。

剥がれゆく決意

キーボードを叩くのは本当に久しぶりだったが、不本意にも長年やってきたこの行為は手が覚えていた。

まず私がやらなければならなかった事のひとつ。

昨日と今朝とつた彼と自分のデータを入力していく。結局昨日は彼の傍から離れることができず、しかもそのまま眠りこけてしまったので、ちゃんとデータを纏められていないのだ。私も博士と同じく特に問題はないという結論に至ったが、細かなところまで確認しなければ完全に安心はできない。博士が今までとっていた彼のデータを開きそれと照らし合わせていく。

朝と同じだ。

こうやって何かに没頭することで、気持ちの整理から逃げようとしている。彼の怒りは当然の事だというのに。それを覚悟して帰ってきたはずだったのに。

彼が最後に吐き出した言葉は、酷く耳に残った。

『俺がつ！俺が、今までどんだけっ………！』

怒りの表情は、みるみる悲痛なものに変わって。そしてそれは……今にも泣き出してしまいそうなの。

広いリビングに取り残された私を襲うのは、虚しく響くテレビの音

声と酷い後悔だった。

区切りのいいところで一旦手を休める。時間を確認すると丁度14時になるうとしていた。

家の中を隅々まで掃除し終える頃には正午を大きく回っていて、シャワーを浴びてから博士と昼食をとった時には13時だった。

まだ一時間もたっていない。

無理な体勢で長時間眠っていたせいか、身体が少し軋む。少し横になろうかと立ち上がったが、この部屋にあるソファはこの身体には小さすぎた。仕方なくそのまま椅子に腰を下ろす。

私は一体何をそわそわしているのか。

解釈を広げればあれも私の役割の一つ。

だがそれ以外のものがなかったのかと問われれば、否定できないのも事実だった。そんな自分が嫌になる。

コンクリートが崩れ落ちる中、彼に伝える事のない気持ちを口にした。最期ならばと。しかし、しぶとく生き残ってしまった今では、それがどれだけ強く、大きなものだったのかを自覚させるだけだった。

この邪魔な感情の大半は置いてきたはずだったのに。

あの時、彼がひとりで決着をつけにいこうとした時、彼女が私を守ってくれた時に、自分がどれだけ危険な存在だったかをあらためて思い知らされた。そして、自分が辿るであろう結末も。

だからその時まで今を精一杯生きようと思った。

同時に自分の想いは押し込めて、閉じ込めて、封印して。だが組織の脅威がほぼ無くなったと言える今、またこの場所にいる現状では、瞬く間に気持ちは再燃し、もう自分では手をつけられない。彼の行動もさらに追い打ちをかけている。

あの時の選択は、間違っていたのだろうか……？

瞼を閉じた刹那、強烈なプレッシャーを感じて眼を開いた。

「なんでっ……!!」

「手荒な登場ですまないね」

崩れた壁から姿を現したのは見覚えのある男だった。反射的に麻酔銃を構えるが、一気に距離を詰められ腕時計を奪われる。そして瓦礫のほうに放り投げられた。

「あれを使われるとやっかいなんでね……」

「っ……!!」

「話しは後だ。脱出するぞ」

「え？」

訳のわからないまま抱えられる。どうしてこの人が私を助けてくれるのか。

私を抱えながらも身軽に足を進めていく。

「少し遠回りになるが我慢してくれ」

意味がわからない。

何故あの人が助けてくれたのかも。

何故あの人がFBIの人達と喋っているのかも。

自分が幼児化している事も忘れるほどに混乱した頭では、答えには辿り着けなかった。

黒煙を吐き出しながら崩れていく巨大な建物は、漆黒の空を赤く染めるほどの炎を燃え上がらせている。私を隠すように並んでいる車の影から、先程まで自分がいた場所が崩壊していくのを呆然と眺めていると、一台の車が私の横に位置づけた。車から降りてきたジヨディ先生は驚いた表情で私を見ている。

「あなた……！ 無事だったの！」

「……私も……よくわからないわ……」

「まあ、なんにせよ、よかったわ」

本当に安堵した表情になって私の前にしゃがみ込む。そこで気がついた事があり、辺りを見回してみる。

彼の姿が見えない。

まさか……

「く……江戸川君は！」

「今病院にいるけど、怪我はたいしたことないわ」

「そ、そう。よかった……」

普段なら絶対言いそうにない言葉が自然と口から零れた。

同時に手足がチリチリと痛むのを感じる。上着は所々裂けていて、隙間から見える自分の腕は、細かい擦り傷で赤くなっていた。強い風が隙間から入り込み、ぶるつと身震いする。外はとても寒かったのだと思い出した。

「早く行ってあげなさい。かなり取り乱してたわよ」

ジヨデイ先生は上着を脱ぎ、私の肩にかけてくれる。

「まって。彼に会うのは私のお願いを聞いてくれた後よ」

生き残った以上、私の仕事はいくつもある。彼がここにいないのはある意味都合だ。順序は狂ってしまうが、この方が優位に立てるかもしれない。

「お願い？」

「ええ……とても重要な」

「じゃあ連絡ぐらいして……」

「ダメよ。それも含めてのお願いなの」

ジヨデイ先生は何か気づいたように目を伏せた。

「……わかったわ。ただし、あなたのお願いを叶えられるか、わからないわよ？」

「なら私はここで舌を噛むわ」

ジヨデイ先生は大きく溜め息をつくと観念したように両手をあげる。

「……それは困るわ。でも、次にいつ会えるかわからないわよ？
あなたが私達と一緒にいる以上、場合によってはワシントンまでき
てもらおう事になると思うけど」

「……構わないわ。でも」

「ええ、善処するわ。それに私もコナン君……いえ、彼にはお世話
になったしね」

いや、間違っではない。あれがあの時私にできる最良の選択だっ
たのだ。発生した問題はただひとつ。

しかし彼の頭が冷えればそこで終わりだろう。そうなればこの馬鹿
げた感情も無くなるはず。

パソコンに視線を戻し次の作業に取りかかる。

博士を信用していない訳ではない。しかしこれは数少ない私が成し
たかった事なのだ。それに……。

データを開き食い入るように画面を見ていると、階段をおりてくる
スリッパの音が聞こえてくる。

程なくドアをノックする音がした。

塞がれた唇

「よ、よお」

ドアを開いた彼女は俺の顔を見ると一瞬目を見開いたが、すぐに眉をきゅつと寄せた。

「何か用」

「あ、あのさ……これ、買ってきたんだ。一緒に食おうぜ」

俺は手に持っていた白いトレイを少し掲げて見せた。上には帰りにコンビニで買ってきたロールケーキとコーヒーを淹れたティーカップ。それぞれ二組ずつある。彼女はそれらと俺の顔を何度か見比べると、俺の目から視線を外さぬまま、何も言わず扉を大きく開けて横にどいた。

散らかっていた地下室は、リビングと同じようにキレイに整頓されていた。パソコンデスクの後ろにあるソファには、子供が持つような小さなリュックが一つ。傍らには帽子とサングラスが置いてある。俺はパソコンデスクの前まで歩み寄ると、トレイを持ったまま画面を覗き込んだ。

「なんだこれ？」

俺には理解できそうにない数式やアルファベットが羅列されている。

「博士が作った解毒剤のデータよ」

返事があったことに少しホッとする。

彼女は俺の横までくると、ディスプレイが設置してある下のラックにキーボードを押し込む。俺は空いたスペースにトレイを置くと、作業機の椅子を引っ張ってきて彼女の横に並んで座り、ちらりと彼女を盗み見た。

朝と同じ刺々しい空気を醸し出しているものの、少しだけそれが和らいでいるように思えた。赤みがかった茶髪がかかる横顔は朝よりも血色がよく、微かにシャンプーの香りが鼻腔をくすぐる。白衣の下には太腿の中間ぐらゐまである長い丈のベージュの厚いニットを着ていて、黒い細めのパンツがすらりと伸びる脚を包んでいる。やけに腰がくびれて見えるのは服装のデザインのせいなのか、彼女の体型なのか。

そのまま視線を上げていくと仏頂面の彼女と目が合い、しまった、と思ったがもう遅かった。

「……………ジロジロ見ないでくれる」

胸の前で腕組みをして俺を見ている彼女の目は、太陽さえも凍りつかせるのではないかと思うほど冷ややかだった。

「い、いや……………。あー、そうだ。こ、これ、安いけど、うまいらしいぜ。朝、テレビでやってた」

しどろもどろになりながらロールケーキとコーヒーを差し出す。彼女はおそらくわざと大きく溜め息を吐いてから口を開いた。

「身体の調子はどう？」

「え？ あ、ああ、大丈夫だ」

「そっ」

彼女は力を抜いたように肩を落とし、少し俯いて小さく息をついた。心配してくれていたのだろうか。

「それで、何の用？」

「あ、ああ。その……なんていうか……」

俺は一旦言葉を切って彼女の顔を横目で見る。

「……朝は、わるかった。怒鳴ったりして……」

彼女が何も話さないのにはまだ納得できないが、八つ当たりのようになっってしまったことは謝っておきたかった。

八つ当たり？ なんの？

「別に気にしてないわ」

彼女は特別表情を変えることもなく言うと、目の前の物に視線を送る。

「これはそのお詫びかしら？」

「いや、そういうわけじゃ……なくもないけど……。えっと……」

もちろんその意味もあったし、無性に甘い物が食いたかったというものもある。単に彼女に会うきっかけがほしかっただけなのかもしれない。でももつと大きな理由は。

「つまり……その……おまえ、弁当作ってくれたら？ そのお礼……」

…っというか」

少し緊張しつつ、彼女の顔を窺いながら言ってみた。すると露骨に顔をしかめられる。

「別に、ただの気まぐれよ。今までろくなもの食べてなかったんでしょ？ 朝の様子じゃ食欲はあるようだったし、一応ちゃんとしたものを食べたほうがいいと思ったのよ。」

それに、またあなたに倒れられると面倒なもの。昨日はたまたま私が……私達がいたから助かったけど、もし人通りの少ない所だったら死んでいたかもしれないわよ。」

まあ、その様子じゃ必要なかったみたいだけどね」

いつもより饒舌な彼女を、黙ってじっと見つめてみる。

「な、なによ」

「別に」

彼女はぷいと顔を背けてしまった。その珍しい態度に驚きつつも、これ以上は機嫌を損ねそうなのでやめにしておく。それに今はその反応が見れただけで満足だった。

「あんがとな。それから、朝飯も」

朝はあんな事になってしまったので、ちゃんと礼を言っていなかった。

「……今までだって食事を用意してあげたことあるじゃない……。別に改まってお礼を言われることもないと思うけど？」

「まあ……そうなんだけどさ」

確かにそうだけど。でも……。

「……冷めちまうぞ」

俺はコーヒーを一口飲んだ。熱い塊のようなものが身体の中心を通り、胸の辺りで飛散する。

この苦味も、この香りも。コーヒーなんて毎日飲んでいたはずなのに、ちゃんと味わったのは久しぶりのような気がする。

「それにしても、少し早くない」

「ん？ 何が？」

彼女は腕組みをしたままパソコンのモニターに視線をやっている。

「帰ってくるの。まだ授業中じゃないの」

この言葉にも何か意味があるのだろうか。しかし、だからといって結果が変わるわけではない。はぐらかしたところでいつかはわかることだ。

「まあ、なんだ……。授業を受ける必要がなくなった、てとこかな」

彼女は俺の言葉の意味をすぐに理解したのか、そう、とだけ呟くとティーカップに手を伸ばした。どこか優雅に見えるその動きは至極自然なものだったが、その細い眉がびくりと動いたのを俺は見逃さなかった。見逃せなかった。

「灰原、おまえが気にすることじゃねーよ」

彼女の肩に手を置いて顔を覗き込み、俺は笑顔を作ってみせた。

「気にする？ 私が？ 何を？」

息が詰まったように胸が苦しくなり、朝と同じ衝動に駆られる。

こいつは、どうして……

「そうか？ なら、いいんだけどさ」

抱きよせたくなる衝動をなんとか抑え込み、彼女の肩から手を離す。こいつが気にしていないと言っのならば、俺はそれを受け止めるだけだ。

「でもそうだとすると、中途半端な時間に帰ってきたわね」

沈黙を嫌がるように彼女はすぐに口を開いた。

俺も気持ちを切りかえる。今は確かめなければならないことがあるのだ。

「ああ。ホントは昼飯食ったらすぐに帰ってくるつもりだったんだけど、これ買いにいったし……。それから、ちょっとこの辺ぶらついてみた」

彼女はスプーンを手にとり、ロールケーキを小さく掬って口に運ぶ。彼女は何も言わなかった。

「何で俺がそんなことしたか聞かねーってことは、おまえは知ってんだよな？ 俺の周りをうるついでる連中が誰なのか」

「やっぱり気づいてたわよね」

探りをいれるつもりだったのに彼女はあっさりと認めてしまった。その表情に動揺はみられない。俺がそれに気づくのも予測済みというわけか。

「情けねーけど、気づいたのはおまえが戻ってきてからだけどな…」

今朝家をでてから感じていた妙な気配。そして思い返せば夜中だというのに家の周りを徘徊していた人影を何度か見た。それは俺がコナンの姿だった時からだ。それが俺をつけていた奴と同じ人間ならば、あのときからすでに事態は動いていたことになる。

「安心して。あなたに危害が及ぶことはないから」

「だろうな。殺気や敵意みたいなもんは感じなかったし」

「あなたがいつか言ってた、探偵の勘、てやつかしら？」

「そんなとこだ」

「便利なものね」

「おまえだつて似たようなもんじゃねーか」

「あなたと一緒にしないでほしいわ」

「どういう意味だよ」

「ひとの粗探しをしていて身についたものじゃないもの」

「粗探しって……おまえな」

相変わらずの憎まれ口に苦笑する。だがこうしてジャブのような応酬をしていると、なぜだか心が落ち着いてくる。やっと彼女に会えたような、そんな気がした。

「一応聞いとくけど、奴らじゃねーんだよね？」

「さあね」

彼女は香りを楽しむように顔の前でティーカップをくると回している。

「それ以上は言えねーってことか……？」

「……さあね」

彼女はソーサーにティーカップを戻し、その縁を指でなぞる。

視線はその中を揺らぐコーヒーに落ちていて、ぎゅっと引き締められている唇からは言葉が続く気配はなかった。

狭い地下室にコーヒーの香りが漂う。パソコンの唸るような低い起動音が室内に響き、居心地の悪い沈黙を増長させる。

彼女は腕組みをして目をつぶり、固まったように微動だにしない。石像のように姿勢を保つその姿は、ちゃんと呼吸をしているのだろうかと疑う程だ。

視界にあった光が急に暗くなる。パソコンのモニターはスクリーンセーバーが起動し、メーカーのロゴが黒い画面の隅に表示されている。

真っ黒の中に浮かぶそれは、やけに光を放っているように見えた。

「……………わかったよ。じゃあ俺の話聞いてくれ」

俺は身体ごと椅子を回して、正面に彼女を捉えた。

「まず俺の周りをうろついている連中のことだけど、組織の人間じゃないのは確かなんだろ？」

俺が元の身体に戻ってから二週間以上。外を出歩くようになって一週間ぐらい経過してる。俺がコナンの時から見張られてるってこと

は、俺と江戸川コナンが同一人物だってバレてることになるな。もし俺をつけてる……いや、俺とおまえの周りにいる連中が奴らだとしたら、かなりやべー状況ってことになる。

だけど俺はなんの支障もなく普通に生活できていた。まあAPT X 4869の副作用の症例として泳がせてるって線もなくはないが、奴らがそんなまどろっこしい真似するとは思えないし？ それにおまえは危害はないって言ったな。俺も実際そう感じた。第一に俺はあのときジン以外に子供の姿を見られていないはずだからな。組織の人間が江戸川コナンを見張るのはまずない。

じゃあ俺の周りをうるついでる連中は一体どこの誰なのか……。組織の情報が漏れてないこと、それとおまえが今まで姿を消していたことを合わせると、考えられるのは……っ！

俺の口はその先の言葉をだせなかった。

ふわりと空気が動いたかと思うと、彼女は身を乗りだすようにして俺の太腿の上に手を置いていて、彼女の顔が間近にある。

俺の唇は彼女の細い人差し指に塞がれていた。

「工藤君。これ以上の詮索は無用よ」

翡翠の瞳には焦りの色が見えた。

「結論だけ言ってみなさい」

顔を横にずらして彼女の指から逃れる。

「……ガード、じゃねーのか？」

彼女はゆっくりと瞬きすると、俺の唇にあてていた手をもつ片方の太腿の上にそっと下ろした。

「違うわ。ガードなんて甘いものじゃない。……監視よ」

まるで今にも口づけでもしそうな態勢なのに、俺の胸は高鳴るようなことはなかった。

仮面

黙って聞いていればペラペラと。好き放題喋ってくれる。ただでさえ気が立っていた所でこれとは。

だが困惑しているその顔を見れば、咄嗟にでた言葉も効果はあったようだ。彼から離れて椅子に座り直し、パソコンに向き直る。

「あなたがどんな推理をしようとも、それをとやかく言いつもりはないわ。だけど不用意にそれを口にすることも探ることももうやめなさい。以前のように普通に普通に生活していれば何の問題もないから」

苛立ちを抑え込むようにコーヒを口に流しこむ。味などさっぱりわからなかったが、ぬるくなった液体は熱くなりかけていた頭を少し冷やしてくれた。それでも彼の顔を直視できそうにはない。

それにしても、つい昨日まで憔悴していたくせに、やはりこのひとを相手にするのは厄介だ。朝からほんの数時間しかたっていないというのに。おかげで予定が狂ってしまった。早急に整合性をとらなければならぬ。

しかし今の彼には丁度よかったのかもしれないとも思う。

「ひとつだけ聞かせろ」

沈黙を破った彼の音声は思いのほか落ち着いていた。

「なに」

「奴らは、組織はどうなった」

「私の話聞いてなかったの？」

だがこれも予測済みだ。このひとがそう簡単に引き下がるとは、私だっと思っていない。

「おまえの言いたいことはなんとなくわかる。けどよ……」

「じゃあ聞かないで」

「……そういうわけにもいかねーだろーが」

私は平静を装いつつマウスを少し動かしてモニターに明るさを取り戻した。

「あなたのその好奇心、いつかその身を滅ぼすわ」

「……………好奇心、だと」

彼の声のトーンがひとつ下がる。低く、微かに含んだ怒気。そう。これでいい……………。

「あなただけじゃない。あなたの周りの人達にもね」

「……………けど、それは奴らがどうなったかがハッキリしないのも同じやねーのか」

「言ったでしょ？ 普通に生活していれば何の問題も……………」

「そういうことじゃねーだろ。だいたい俺は好奇心とかそんなんじや……………！」

彼は不意に言い淀んだ。

「何よ？」

しかしその続きを促しても彼は答えようとしなない。

徐々に大きく打ち始めた鼓動に気づかぬふりをして、私はようやく彼に顔を向けた。その表情はらしからぬ凝り固まったもので、ぐつと唇を噛み締めて俯いている。

「何よ、ハッキリ言えばいいでしょう？」

彼のその態度に迷いが消えたのか。それともそれが自分の本音なのかはもうわからなかった。

「この件に関わったのも、原級留置になったのも、今の状況も。最初から全部私が作った……」

「やめろ」

勢いよく顔をあげた彼は、すが縋るような目で訴えた。

「俺は……そんなことが言っていてーんじゃねーんだよっ……！」

私は彼の視線から逃れるように顔を逸らした。
何を。このひと何をそんなに。

「……どうするんだよ」

「……何の話」

「おまえ……これからどうするんだよ」

「……私がこれからどうしようと、あなたには関係な……」
「灰原っ！」

強い力で肩を掴まれ、無理矢理身体を正面に向けさせられる。間近で睨み合う態勢になり、半ば意地のような気持ちで負けじと彼の瞳を覗き込んだ。

そして……。

やっぱり、見なければよかったと思った。

「……………どうして何も言ってくれねーんだよ」

彼は怒ってなどいなかった。

「……………何で教えてくれねーんだよ」

朝だって、彼は怒っているわけではなかった。揺れる瞳が宿しているものは、たったひとつだけだった。

何を。何を今更。

どうして、そんな眼をする。

今まで、気にもしなかつたくせに……………。

「そんなの、お互い様でしょう？」

「え……………？」

もう、うんざりだ。

「私達の間隠し事なんて、そんなの今更じゃない」

そんな眼を向けられるのも。

これ以上彼に翻弄されるのも。

ウソを重ねていくことも。

こんな茶番を続けるのも。

もううんざりだ。

それが余りにも自分勝手な怒りだとわかっていても、それを封じ込めることはできなかった。

「ずっと不思議だったのよ。あなたが何故あのとき戻ってきたのが」

私は彼の手を振り払って立ち上がり、ソファの前まで歩み寄った。そこに置いてある場違いなリュックから、あの男に手渡されたものを取り出して彼に向かって放り投げる。

「……………なんだよ、これ」

「でもわかったわ。あなたのさっきの話で」

戸惑った顔でそれをキャッチした彼を無視して私は続けた。

「あなた、さっき言ったわよね。ジン以外に子供の姿を見られていないはずだって」

「は？ おまえ、何を……………？」

突然話が飛んだからか、彼は啞然としている。

「言ったわよね」

「……………ああ、それが何だよ」

「どうして知ってるの」

「え？」

「あなたはあのときジンと接触していないはずよね。なのにどうしてジンが江戸川君を目撃したのをあなたが知ってるのよ？」

「だって、それはジンがおまえ……………に！」

彼はハツとした顔で手に持っている眼鏡ケースに視線を落とした。推理に夢中になって自分の失言に気づかなかつたらしい。

私はソファに腰かけると、肘掛けに頬杖をついて彼を見た。

「スーパーマンにしては少し迂闊だったわね」
「あ、いや……俺は……」

珍しく反省でもしているのか、言葉に詰まり、目を泳がせている。自然と眉間に力が入ってくる。なんとも腹立たしいことに本当に盗聴まがいのことをされていたらしい。そしてわかったことがもうひとつあった。

『……俺ひとりでは、どうにもならなかったさ』

どこに忍ばせておいたかは知らないが、発信機もつけていたというわけか。

「……おまえ、持っていてたのか？」

彼は私の顔色を窺うようにたどたどしく尋ねてきた。

ああ、これだ。

この以前とは違う彼の態度も。
向けられたことのなかった眼差しも。
彼の言動全てが妙に私の中の何かに触れる。
そして、それは何故か。とても……。

イライラする……！

「いいえ、あるひとから預かったの。あなたに返しておいてくれっ

「てね」

「ある、ひと？」

彼が私に説明しなかった意味はなんとなくわかる。そのことについて彼を責めようなんて微塵も思っていなかった。

「あなたは知ってたのよね」

だが突き上げるように沸いた得体のしれない苛立ちは、簡単に止めることはできなかった。

「知ってたんでしょ……赤井秀一」

大きく目を見開き、凍りついたその顔を見れば、わざわざ彼の口から答えを聞くまでもなかった。

高い天井

彼女の口から零れた人物の名は俺の記憶の中にある、たぶん、一生忘れることのない苦い事件のことを呼び覚ました。

粘稠度ねんちゆうどのある液体は一瞬で俺の手を真っ赤に染めて。

俺の手首を掴む震える手は氷のように冷たくて。俺にできることは託された真実だけだった。

こちらを見る凍てつく瞳は俺を捉えているのか。それとも別のものなのか。ただ、彼女の態度から全てを知ってしまったのだということは、数瞬停止していた脳でも理解することはできた。

「灰原、おまえ……会った、のか」

「質問してるのは私よ。まあ、答えはもうでたみたいだけど」

彼女は立ち上がってデスクの前まで来ると、ティーカップを手に持って俺を見下ろした。

「それ、食べてたら帰ってね」

いつも以上に抑揚のなくなった声で言うと、彼女はくるりと身をひるがえす。

「ちょ、ちょっと待てよ」

しかし彼女はそのままドアに向かう。俺は慌てて立ち上がり彼女の肩を掴んだ。

「灰原。その……黙ってたことは悪かった。俺は……」
「もういいから帰って」

前を向いたまま答える彼女からは、今までにない強い拒絶を感じ取れた。

「それに、あなたには会ってあげなくちゃならないひとがいるでしょっ？」

今は一番聞きたくない言葉だった。最悪のタイミング。だが、しかし……。

「おまえ、まだそんなこと言ってるのか……」

「何を血迷っているのか知らないけど、あなたは今の状況を勘違いしてるだけよ」

俺は彼女の前に回り込み、両肩に手を置いて、視線を合わせるように少し腰を折る。

「俺、もしかして、遠まわしにフラれてる？」

「な、何をっ……!!」

彼女は心底驚いた様子でびくりと肩を跳ね上げた。

桜色の唇は何かを言いかけて開いたが、それは言葉にはならず小さく開閉を繰り返す。そして下唇を噛むと苦々しげな顔で俺を睨みつけた。

怯みそうになる気持ちを心の外へ追いやり、真っ直ぐに彼女の瞳と対峙する。

ここで退いてしまうと、また彼女がどこかへ行ってしまうような、

もう後戻りできなくなるような、そんな予感がした。

いつまでも続くと思っていた睨み合いは、意外にも早く決着がついた。

「とにかく、今日は帰りなさい……」

先に目を逸らしたのは彼女だった。

「私にはよくわからないけど……ちゃんと話がしたいって思ってるはずよ……。あなた、学校から直接こっちに来たんじゃ？ まともにも顔を合わせてないんだから、さっさと帰りなさい」
「……え？」

なんとなく話がズレた気がする。そのズレがなんなのかと模索する間に、彼女はまるで俺の心を読んだかのように言った。

「そうよね。あなたにはわからないわよね」

「おまえ、何を……」

彼女は俺の手をやりわりとどけると、俺の横をすり抜けてドアを開く。リビングへと続く階段から冷たい空気が部屋の中に流れ込んできた。

「体調に異変を感じたら、すぐに連絡してきなさい」

階段をあがっていくスリッパの音がやけに不快なものに聞こえ、それは彼女の怒りを顕しているかのようだった。

制服から着替えるのも面倒くさく、灯りをつけぬままりビングのソファに寝転がった。片手を枕にしてネクタイを緩める。

高い天井だ。

うちの天井はこんなに高かったのかと唐突に思う。木目調の壁と同じ色で統一されているが、長年の日焼けにより色褪せてしまっている部分の境目はくっきりと別れている。

手を天井に向けて伸ばしてみた。しかし当然届くはずもない。元の身体に戻っても、立ち上がってみても、いくら背伸びしても届くはずないのだ。

生まれてからずっとこの家で過ごしてきたのに、ちゃんと天井を眺めるのは初めてな気がする。別に天井なんてわざわざ見る必要もないので当たり前のことなのだが。

伸ばしていた手から力を抜くと、ぼてりと腹の上に落ちた。

近づけたと思ってもまた遠くなる。

彼女と会った瞬間のどこか浮かれていた気分は吹き飛んでしまった。最後は半ばヤケになってあんなことを言ってしまったが、実際のところ彼女との距離は開いてしまったように思える。最初に出会った頃のように。彼女自身すらも。

隠し事なんて今更、か……。

ああ。言われてみればその通りだ。

俺達はお互いのことを深く話し合うような生ぬるい関係ではなかったし、聞くことも聞かれることもなかった。まず知る必要がない。

そもそもあいつの名前すら本人から直接聞いたわけではなかったのだから。

なのに。なのになんで……。

関係ない、と。そう言われるたびに心が掻き乱され、自分が見えなくなる。今までそれが当然だったというのに。こんなの初めてだ。

それに、あいつがあんなことを口にしたのも……。今まで、ずっと気にしていたのだろうか？

誘いにあえて乗ったつもりが、まんまとしてやられてしまったわけだ。そしてそれを口火に彼女の態度が一変したように思える。

確かに結果的には盗聴みたいになってしまったが、無論盗み聞きをしようなんてつもりではなかった。博士だって俺が頼んだときは決していい顔はしなかったのだから。だが彼女の性格やこれまでの行動を踏まえると、単独で動く可能性をどうしても否定できなかったのだ。

もしそうなったときの為。

そして彼女の身に危険が迫ったとき、すぐに察知できるように。

いや、独断専行したのは、俺、か……。

「……………」

突如として俺を引き止めようとする小さな手の感触が蘇り、今日は見なかった夢がフラッシュバックした。

身体を横に向けて頭をソファの背もたれに押し付ける。じとりとした嫌な汗が全身からどっと吹き出た。吐き気がする気持ち悪い感覚

が胸に広がる。

落ち着け。

あいつは生きてる。さっきまで一緒に喋っていたじゃないか。触れることもできた。確かにこの腕に抱いた。

あいつの感触も声も温もりも匂いも鼓動も全部……！

「帰ってきてるなら、ただいまぐらい言いなさいよ」

頭上から降ってきた声に驚いて身体を震わせる。声の主はソファの背もたれからひよこりと顔をだした。

「久しぶりね、新ちゃん」

喉の奥がひくついてうまく言葉がでてこない。

「……顔色悪いわよ？」

俺の様子に気づいてか、母さんは俺の額の汗を手でぬぐった。咄嗟に振り払う。

「どうして今まで連絡してこなかった」

呼吸を整えながら身体を起こし、力任せに上着の袖で汗をぬぐう。苛立つ口調をなんとか抑えつつ、振り向いて母さんの顔を見た。

「今まで灰原と一緒にいたんだろ？ どうして連絡してこなかったんだよ」

久方ぶりにまともに顔を合わせたわけだが、口をついてでたのはそ

れだった。

「……ホント、新ちゃんったら哀ちゃんのことばかりよねー」
「はあ？」

しかしさっきまでの表情はどこへやら。むっと拗ねた顔で唇を尖らせている。

「だってそうじゃない。久しぶりに会ったっていうのに」
「……あのなー」

呆れて言葉が続かなかった。呑気な調子のこの母親は、今起きている事態を理解しているのだろうか。
不思議と速い鼓動は正常に戻っている。

「ハッ……今まで自分の子供をほっぽってたくせに、よく言っぜ」
軽く毒づいて俺は両手を頭の後ろで組みソファにもたれた。
そうだ。急に帰ってきたかと思えばあいつと一緒に。それに哀ちゃんてなんだよ、馴れ馴れしい。

「哀ちゃんとケンカでもした？」
「……」
「あら、凶星？」

なんなんだこのオバサンは……。いつ会っても変わらない陽気なところは相変わらず。何が嬉しいのかは知らないが、にんまりと俺の顔を覗き込んできている。

「……そんなことより、灰原とはいつから一緒にいたんだよ？」

「哀ちゃんから聞いてないの？」

「……………あなたには関係ない、だよ」

「ふーん。それはご愁傷様」

のらりくらりと話をかわされているようでイライラする。

「おい、何か他にも知ってたんだろ。あいつが……………」

しかしその続きは母さんの顔を見ると言葉にはならなかった。

「それを知ってどうしたいの」

母さんは珍しく真剣な顔で、静かな口調だった。

「新ちゃんはそれを知って、一体どうしたいの」

急に变化した表情に戸惑いつつ、つられるように俺も真面目に考える。

「どうしたい、って……………」

俺は、どうしたいのだろう……………？

彼女が今までどこで何をしてきたか、それを知って、俺は何をしたいのだろうか。今まで彼女の行動をこんなに気にしたことはなかったのに。

「それを知っても知らなくても、新ちゃんが哀ちゃんを好きなことに変わりはないでしょ？」

「それは……………そうだけど」

そうか……。

俺は悔しかったのだ……。あいつが何も話さないことではなく、俺に話してくれないことが悔しくてたまらなくて、ムカついて。

ああ、わかっている。何か理由があることぐらい。

でも、だからこそ話してほしかった。彼女にとって俺はそんな存在ではなかったと言われているようで。そんな独りよがりな気持ちで俺は彼女にあんな言葉を浴びせたのか……。

それはまるで駄々をこねる子供のような言い分。ただ拗ねているだけだ。好きな女が何も話してくれないからって一人で空回りし……
つて！

「な、何言ってるんだよ！」

当然のことのように言っていたので思わず肯定してしまっただが、今何かとんでもないことを言わなかったか。

母さんはニヤニヤしながら顔を少し近づけた。

「だって、朝からあんな衝撃的なシーンを見せられたら……」

「う、うっせーよ！」

瞬時に朝の事を思い出し、頬が焼けるように熱くなる。先ほどとは違う種類の速い鼓動が打ち始めた。顔を見られたくなくて前を向く。

「まあ、直接会うまで確信はもてなかったけどねー」

直接会うまで……。

「……なあ、父さんは帰ってきてるのか？」

「うっん、向こうにいるわよ」

「……そっか」

溢れすぎて手をつけていなかった情報が断片的に結びついていく。
何が本当で、何が嘘なのか……。

「……それで？ 何も喋るつもりはないってか？」

「あら、もうとっくにわかってるんじゃないの？」

いつの間にか随分日は落ち、灯りをつけていない部屋の中は薄暗い。
路地の街灯の光が僅かに窓から漏れている。学生達がすでに帰路に
ついている時間だ。

「なあ」

「なに？」

「学校、留年しちまった」

「そう」

担任の教師もかなり粘ってくれたらしいが、やはり特別扱いは許さ
れないとのことだった。俺の名前が知れているからこそ、それが外
部に漏れたときに学校側にも俺にとっても不利益になる。俺だって
そこまでして免れようなんて思わない。

それきり黙り込んだ母さんを不思議に思い、何も言わないのか、と
振り返ろうとしたとき、ソファ越しに後ろから抱きしめられた。焦
つてもがく。

「お、おい、何すんだよ……」

「そんなの……どうだっていいわよ……」

嗚咽まじりの言葉に俺は固まった。ぺたりとひつつけられた頬と頬の間をぬるい何かが流れていく。

「本当に、久しぶりね……新一……」

ぎゅつと掴まれた肩には痛みを伴ったが、痛むのはそこだけではなかった。

会ってあげなくちゃならないひと……。

後悔しないと決めた傍から、もう後悔している。もし、もしほんの少しだけ時間を戻せるのなら。そんな後悔を彼女がいなくなつてからずつとしてきたはずなのに。

母親の涙を止める術など、ガキの俺にはわからなくて。俺はどうすることもできず、もう一度天井を仰いだ。

高い。やはり高い天井だ。

元の身体に戻つても。立ち上がつても。いくら背伸びしても。掠めることすらできない。

俺にはあつて当然だった親の存在も。心配してくれる友人も。逃げる居場所も。そんな、ほんのささやかな幸せも。

姉さんを弔うことすら、彼女には許されなかった。

今まで、軽く考えていたのだろうか……。いや、そうではない。俺は知らなかったのだ。大切なひとを亡くす苦しみを。今だって本当の本当にはわからないのかもしれない。

俺にとってはあいつが……でも……。

彼女の帰ってきてほしいひとは、もう二度と戻らない。

非通知

冷蔵庫を開けて入っている食材の数を確認する。幸い今日の夕飯の分ぐらいはありそうだ。本当なら部活が休みなので、試験が始まる前に色々買い込んでおきたかったのだけど。

久しぶりに新一がクラスメート達と談笑しているのを見た。新一は珍しくお昼を持参していて、かきこむようにそれをたいらげると、早々に帰り支度を始めた。もう帰るのかと聞きにいくと、やらなければならぬことができたと言う。何かあったの、と聞こうとする間に、新一はもうコートを羽織っていた。そして、あっ、と何か思い出したように声をあげると、妙に真剣な顔で声をひそめたのだ。

「今日は寄り道しないで真っ直ぐ帰れ。それから、夜は絶対出歩くなよ」

夕飯の支度をするのにはまだ早く、でも試験に向けて勉強に取り組むことも今は集中できそうにない。私は炬燵のスイッチをいれると制服のまま冷えた足を放り込んだ。テーブルの上に顔を横にして伏せる。

不思議と昨日や朝感じた不安はなりを潜め、そのかわり漠然とした別の何かが思考の合間をかすめていく。これまでの新一の様子や朝見せた何かを警戒するような目。帰り際に言われたこと。そして、あのひとのこと。

そういえば新一から聞かされたあのひと話で引っかかった部分があ

ったのだと思い出す。

『俺が初めて会った時は灰原だったんだよ。だからつい今でもそう呼んじまう時があるんだ。ほら、灰原哀っていただろ？ あいつはその子の……従姉妹なんだよ。今はちよつと事情があつて名字が変わつちまつたんだ』

なんだろ？ なにがおかしいんだろ？

従姉妹、というよりは姉妹の間違いじゃないかと思うほど哀ちゃんにそっくりだったけど。顔だけじゃなく、声や口調、雰囲気までも哀ちゃん……？

「……………あれ？」

どうして新一は、哀ちゃんのこと知ってるんだろ？

いや、あのひとから聞いていたのだとすればおかしくはない。

……違う。そこじゃなくて。

ほら、灰原哀っていただろ？

そうだ。私は哀ちゃんのことを新一に話したことはない。なのに。なのにまるで私が哀ちゃんのことを知っていて当たり前みたいない方だった。

新一が私と哀ちゃんの繋がりを知る方法。

思い当たる人物が、一人。

耳が痛くなつてきたので顔を反対に向ける。横向きの世界はテールブルがまるで壁のように間近にそびえ立ち、その延長線上にはやは

り横向きになつた自室の扉。そしてその扉の下には朝はなかつた小綺麗な紙袋が数個置いてある。

今日私が学校に行っている間にコナン君のお母さんがお礼にきたとのことだった。挨拶にこれなかつたことを気にしていたらしく、終止頭を下げればかりだったという。

コナン君が新一に哀ちゃんのことを話していた？

「……んー」

別におかしくはないかもしれないけど、それも少し違う気がする。私は哀ちゃんとそんなに喋つたことはないし、まずコナン君がすんで哀ちゃんの話をしたこともない。だとすれば……。

冷えた身体が暖まつてきたせいか瞼が重くなつてきた。昨日の寝不足のせいもある。頭の回転が鈍くなり考えが纏まらない。無意識にその先にある何かを考えたくないだけかもしれない。

ウトウトと欲求のまま目を閉じようとしたとき、背後で電子音が鳴り響いた。鞆の中の携帯が着信している。眠りかけていた身体を起こし鞆を引き寄せて携帯をとりだす。

ディスプレイを見た瞬間眠気は一瞬で吹き飛んだ。

「非通知……」

少し前までなら誰からか想像できたかもしれない。けれど新一の携帯番号はもう知っているし、非通知でかけてくる必要もないはずだ。

ダメだ。ではダメだ。

なぜかそんな思いが私を躊躇わせる。妙な胸騒ぎがした。
これは、あのときと同じだ。あのとき、新一を見たときと。コナン
君と同じ眼をした新一を見たときと。

携帯は私が応答するのを待つようにいつまでも鳴り続けている。

私は震える指で通話ボタンを押し、ゆっくりと携帯を耳にあてた。

「……………もしもし」

「あ、もしもし……………蘭姉ちゃん？」

ああ……………。

不思議なシグナルが、私に何かを知らせ始めた。

ヤサシイウン

「コナン君？」

「久しぶり、蘭姉ちゃん」

俺は昨日彼女が座っていた椅子に背もたれを前にして跨またいだ。

「ごめん、なかなか連絡できなくて」

我ながらあざとい真似をしているとは思ったが、コナンが親元に帰ってから一度も連絡がないのは不自然だとも思った。それに母さんが探偵事務所に行ってくれたこのタイミングを逃すと、蘭にコナンとして話すことは俺にできそうにない。

「良かった。ずっと連絡なかったから、何かあったのかなって思ってたの」

「うん、ごめん」

予想通り、海外の暮らしはどうか。学校には慣れたか。友達はできたか。元気になっているか。やはりコナンのことは気になっていたらしく、次々に質問をあげてくる。それは責め立てるようではなく、ちゃんと俺の喋るスピードに合わせてくれる（俺にとっては作り話を考える時間だが）。

ひとしきり近況報告をし終えた頃、蘭は突然切り出してきた。

「ねえ、コナン君？」

「なに？」

「新一が、帰ってきたんだ」

「そ、そうなんだ……」

良かったね、蘭姉ちゃん！

もうそんなこと言えるはずなかった。

俺が次の言葉を探している間に、蘭は一瞬空いた間を気にすることなく続ける。

「コナン君、そういえば哀ちゃんも一緒なんだよね？ 哀ちゃんは元気？」

「え？ あー、うん。灰原も元気だよ。今は、いないけど……」

急に飛び出た彼女の名に焦りつつなんとか答える。しかし蘭は何かを感じとったらしい。

「なんか元気ないね。哀ちゃんとケンカでもしたの？」

「い、いや……その……」

妙に言葉に詰まってしまった。

「あ、やっぱりケンカしたんだ」

「ちょ、ちよっと、ね……」

「どうしてそんなことになっちゃったの？」

蘭の声はどこか楽しげで、でも相談にのろうとする柔らかさがあった。その懐かしいコナンと蘭姉ちゃんのやりとりに流されそうになる自分をくい止める。蘭は知らないとはいえ、実質俺と彼女のことを蘭に話すなど俺には耐えられない。

「大丈夫だよ、たいしたことじゃないから。それより蘭姉ちゃん、ちよっと聞きたいことがあるんだけど」

このままではいつ自分がボロをだすかもわからない。今は一刻も早く電話を切りたくもあった。そろそろ本題に移すことにする。

「うん、なに？」

「蘭姉ちゃんさ、ジヨデイ先生の携帯の電話番号知ってる？」

「え？ ジヨデイ先生の携帯？」

コナンの携帯はやはりあのとき壊れてしまったらしく使いものにならない。よく考えればこちらからジヨデイ先生に連絡をとる手段は断たれてしまっているのだ。

「知らないけど……どうして？」

「ちよつとジヨデイ先生に聞きたいことがあって……でも知らないならいいや。あ！ そろそろ電話切らなくちゃ」

「あ、うん、わかった」

「じゃあ、バイバイ、蘭姉ちゃん」

「うん……またね」

通話を終わると知らず知らずのうちに詰めていた息が深く吐きでた。通話時間と料金が表示されている画面を消し、子機と変声機をベツドに放り投げる。俺は背もたれに両腕を重ねて置いてその上に顎を乗せた。

予想はしていたがジヨデイ先生の携帯番号はわからない。まあ蘭が知っていたとしてもその番号に繋がるかどうかは疑問ではあるが他に連絡をとる手段がないわけではない……けれど。あまり好ましいややかたではない。

ひとまず俺と彼女以外に影響はないように思える。学校にいる時

点では見当がつかなかったもので、蘭やおっちゃんにまで手が回っているかもしれないと思い、蘭には用心するように言ったのだが。現時点ではまだ判断しかねるが、彼女の口振りからすると問題ないはずだ。

しかし蘭のことでは重要なことが残っている。

思いのほか蘭の声は明るかったが、それはコナンと話したからなのか、そう振る舞っているのか。

本当は俺だって戸惑っている。そんなに時間もたたずに膨らんでいく彼女への気持ちに。

彼女の言うように勘違いだと、俺だってそう思った。そんなこと言われなくたって何度も考えたことだ。しかしそうやって自分の気持ちを否定すればするほど、心の中から彼女追い出そうとすればするほど苦しくなる。

あの夜、彼女の決然とした態度を目の当たりにしたとき、俺はあいつを失いたくないと思った。その理由があのとときの俺にはわからなくて。そして本当に彼女を失ったとき、今までずっと蘭が居続けた場所に……いや、俺の中のもっと別の部分に彼女は到達した。

もちろん今まで蘭が好きだった気持ちに偽りはない。今だってそうだ。だがそれはもう以前と意味合いが違っている。

今まで散々思わせぶりなことを言っておいて、あれはそういう意味ではなかったとでも言うのか……。

いくら考えたところで答えは見つからない。俺は立ち上がって窓の横の壁に寄りかかった。空のずっと向こうはまだほんの少し明るい光、どこの家も灯りがついていて。隣の家もカーテンが閉められ

てはいるが同様だ。

今まで蘭と話していたというのに、また彼女のことを考えている。珍しく素直な反応だったと思う。それはやはりあいつも俺と同じ気持ちだと考えていいのだろうか。いつだったか母さんにそのようなことを言われた記憶があるが、そのときはそんなこと思いもしなかったのに。

ふと視線をずらすと街灯に照らされた家の前の路地を恰幅のいい男が通り過ぎていく。帽子をかぶり距離があるので顔は確認できないが、そのガタイのいいシルエットは見覚えがあった。男は不意に立ち止まり、ちらりとこちらに振り返った。その瞬間窓を開けて思い切り手を振ってやる。すると男はギョツとしたように一歩後ずさった。男はキョロキョロと周りを見回したあと、胸元で小さく手を振り返し、そそくさと路地の角を曲がっていった。

監視、ねえ……。

まるつきりウソってわけでもないとは思うが。

今のところ俺の予想通り、でいいのか。何より彼女があひと会ったのであればまず間違いないことなのだが……。

開けた窓からひんやりとした風が顔に吹きつける。

「……赤井、秀一」

やるせない思いが押し寄せ、荒っばく窓の棧に両手をついた。

俺には、できなかった。

それを彼女に伝えるなんて、俺にはできなかった。それを彼女に明かすということは、その裏に隠された悲痛な事実をも突きつけなければならなくて。本当に辛いのはあいつのはずなのに、俺も、あの

ひとも。そうやって先延ばしにして、結局あいつを……。

突然、奇妙な感覚に捕らわれた。

これは、誰のことだ……？

誰の、誰に対することなんだ？

どこからともなくみしりと音が鳴る。冬の乾いた空気は纏わりつくような湿り気を含んだものになっていった。湿度の変化を感じとった古い木造建築は、もう一度その大きな体軀を鳴らす。

色濃くでた白い吐息は、温度の違いを示していた。

強がり

ふわふわと身体が浮いている感覚がまだおさまらない。集中力など今の私には皆無だ。どれだけ目の前の情報を注視しようとしても、彼の言葉が頭の中で何度も何度も反響して邪魔をする。

本当に私はバカだ。

彼の問いに答えていればそこで終わっていたというのに。あれでは違うと言っているようなものだ。

ズルいひとだ。

わかってるくせに……。

言った直後の不安そうな顔も。頼りなさげな瞳も。帰り際の後ろ姿が寂しげだったのも。もう全部イライラする。だいたいあの言いぐさはなんなのだ。肝心な部分をすっ飛ばしている。

そもそも私達は……友人ですら、なかつたはずだ……。

いつだってそうだ。

どれだけ壁を置いたところで、彼はやすやすと飛び越えてきてしまう。しかもそれが無自覚なものだから一層たちが悪い。そしてそのたびに私を狂わせていたことを、あのひとは少しもわかっていないのだ。

苛立ちのままに髪をかきあげてパソコンをシャットダウンする。

今日はいくら作業を続けてもはかどりそうにない。

デスクの隅には口をつけていない彼の分のロールケーキ。彼が座っていた椅子にはキレイにたたまれた白いマフラーが置いてあり、その上には眼鏡ケースがちょこりと乗っている。

『クラーク・ケントもびっくりの優れ物なんだぜ?』

思わず頭にきて皮肉ったのだが、おそらくそれがあつたから私は今ここにいることができるのだろう。認めたくはないが、知らないうちに私は彼に守られていたということか。そして勢いのままに赤井秀一の名前を口にしてしまったことも悔やまれる。余計な情報を与えてしまった。

私は大きく息を吐き出すと、トレイに皿とカップをのせた。

扉を開けると、博士は待っていたかのようにソファから立ち上がる。

「哀君。どうかね、君らの身体の調子は?」

「今のところ異常はないわ」

博士と目を合わせられなかった。自分は普通に答えることができているだろうか。

「哀君、少しいいかね」

博士の声を背中で受けながらキッチンに入る。カップをシンクに置いて水を張り、彼が残したケーキはラップをかけて冷蔵庫に入れた。カウンターの向こうで立ち尽くしている博士は、いつになく真剣な面もちで私を見ている。

逃げることはできそうにない。

私はゆっくりとキッチンをでると、博士の対面のソファに腰をおろした。相変わらず博士の顔は直視できない。

「本当に身体のほうは何ともないんじゃない?」

「問題ないって言ってるでしょう」

彼には多少免疫力の低下はみられた。しかしそれは不摂生がもたらしたもので、解毒剤が悪い方向に働いたわけではない。それは今日の彼の顔色や私の身体の調子からすると明らかだ。

解毒剤は完璧だったのだ……。

「一応それなりの設備のあるところで診てもらおう予定だけどね」

「ふむ……そうか」

「博士が今まで工藤君の面倒みてきたんでしょ？ わざわざ私に聞かなくてもわかると思っけど」

この話を避けようとしているのかもしれない。少し邪険になってしまった。

「……やはり、気にしておるのかね」

博士は、私の心を見抜いていた。

「……何のこと」

「わしはこれでも発明家じゃからな。少しは君の気持ちはわかるつもりじゃ」

そこに、いつもこどもたちにみせる自慢気な様子は、少しもなかった。自然と拳に力が入る。

「……自分の手で解毒剤を完成させたかったんじゃろう？」

私は堅く目を閉じて俯いた。完成した解毒剤のデータをみたときの悔しさが蘇る。

「どうして？ 完成したんならそれでいいじゃない。別に私が絶対に作らなきゃならない理由があるわけでもないし」

「……………」

自分でも往生際が悪いと思った。だけど、苦し紛れでもそう言わなければ、私はきつと。わかっているけれど。博士が悪いわけじゃないけれど。

私にできるのはただ口をつぐむだけ。いましがた失敗したことを繰り返すわけにはいかない。

「まあ、なんじゃ……………これでわかったこともあるじゃろ？」

「……………何が」

博士は一呼吸おいてから、柔らかな声で語りかけてきた。

「君は、解毒剤を作るだけの存在ではなかったということじゃよ」

ぎくりとして顔をあげると、ぎこちなく微笑む博士の顔があった。

「……………なによ、それ」

でも、それ以上何も言い返すことができなくて。後悔が胸を締めつける。

いっしょだ。これでは工藤有希子のときといっしょではないか。何も学んでいない。自分の幼さにうんざりする。必死に平静を取り繕おうとしていた自分が、ひどく滑稽だった。

カウンターに置いてある電話が鳴りだした。電話に向かう博士を目で追いながらほっと息をつく。いたたまれない状況が変わったこ

とに安堵しながらも、同時に罪悪感が大きくなる。博士には迷惑をかけてばかりだ。……いや、自分は甘えているのかもしれない。

博士は電話を切ると、白衣を脱いでジャケットを羽織った。

「どこか行くの？」

「ああ、少し出てくるよ」

慌ただしく携帯や財布、車のキーを手にとってこちらにやってきた。

「遅くなるかもしれんから夕飯はすましておいてくれ」

「遅くなるって……なにかあったの？」

「うむ、ちとな」

博士は曖昧に返事をする足早に玄関に向かう。私も立ち上がって博士を追った。その様子から急ぎの用らしい。

「ひとりじゃからといって、食事を抜いたりしてはいかんぞ」

「わかってるわよ」

博士を見送ると施錠ができているかを確認してからリビングに引き返す。

博士にはああ言ったものの、例のごとく食欲はわいてこない。彼の食事も母親がいるので心配する必要もないだろう。

彼は私の言ったことの意味が理解できなかつたらしい。当然だ。彼にはそれが普通だったのだから。余計なことを言ってしまったのかもしれない。けれども、私の前でこそそんな素振り微塵もみせなかつたが、心配していたに決まっているのだ。

私はもう一度キッチンに入り、冷蔵庫からミネラルウォーターをだしてグラスに注いだ。一気に飲みほす。ひたひたと食道を流れる冷たい感触が胃の腑に落ち着く。しかし、そんなものでは尖った神

経と身体の奥に籠もった熱を鎮めることはできなかった。

私はリビングにあるパソコンを起動させた。今すぐ取り組まなければならぬ問題ではないが、いつまでも頭の中を彼に支配されたくない。

調べてみると、記されている条件は職種を問わず一通り満たしていた。しかしどれもこれも自分とは畑違いのものばかり。この時代に職を選んでなどいられないと思うが、先のことを考えるならある程度とっかかりがほしい。無論こんな方法ではなく自分の足で動いてから検討しなければならぬ。

次は不動産のサイトにアクセスする。簡単に条件を絞ってみると比較的賃料の安い物件もそれなりにヒットしたが、これこそ今調べたところで解決しない。かかる費用はそれだけではないし、それ以前に自分には自由に使える金銭などないのだから。

やはり一刻も早く職にありつきたい。

何をするにしてもまとまった資金が必要だ。ここを出るにしても、博士に恩返しするにしても。しかし現実には自由に動き出せるのがいつになるかわからず、ほとぼりが冷めるのを待ってからだ。博士は気にしなくていいと言ってくれたが、これ以上負担をかけたくない。それに、なにより……。

むかえに行くことすら、できない……。

インターホンが鳴ってはっと我にかえる。

知らぬうちにかなり耽^{ふけ}っていたらしく、随分時間がたっていた。
こんな時間に来訪者とは珍しい。また彼だろつか。自然と立ち上がっていたが、自分が応対していいものか少し迷う。私はすでに灰原哀ではないのだ。迷っているうちに次は扉がノックされた。私は足音を消して玄関まで行くと、以前は覗けなかったドアスコープに顔を近づけた。

「えっ……」

湾曲した小さな穴の向こうには、空の闇に溶け込みそうなほど、全身真っ黒の男がそこに立っていた。

時の流れに人は逆らえない

「うおっ！」

扉が開いた瞬間、伸びてきた腕に引つ張られた。前のめりによるけながら玄関に足を踏み入れる。

「何の用」

しかしその腕の主は予想していた人物と大きくかけ離れていた。寂しい頭頂部を囲む白髪にひとの良さそうな顔の肥満気味の老人……いや、中年。自分を出迎えてくれる人間はこんな外見をしていたはず。共通していることは白衣を着ていることぐらい。

「何の用って聞いているの」

この家の主とは似ても似つかない茶髪の美しい女性は、乱暴にドアをロックすると語気を強めた。

目の前にいる女性は俺の記憶の中には存在しない。でも、どこか見覚えのあるその顔は。この家にいた、あの少女と酷似して……。

「あ、あんた……灰原のねーちゃんか？」

「……他に誰がいるのよ」

彼女は呆れた顔で額に手をあて、疲れたようにドアにもたれかかった。

混乱しかかっていた脳が落ち着きを取り戻す。そうだ。灰原哀も工藤と同じく身体が縮んでしまった存在。彼女も元の身体を取り戻

したのだ。いや、そんなことよりも……。

自然と頬が緩んでいく。俺は思わず両手でその華奢な肩を叩いた。

「ねーちゃんホンマに生きとったんやなあ！ よかったよかった！」

「……え？」

彼女はきよとんと目を丸くすると首を傾げた。

「どうしてあなたが、よかった、なの？」

「何言うとんねん、そんなん当たり前やんけ」

「はあ？」

「……ええ？」

甚だ疑問だという表情に、なにやら温度差があることに気がついた。そりゃあたいて言葉を交わしたこともなければ顔を合わせたのも片手で数えるほど。彼女がどういう人間なのかもよく知らない。工藤から聞かされていた彼女に関することも最低限の情報だけ。しかし仮にも二人の正体を知る者として、何より工藤が傍に置いたのだから信用するにはそれで充分だった。その人間が無事だったというのだ。喜んで当然だろう。

言葉にならない理由を頭の中で並べていると、彼女は肩で固まっている俺の手に視線をめぐらせた。

「あ、ああ……スマンスマン」

「工藤君なら隣にいるわ」

手を離すとさっさと奥に歩いていく。あっさりど、というよりは冷めた対応に呆気にとられる。別に涙を流しながら再会を喜ぶつもりはなかったし、するつもりもないけれど、でも、もう少しなにかあってもいいんじゃないか？

肩すかしをくらった気分ですリッパをつっかけた。

「俺は工藤やのーてねーちゃんに会いにきたんやけど」

「だからどうして」

「昨日阿笠のじーさんから電話もろてな。ねーちゃんが帰ってきたー言うて」

試験も終わりに近づき、そろそろこちらに顔をだすかと考えていたときだった。哀君が帰ってきたんじゃ、と。それがどういう意味なのかを理解するのに少々時間を要したけれど。

「んで、学校終わってからちよくでこっちにきたっちゅーわけや。

ホンマは昨日こよう思てんけど……まあ、生きとんのやったらいつでも会えるしな。試験終わったら休みやし」

「……………」

俺はヒーターの前にかがみ、しばれた両手をかざした。さすがにこの格好で遠距離はこたえる。

「ん？ どないしたん？」

振り返ると突っ立って俺を見ている。

「ホント、あなた達って」

「え？ なに？」

「……いえ、なんでもないわ」

彼女は困った顔で首を振ると、階段をあがってカーテンを端から順に閉め始めた。

ふといるはずの人間がないことに気がつき部屋の中を見回して

みる。家主の姿が見えない。そういえばいると思っていた工藤もいない。ひとりなのだろうか。

「なあ、じーさんはおらへんのか？」

俺は少し声を大きくして遠い背中に投げかけた。

「何か用があるとかで出て行ったわ」

彼女も同じように声のボリュームを上げる。

「ほんなら工藤は？」

「……隣にいるって言ったでしょ」

そうなのだ。工藤がいないことが不思議だったのだ。あの様子では彼女にべったりだと思っていたのに。それとも何か事情が……。

「……」

そういうたら、なんであいつ……。

思考の合間を縫って落ちてきた小さな異物。いや、ずっと引つかかっていたことなのかもしれない。しかしそれは彼女がいなくなったことにより疑問ですらなく、むしろ当然のこととして無意識に処理していた。

「あなた、ここに来るまでに変わったことはなかった？」

「え？」

いつの間にかカーテンは全て閉められていて、彼女はそのひとつを小さく開けて外を見ていた。

「変わったことって？」

「……なかつたら別にいいわ」

「なんやねんそれ、気になるやん」

彼女は手すりに腕をつけてこちらを見下ろした。

「あなたがこっちにきたとき、何かしらの事件に巻き込まれてたからよ」

「……イヤな言い方、せんといてくれます？」

「あら、それはごめんなさい」

「……まあそんなどうでもえーわ」

彼女の無事は確認した。もう少し接点があれば積もる話もあるのだろうが、俺達は一方的にしかお互いのことを知らない。ならば話す内容はひとつだけだ。

「聞かせてもらうで、何があつたんか」

「新ちゃん、お友達よ」

扉の向こうから気のない返事が聞こえてくる。工藤有希子は、何かあつたら呼んでちょうだいと言い残し、軽い足取りで階段を降りていった。

「工藤、俺や。はいんでー」

扉を開けると、工藤は事切れたように床に座りベッドにもたれていた。そしてそれを確認すると同時に冷たい風が髪の毛を揺らす。

「さっぶ！ おまえなんで窓開けとんねん！」

「……よう、服部」

俺は返事はせずに窓を閉めてヒーターのスイッチをいれた。どのくらいこの状態なのかは知らないが、このままでは風邪をひいてしま

う。

「おまえ、相変わらず突然くんのな」

工藤はくぐもった笑い声をあげてこちらを見上げた。

「おまえが電話でーへんからやろ」

「電話？」

俺は大阪に帰ってから何度か工藤にコールしていた。始めのうちは応答していたものの次第に繋がりにくくなったのだ。

「だいたい、今は電源も入ってへんやんけ。」

「そうだったけ？」

工藤はベッドの上に放り出されている学生鞆から携帯電話を取り出した。

「あ……わりい、電池切れてたわ」

工藤はゆらりと立ち上がると、ベッドサイドのテーブルに垂れ下がっていた充電コードを携帯に差し込んだ。埃をかぶったテーブルの

上にひとすじの線が刻まれる。いったいいつからバッテリーが切れているのか。

「おまえなあ……」

「なんだよ」

呆れた俺は文句のひとつでも言ってるつもりかと思っただが、青白い顔を見たらそんな気は消え失せた。

「工藤、おまえ……」

「ちよつと頭冷やしてただけだよ」

先読みされる。

「……なら、えーんやけど」

工藤は落ちるようにベッドに腰かけると、横にあった毛布にくるまった。

「で、灰原には会ったか？」

「おー、それやそれ」

俺は彼女にも説明したことを工藤に話した。昨夜、阿笠博士から彼女の無事を伝えられたこと。学校帰りにこちらに来たこと。彼女に会いに行ったこと。ほぼ同じ内容の事柄をまた伝えるのは面倒ではあるが、こんなことは慣れている。

「ふーん……。それで、あいつ何か話したか？」

「いんや。今日はもう疲れたから寝る言うて、工藤に聞け言われた」

「んで、おまえは俺んどこにきたわけか」

「ああ」

工藤は肩を震わせながら笑った。

「そいつは残念だったな」

「へ？」

「だって俺、何も知らねーもん」

「はあ!？」

「ていよくあしらわれたんだよ、おまえは」

どこか得意気な様子なのはなぜだ。

「灰原が今までどこにいたか、今まで何をしていたのか、俺はあいつから何も聞いてない」

「なんも知らんて………どういことやねん!」

「俺には関係ないんだとよ」

工藤は肩をすくめると、膝を抱えて首から下を毛布の中にすっぽりと収めてしまった。

俺はあっけらかんとした工藤に呆然となりながらも、先ほどよぎった疑問が大きくなるのを感じていた。

「工藤、おまえ何かおかしいで………」

「え？ なにが？」

ああ、彼女が無事だったのは本当に喜ばしいことだと思う。思っけれど。俺の知っている工藤なら。確かに彼女は帰ってきた。でもまだ問題は残っているはずだ。

いや、そうだ。そもそもなぜこいつは。

「組織のこと言ってるのか？ それなら大丈夫だと思うぜ」

「思ってる……」

「服部」

工藤は目を細めて背筋を伸ばした。

「服部、おまえはどこまで搦んでる？」

「……何のこと言っとんねん」

「とぼけんなよ」

工藤は一瞬言葉に詰まると言い辛そうに視線を逸らす。

「何で俺がおまえに来るなって言ったか、わかってるだろ」

「……まあな」

わかっている。危険だから来るなど。それだけではなかったことぐらい、俺だって。

考えへんようには、しとつたけどな。

「おまえの持ってる情報、教えるよ」

「あー、でもなあ……」

実のところ、あの事件に関しての有益な情報は流れてきていなかった。大滝警部にそれとなく頼んではみたものの、この件は管轄外のことだったし、あまりしつこくして勘ぐられるわけにもいかなかった。同様に鼻のきく親父に頼むなどもありえない。

「正直言つて、俺が知つとんのはその辺における噂好きのオバちゃんと変わらんわ」

「……そう簡単にはいかないか」

「ただな……」

「ん？」

「大滝ハン、本庁の知り合いにも色々探りいれてくれてな。まあ、たいした話は聞けんかったらしいねんけど……ちょっと気になる」と言つてたで」

工藤は足を崩して身を乗り出し、生気の宿った瞳を俺に向けた。

……ちゃんと『眼』は開いとるみたいやな。

「あの事件があつてちよつとしてから、変な奴が出入りしとつたらしいねん」

「変な奴？」

「そのひとが言うには、補充要員が来たぐらいに思てたらしいねんけど、どうもそいつ、配備されてからも対して仕事しとるようには見えんかったらしいわ。せやけど、上司はなーんも言わんと黙認しとつたんやと。いや、気づいてなかつたつて言うたほうが正しいかもな」

「ほー」

「口数も少ないし喋りかけても返つてくんのは生返事だけ。何を考えとんのかもよーわからん。ほんで極めつけには……」

「いつもマスクかなんかしててちゃんと顔を見たことがない、つてか？」

「……そういつこつちや」

工藤は毛布を顔まで引き上げると床に視線を落とした。ただ一点を見つめ、何かを考えている。

「そのひとも変やとは思てたらしいねんけど、あんなことがあつたしな。忙しいしとる間に忘れてもーとつたらしいわ。他にも応援の人間はきとつたみたいやし。大滝ハンに聞かれんかったら思い出さ

へんかったんちゃうか」

「ハッ……強引な奴だな」

「まあ、もしそいつがそうやったら、やけどな」

「……目的がわかんねーな」

「ああ……。でも、もうひとつの可能性もあるやろ？」

「もうひとつ？　なんだよそれ？」

「組織の奴らやんけ。もし連中を逃がしといたら……いや、もしかしたらそいつが組織の……」

「それはねーな」

妙に自信ありげに断言した。

「前に奴らとやりあったことがあったろ？　ほら、おまえに変装頼んだとき」

「あー……そんなこともあったなあ」

なんだか随分前のことのように思える。

「ベルモットは警視庁に潜り込んで調書をくすねてんだ。内部に協力者がいたらわざわざそんなことしねーよ。まああれは奴が単独で動いた可能性が高いが……はつきり言って、俺はそれより前から警察には組織の力が及んでないと踏んでたんだ」

「なんか確証でもあったんか？」

「灰原だよ」

「は？」

「あいつがピラミッドのどのあたりにいたかは知らねーが、ある程度深い情報に触れる位置にいたのは間違いないだろう。幹部だって言ってたしな」

いまいち話が見えない。

「それで？」

「俺と灰原がどれだけ警察に出入りしてると思う？」

ああ、そういうことか。

「……なるほどな。仮に奴らと御上に繋がりがあるんをねーちゃんが知つたら警察には近づかへんやろーし……」

「知らないなら知らないで近づかないだろーな。どこに奴らの仲間が潜んでるのかわかんねーんだから。つまり、あいつは知ってたんだよ。組織がどこまで八バきかせてたかをな。まあ他にも理由はあるけど、あいつの性格とかを踏まえればこれがアタリに近いと思う。あいつが何も知らねーんだったら、それこそずっと家に閉じこもってただろーし」

「小学生として過ごすぶんには、安全なんはわかつつたちゅーことか」

「そゆこと。もしつるんでたとしてもそこまでの力はまだなかったんじゃないか。呑口の件もあるし」

「そうやとしたら……ますますわからんな。連中の目的が」

「すでに組織の存在を知っていたか……混乱に乗じて別件の調査をしていたか……」

こればかりは推測の域をでない。ひとまず保留する。

「ほんならもうひとつ。おまえは組織がどうなった思てんねん。えらい悠長にしとるけど」

「詳しいことはわかんねーけど、奴らが機能しなくなったのは確かだと思っぜ」

「根拠は？」

工藤はするりと毛布から抜け出し、反動をつけて勢いよくベッドから飛び降りた。

「……おまえ灰原と会ったんだろ。どうだった、あいつを見て」

「どつって……びっくりしたけど……」

「どつして？」

「そらいきなりおつきなつとつたらびっくりするやろ」

「そう……あいつは戻ったんだよ。元の身体に……。これ以上ない答えだろ？」

窓から外を覗くその横顔が、僅かに歪んだ気がした。

「あいつは元の身体に戻ってここにいる。組織の目を気にする必要がなくなったってことだ」

「そらまあ……そうかもしれんけど」

「少なくとも、奴らに深刻なダメージを与えたことは間違いないさ」
「……………」

言うことはわかる。だが俺はどうにも腑に落ちない。

「納得できねーって顔だな」

工藤は半笑いで振り返った。

「こんなちゅうぶらりんなまま終わらせて、おまえは納得できるんか？」

「…………正義のヒーローになるつもりはねえよ」

「せやけどやなあ…………」

「なあ、服部」

低く響いた声に、さっきまでの勢いはなくて。

「何も隠し事はないなんて……そんな人間いるのかな……？」
「ええっ？」

いきなり何を言っている。

工藤は目を伏せると、また窓の向こうに視線を投げた。隣家の照明はすでに落とされ、街灯の光で薄らぼんやりと浮かんでいる。

「何かワケがあんだよ……あいつにも、母さんにも、博士にも……みんな一緒だ」

噛み締めるように。自身を諫めるように。自分に、言い聞かせるように……。

「俺が……蘭にしてきたことのようにな」
「……………」

工藤が何を思い、何を言っているのか。正直言って、俺にはよくわからなかった。でも。ああそうだ。こいつだって、簡単に納得なんかしているはずがない。

「…………それが、頭冷やしとった理由か？」
「さあ…………どうかな」

工藤は大きく背中を反らせて息を吸い込み、まるで溜め込んだ不満を吐き出すかのように長い息を漏らした。

「メシ、食ってくださる？」
「ん？」

「メシだよメシ、晩飯。つっても、たぶんおまえのぶんももう用意してるだろうけど」

どうやら話は一旦終わりらしい。

「おまえんちでご馳走になったことはあるけど、おまえが俺んちでつてのはいないしな」

「あたりまえやろ」

「そらそーだ」

軽いノリのやりとりに、前に会ったときとはまるで別人のようだと苦笑する。工藤はそんな俺の様子に気づかず厚手のセーターに袖を通している。

そういえば、と思い出す。それどころではなかったので聞けなかったことがあったのだ。

「工藤、おまえ探偵事務所のねーちゃんとはどーなってんねん。どーせちゃんと話もしてへんねやろ？」

今まさにセーターから出ようとしていた頭がピタリと動きを止める。もごもごと蠢いたあと、無味乾燥な顔が出てきた。

「……………どうなんだろうな」

てつきり顔を赤くしてなんだかんだと反論してくると思っていたのに。しかし工藤の反応は肯定のそれとも違う。明らかに雰囲気か。

何か。何か。俺の頭の中でちらついている。

「服部」

工藤はカーテンを閉めようとして途中で手を止めた。

「おまえさ、ここにくるまでに……」

「来るまでに？」

「……いや、なんでもない」

「…………おい」

似たようなことを聞かれた気がする。それもついさっき。

「おまえ、まだなんか言うてへんことあるんちゃうやろな」

「なんでもねーって」

工藤はへらへら笑ってみせると、今度こそカーテンを閉めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6389m/>

get back

2011年11月27日00時55分発行